
涙 八年後 笑顔 ～あめ のち はれ～

六月一日 一休

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙 八年後 笑顔 ー あめ のち はれー

【Nコード】

N3880J

【作者名】

六月一日 一休

【あらすじ】

虹髪的英雄 の死から八年。この日も世界は当たり前の日常として過ぎていく。 槍殻の黒蜘蛛 は王都で。 宴会の奏者 は若き仲間達と。 冒険王 は愛しの孫達へ。 番犬 は彼の地に留まって。 新たな生き方だったり、相変わらずだったりする姿がそこにあった。そして、北の地では、“あの子”も、また――

s c e n e 1 - 1 / 2 槍殻の黒蜘蛛 (前書き)

この小説は、だいふくさま1号 復活フラグのわくわくは結局ブラフだったガツカリに八つ当たりを失敗へ負けず嫌いが裏技でお送りします。

scene 1 - 1 / 2 槍殻の黒蜘蛛

「西シュレイド王国王都ヴェルド外街の私営酒場 どうぶつのさかもり」

酒場に男が二人いた。

深海色の髪をピチツと七・三で寝かせ、横に流した前髪は冗談みたいにかールしている ノーブルシヨート、傍目からでも高価と分かる上品な黒い服装を着ている方は、歳の頃は見た目二十代前半といった所。だが、中性的な顔立ちのその男の実年齢を数えるには外見より十程足さなければならぬ。

砂漠の街の貴族スパイダー家次期当主、サイト・スパイダー。

彼は、只でさえ広い酒場に他に客がいないせいからさらに広く感じる物寂しい店内を、僅な思い出に残るハンター時代の四六時中喧しい風景と対比しながら眺め、目を細めて吐息を漏らす。グイッと口に付けるのは庶民の味・ホピ酒だ。

こんな外街の酒場よりも内街の料亭にいる方が余程相應しい格好をしているクセに、若き血潮に滾^{たぎ}っていた頃に肌身に染み込んだ空気が味は、最近頓^{とみ}に出席させられるようになった社交の付き合いで振る舞い振る舞われる最高級の黄金芋酒に格式張った豪華絢爛高級料理フルコースばかりを食していると、時々無性に恋しくなる。

だから、こういう付き合いもできる相手はサイトにとつてとても貴重だった。

心洗われるような気安い味に人心地つき、サイトは向かいの席に着く男に目を遣る。

歳はサイトの外見年齢と同じくらい。爽やかに刈り上げた髪と意志の強そうなはっきりとした瞳は、サイトの纏う黒とはまた違った感じの静かな高貴感が漂う漆黒。顔立ちも生まれの良さが一目で分かるくらいに整っていて、その雰囲気にはどこか猛禽のような鋭さ

があつた。薄い青を基調とした、風流を感じさせる服装は高価な東洋の民族衣装だ。どうも元々は東洋から渡ってきた血の流れを汲むらしく、彼は好んで東洋の衣服を纏う。

シュレイドを本拠点にこの大陸全土を又に掛け、その貿易の手は大洋をも越えるという大商會を擁する貴族・エイトテイルス家の次期当主にして、王都ヴェルド外街の私営酒場　どうぶつのさかもり　仕掛け人兼オーナー、エモン・エイトテイルス。

同じような立場同士の二人は丁度八年前に交わした商談をきっかけに、後の食事の席で意気投合。以来、サイトが行商で西シュレイドを訪れる度にこのエモンの酒場で、空気を読む意思の無い服装で安酒を酌み交わす間柄となつたのだった。

「しかし、やはり慣れませんねえ、静かな酒場というのは。逆に耳が痛くなりますよ」

「ふん。我輩には朝から晩まで騒ぎ倒すような連中の氣の方が知れん」

そこはかたく棘のある返事をくれたエモンに、サイトは苦笑した。

「僕も嘗ては、その氣が知れない連中の一員だっただけだね」

「……そうであつたな。失礼」

あまり誠意の籠もつてない謝罪だが、サイトは氣にしなかった。そもそも都市部の人間にハンターの感性を訴えた所で暖簾に腕押しなのだ。特に近頃のこの男には。

「それに、誰も一日中酒場に入り浸っている訳ではありませんよ。

まあ、稀にそういう方もいますが、ほとんどの方は取っ換え引っ換えです。一度出ていったら何日も顔を見せないなんて事も珍しくありません」

「そのまま二度と帰つて来なかつたりな」

さつきから目を合わせずに返すエモンに、サイトはやれやれと肩を竦めた。ちよつと切り口を変えてみる。

「それにしても、大陸中の拠点を回つていて思ふのですが、やはり

シュレイドの都市は空気が違いますね。安心感の質が違ふというか、生活の土台が堅固というか」

「ただの平和ボケだろう」

相変わらず目はそっぽを向いている。しかしエモンはようやく自分から続けてくれた。

「都市部の人間にモンスター共がいかに脅威かを説教してやった所で、誰も真面目に受け止めやせん。特にこの街の内街にいるような者達は。我輩だって例外ではない。我輩は王都から出た事がないからな」

「そういう意見は、内街の他の方からはあまり聞けませんけどね」

「それは我がエイトテイルス商會が商品を素材から扱っているからだ。流石に生の現物を目にして一笑に付す程の愚鈍な神経は持ち合わせておらん。だが、実感はない」

「確かに、大半の内街の方々は出来上がった商品を目にするだけですもんね。それに使われている素材が元は何だったかなんて、露出していても気にしないでしょう。“辺境”の砂漠出身の僕からすれば、逆に品を見ると元の生きていた姿を想起させられるものですが」

「『リオレウス』革のバッグ、『ドドブランゴ』毛のコート、『シヨウグンギザミ』殻の耳飾り。そういう生物の名前くらいは知っているが、どれも我らにとってはブランド的な意味しかない。“辺境”で新たな脅威が発見された時、連中が必死に対抗策を講じている間に、我らは新規ブランドの登場に心を躍らせているのだよ」

“辺境”を認識しているだけ、貴方は世界を理解してますよ」

少々上からのような物言いをしたサイトに、それまで一度も顔を向けてこなかったエモンが一瞬視線を向ける。カチンときた、というよりは、表面だけは理解している、しかし納得はしていない、といった目だ。

「世界の主は、未だ自然か」

「ヒトが世界の主になる時代なんて、僕には想像できませんけどね」

ふん、とエモンは窓に目を向け、呟いた。

「想像ならできる」

視線の先には、王都ヴェルドの内街を囲む、物々しい城壁が聳^{そび}え立つ。

「この街のような世界だ」

城塞都市とも呼ばれる王都ヴェルドは西シユレイド地方最大の都市だ。街は栄え、人々の活気に連日賑わう。“辺境”の人々が日々脅かされているモンスターなどここでは無縁だ。そもそも何故かあまり強力なモンスターが現れない地域であるのに加え、街の全方位を物々しい城壁が囲み、そこから覗く大砲やバリスタが周囲に睨みを利かせていて、城壁を乗り越えんとする脅威を跳ね返すからだ。街の住人はこの世界には自分達の命を脅かす存在なんて何も無いと信じ切っていて、何故自分達の街がこんな物々しい城壁に囲まれているのかすら具体的な疑問に思わない。王国が誇る王立学院の書士が語るような“辺境”で活躍するハンター達の話など、ここでは大抵どこぞの誰かの“創作”という認識で伝わっている。それくらい平和なのだ。

ただし、それは城壁の内側、経済力のある富裕層だけが住める内街の話。

内街に住めるだけの経済力がない貧困層は城壁の外、外街と呼ばれる区画に住む。建物は薄汚れ、道は所々割れていて、全体的に重暗い空気が漂っている。内街を完璧に守護する城壁の砲門も、自力で城壁を越えられない小型のモンスターまでは全ての面倒を見切れない。度々外街に侵入してくるモンスター達の被害は少なくなかった。

「この街は人が主役になった世界の縮図だ。内街の者達は城壁の外を知らない。たった壁一枚隔てた先にも人がいるなど考えもしない。外の者達がどんな環境でどんな生活をしているかなど視界の隅にも映した事がない。人が支配する世界は、そういう世界だ」

「何故、貴方は外街で酒場を開いたのです？」

本来は内街の住人であるハズのエモンにサイトは問う。エモンは

相変わらず窓の外に目を向けたままだが、視線が少しだけ動いた。城壁の背景には、朱色^{あけ}を真横から受ける雲があった。

「我輩はいずれ、大洋をも越えて交易を為すエイトテイルス商会を統べる者だ。本当の世界の広さは、恐らくサイト殿よりも知っている。この街など、世界のほんの一点に過ぎない。その一点すらまともに見渡せなくて、どうして世界を相手にできよう」

外街の住人はモンスター達の脅威を知っている。ただしそれも“辺境”と比べればやはり高が知れている程度のものだ。外街の住人達にしたって、繁殖期にのみ『イヤンクック』のメスから採れる羽毛、クックファーを使った品の認識はそういうブランドのただの高級品だ。

「だから作ったのですか？ 王都でも王族の寵愛に預かっているエイトテイルス家の次期当主ともあるう者が、この外街に出入りしていても不思議にならない理由を」

言われ、エモンは少しだけ嫌そうな顔をした。

「王家が我が家^けを気に入っているのは我が商会が海外から珍しい品を仕入れてくるからだ。それを本家が王都にあるからと、希少な品を独占した気になって王国に多大な貢献をしたと彰し貴族に祭り上げた。本来刀の技を極める旅の途上に海を渡ってきた我が祖先ミギワ・エイテツサイに、航海術の教えを請うて航海交易を始めたのも、この地に祖先を留めさせる為商会の長の座を押し付け家を与えたのも、元からこの国にいた他の者達なのにな」

エイトテイルス家の者達は姓で呼ばれる事を嫌う。

何故ならそれは、昔のシュレイドの人達が発音の違い等から『エイテツサイ』の名を聞き間違えた事で付いた名だからだ。

それ以前に、東洋では姓が前にくる。真の名は『水際^{みぎわ} 衛鉄斎^{えいてつさい}』。彼が海を渡ってきたのは、その辺の相互理解もまだない時代だった

……

ただ、何故それが今や生粋のシュレイド人となった子孫に伝わっているかといえば、衛鉄斎が刀争術の修練日記と共に認^{したた}めていた「

今日の物申す帳」なる物に、ウジウジグチグチと「今日も正しい名前前で貰えなかった。しくしく（ノー；）」やら、「憧れのベツキーちゃんにまで間違えて覚えられてた！ もうダメポ（++）」などと書かれていたからであり、上流貴族なんて地位を築くに至った初代をできれば尊敬したい子孫一同はしかしたこの一点だけでとても……とても！ こんなヤツ敬えない！ という切なさの反動が聞き間違えてくれやがった昔のシュレイド人とエイトテイルスという姓に向かっているのだ。

幸か不幸か家も商会も大きくなりすぎたお蔭で、祖先の情けない一面の発端となったこの名前をそうそう変える事もできなくなり、今も彼らはエイトテイルスを名乗るのだが。

「我等が血筋は元々余所者の血だ。そして今や貴族である前に商人支店は大陸全土に点在しておるし、各所で扱う品々はその土地に合わせて売れる物を割り振っているだけよ。体裁など初めから気にしておらん」

「しかしそれなら、こんな酒場を態々（わざわざ）作らなくても、外街の様子くらい見られるでしょう」

「……ふむ、酒がぬるくなった」

サイトの声を聞きながらジョッキに口を付け、エモンがボソリと眉を顰める。

言われてみればサイトの持つジョッキも、飲まない内に結露が消えていた。

エモンはゴンゴンとジョッキでテーブルを叩いて、“妙に遠くにいる”給仕達を言外に呼び付ける。パタパタとオーナーの下にやってきた、ウサギミミの力キューシャを付けた給仕の娘は手短なエモンの注文を受け、すぐにパタパタと立ち去った。

そうしてからエモンはようやくサイトの質問に答えた。

「我輩は外街を知る為にこの酒場を作ったのではない。ただ外街を知るだけなら、散歩するだけで十分」

「それ、危なくないですか？ 身分の高い方が気軽に散歩するには、

この外街の治安は不安な気もしますが」

「我が家の跡取りは代々 ミギワ刀争術 を修める。外街に侵入してくる程度のモンスターやヒトを襲わねばならんような連中など問題ではない」

「刀を持ち歩いてるようには見えませんけど」

「無刀流というものもあるのだよ。流石に対人にしか通じんが、モンスター相手なら我輩は内街に引つ込めばよい」

「貴方もつくづく内街の方ですねえ」

「王都の貴族だからな」

そこでさつき注文を受けた娘とは“別の”、ネコミミのカチューシャを付けた給仕の娘が冷えたホピ酒を二つ持ってきて、ぬるくなつたものと交換すると逃げるように去っていく。

ピュー、と離れる給仕を半目で見送るサイトに、エモンが相変わらずそつぽを向きながら、

「サイト殿が隊商を率いて大陸を行商しているように。我が家の跡取りは何でもよいから一つ店を自ら構えるのが仕来りだ^{しきた}」

と前置いてから尋ねる。

「“辺境”にはないのだろう？ 同じ街の中で、人が立場によつて住み分けるような所は」

「……まあ、“辺境”に限らず、シュレイドでも僕はここ以外そういう街を知りませんね」

竜人族の里はまた話が変わるようですが、と付け加えるサイトの声を聞きながらグビグビと一気に冷たい酒を三分の二程飲み下すエモン。それから息も継がずに口を開く。

「内街は恵まれすぎている。その平和を当たり前のように享受している我輩が言えた義理ではないのだが。どうも我輩にはこの住み分けに疑問すら抱かない社会が気に食わない。または、話でしか聞いた事がないが、ヒトが皆人種も性別も職業も関係なく入り乱れて生を分かち合う“辺境”の連中の生き方に憧れているのかもしれない。だから我輩は壁の内も外も関係なく、“辺境”のように、ただ一日

の終わりを無事迎えられた幸福を皆で喜べる場所を作ってみたいと思つた」

「そうして仕来りに沿う形で、外街にありながら王都で一番人気の酒場を築いた訳ですか。そういえばあちこちで栄えてますよね、貴方の家のその仕来りから生まれた店舗」

「仕来りを他所の街でこなした祖先はいても、外街で持ったのは我輩が初めてのようだがな。外街の者達は内街に入れないのだから仕方がない」

「何にしたって、いやゝ立派ですよ」

実年齢が一回りも下のエモンを素直に称え、サイトは改めて店内を見回す。

エモンが私的に経営する酒場　どうぶつのさかもり　は随分風変わりな酒場だった。

店内には様々な動物のシルエットを象ったテーブルと、それを囲むように配置されたこれまた何かの動物の尻尾や肉球付きの足を模した椅子が深い森の木々然と変則的に、けれど見渡してみれば不思議と整然に見えるように並んでいる。二人が着く窓際のテーブルも狐のシルエットをしていた。

およそ酒場という場所には一聞馴染まないようなお洒落で可愛らしいそれらはしかし絶妙な配色と雰囲気をして見事に“酒場”としての自然さを醸しており、給仕の娘達の制服もなんかそれだけ見ればどう見ても誰かの趣味全開としか思えないもこもこだったりふわふわだったりおまけにアニマルミミカチューシャ着用なのだが、完璧に当店の趣向の一部として溶け込んでいる。

まずは流行の発信者となり易い内街のお嬢様達を呼び込もうという狙いから進めた趣向だったらしいが、これが思いの他壁の内外問わず万人受けし、そのまま突き進んでみた所労働後の憩いの場として若輩の使い走りから年配の親方まで幅広い支持を得て、今では外街はもちろん内街からも多くの労働者が態々城壁を出て飲みに来る程の、王都で一番人気の酒場へと成長したのだった。余談だが、他

では着られない可愛い制服が評判になり、ここで働きたいと若い娘達がどしどし応募してくるようにもなったので、従業員にも困らなくなった。

これらの現象を一から仕掛けたのが目の前でムスツと安酒を傾けている目付きの鋭い青年だとは俄かに信じ難いが、斯くしてエモンの目指した『王都に於いて城壁の隔たりがない酒場』が実現したのだった。

ミナガルデやドンドルマでは象徴的な、ハンター達が昼夜問わずひっきりなしに出入りするハンターズギルド直営の大衆酒場とは違い、ハンターのいない都市部の酒場の例に漏れず どうぶつのさかもり も主な客層が朝日と共に目覚め日暮れと共に仕事を終える街の労働者である為この時間ではまだ閑古鳥が群れを成して囀^{なえず}っているくらいに人気が無いが、あと二時間もすればハンターズギルドに負けないくらいの喧騒で溢れ返るだろう。

「一番の人入りの時間になると、ここでは故郷に帰ったような気分になります」

「……いや、まだまだよ。壁の内側が世界の全てと勘違いしている者は跡を絶たない」

尚、店内は終日無礼講である。自らの権力を笠に着る言動を取った者はたとえ王族でも容赦なく外街の街道に叩き出される。

「“辺境”にだって自分が世界の主役だと勘違いしている方はいなくもないですから。気にする程の事ではないですよ」

「む……そうか」

エモンは微笑み掛けて称賛してくるサイトから表情を隠すようにジョッキの残りを飲み干した。どこか慌ててジョッキを口に持っていったエモンの頬が直前に綻び掛けていたのをサイトは見逃さなかった。

エモンは空のジョッキを、あからさまに意図的に付近に近付こうとしていない給仕達に示して、一人がそそくさと動き出すのに目を向けながら不機嫌そうに、

「尤も、“辺境”の話もどこまでが現実なのか我輩には分からんだが」

「うゝん、貴方の目の前にその実物があるんですけどね」

「サイト殿の話も、我輩はほとんど話半分に聞き流しているのかもしれないぞ」

「酷い事言いますね」

「仕方なからう。信じられんものは信じられん」

それはエモンが、都市部の人々は外街の住人でも『者達』で呼ぶのに対し“辺境”の人々は『連中』と括る所からも窺^{うかが}える。“知っている”のと“実感がある”のは別なのだ。

ただ、それにしてもエモンが若干“辺境”に理解的なのは、もう一つ決定的な理由があるのだが。

サイトは敢えてそこに突っ込もうとはしない。どうせあとで嫌でも話題になるだろうから。

そうこう話している内にトラミミの給仕が追加の酒を持ってきてやがて日が暮れていく。

どうでもいいが、その間やって来る給仕は一々違う娘だった……。

s c e n e 1 - 1 / 2 槍殻の黒蜘蛛 (後書き)

……ここに色々書いたのですが、『キーワードは10文字以内にしてください』とか出て、あらずじやら前書きやらと一緒に根こそぎ消えてくれちゃったので、もうメンドーだからいいです……

あ、s c e n e 1 後半に続きます。数日くらいしたら更新すると思います。

あゝあ。

scene 1 - 2 / 2 どうぶつのさかもり (前書き)

砂漠の街の貴族さんの話というより名前間違われた貴族さんの話になっちゃった気がしなくもないのよ。

いや、ホントは16か17くらいまで勿体振ろうと思ってたんですが、まだ一話しか投稿してないのに当日感想くれた方が二名もいるし、お気に入りしてくれた方まで一名いらっしやるようで、意味も無くお待たせするなんて一休何様だっと思ってたんで更新します。

まあ、一応狙いはあるんですけど。よくよく考えたら余計だったかな、とか。寧ろムダだったかな、みたいな。

どうせ不定期更新って宣言してるし。

という訳で。

いつも通り文字数爆発起こってるんでご注意下さい。

軽く前半の二倍を超えています。

文字数でなくて場面で分けたので、こうなっちゃいました(てへ

……もう文字数は気にしない方針でいこうかな。

scene 1 - 2 / 2 どうぶつのさかもり

人が入り始めてからドカツと洪水のように人の声が爆発するまで
その時間は掛からなかった。

一商人として見習うべき所が多くある酒場は、やはり都市部的な
喧騒よりも故郷のバカ騒ぎに近いと思う。

自然高揚してくる気分を感じながら、

「まあ、楽しくやっていいるなら結構な事じゃないですか」
苦笑混じりに、サイトは諭す。

大体こうなるんじゃないかと思って色々エモンの気を持ち上げて
みたつもりだが、果たして如何ほどの効果があったものか。

正面に座るエモンはテーブルに突っ伏し、啜り泣いていた。

愛しい人を掻き抱くようにジョッキを抱き込み、あまつさえ頼ま
で押し付けて。おいおい啜り泣いていた。

二人でいたまでのエモンはどこにもいない。しっかり出来上がった
エモンは、

「ああ、いいとも。確かに、楽しくやって、いる事は、手紙からも
ひしひしと、伝わってくる。あの子が、心の底から、笑えているの
なら、それに増す喜びは無い」

ウジウジボソボソ。そして次の句は傷心した乙女のように、

「でも、だからって、兄の誕生日くらい、顔見せに帰って来てくれ
てもいいじゃないか」

「うわ」

泣きじゃくる。

折角の男前も台無しである。静かな高貴感とか猛禽のような鋭さ
とかは跡形も無い。

……もはや別人のようだった。

サイトはまあまあとエモンの肩に手を置いて慰めてやる。エモン
はイヤイヤと首を振った。

「ほんの少し前までは……そうサイト殿とお初にお目に掛かった頃
くらいのナナちゃんは……いつもお兄様お兄様とニコニコしながら
後を付いてきてくれていたのに！それがここ二年以上会えてすら
いないなんて！手紙だけじゃ寂しいじゃないか！手渡してもな
い誕生日プレゼントなんかで悩んでくれなくていいんだ！だから
一の億分の一秒だけでも兄の傍へ帰ってきておくれ……！」

そんなたったの一億分の一秒だけ帰ってくるなんて逆に難しい話
だが、仮に一億分の一秒だけ傍に戻って来られてもとても認識でき
ないでしょう、と下らないツツコミをする気にはなれない。この男
は全身全霊の愛でそんなもの何の障害にもならないとばかりに、愛
しい姿を網膜に刻み付け永久保存とかし兼ねない。

何だかんだ言いつつ。

エイトテイルスの一族は。というかエモンは。

濃厚に衛鉄斎の血を引いているのだった……。

「やれやれ、ナナさんの出立を手引きしたのはあなたじゃないです
か。そんなに離れたくなかったのなら、何故そんな事をしたのです
？」

一度こうなつた以上は付き合わなければならない。

エモンとは八年の付き合いであるが、こつちのエモンに気付いた
のは、どうやら衛鉄斎の単身海を渡つて来た面が強く出てるらしい
彼の歳の離れた妹が実家を離れた五年前。

エモンが都市部の人間の割に“辺境”に理解的な最大の理由は、
最愛の妹が“辺境”で暮らしているからだつた。

実は結構ザルなサイトはムツスリ状態時から絡まれないように徹
底して最低限しか近寄ってこない酒場の従業員達を恨めしく眺める。
忙しく立ち回る彼女達は巧妙に一定の距離を保ち続けていた。

「仕方なかったのだ！ナナちゃんがあんなに真剣にこの兄を頼っ
てきてくれたのは初めてだったのだ！そりゃー内容なんか陸すつ
ぽ聞かずに二つ返事で引き受けちゃうつてもものだろう！冷静にな
つて事態を再認識し、事の重大さに気付いた時にはもう手遅れ！

やっぱ止めようなんて言える訳も無し！ 兄は…… 兄は全力で協力した…… この手から離れていく最愛の妹を…… くっ…… 涙を、悲しみを堪えながら…… 笑顔で…… っ！」

謹厳な仮面が剥がれたエモンは半端でないシスコンが全面に押し出してくる。

婚約者であつた姫との別れを惜しむ最終決戦出発直前の騎士のような苦悶の表情で俯いていたエモンは、バツと顔を上げ、

「サイト殿だつて妹君が居られるのなら分かるだろうこの気持ち！」

「……そう言われましても」

妹といつても双子だ。エモンのように年の離れた妹を持つ兄の気持ちは自分のそれとはやはり違うだろう。

大体、妹に家出の手引きを懇願された事なぞ無いというか。

寧ろ、サイト自身が家出気味にハンターライフしていた側の人間というか。

逆に、妹の方が若干ブラコン気味で頑なに付いて来て離れなかった為、兄として少し心配してたというか。

それ以前にエモンの例は特殊だと信じたい。

サイト、溜め息。

「だとしても、その後の資金援助は目に余ると思いますよ。聞き及んだ話ですけど、ナナさん、財力に物を言わせたハンターとしてのその筋ではいい意味でも悪い意味でも有名になつているみたいですよ？」

「ナナちゃんの身の安全を守る為ならどんな投資も惜しまない！」

噛み付く勢いだ。それが度を超えていると言っているのだが。

そういえば嘗てアルコリス地方の端の村にいた英雄も自分の子供達をこのくらい溺愛していたと思ひ出す。

どうして自分の周りにはこう身内を偏愛する者が多いのだろうか。もしかしてこれが普通なのだろうか？ 自分ももう少しアクティブに身内を愛した方がいいのだろうか？

「はーナナちゃんに会いたいー」

ぬいぐるみを胸に抱く少女宜しく、冷えた酒で結露し捲りのジョッキを掻き抱くエモンを見て思う。

いや、絶対こうはなるまい。

ていうか無理。

「そんなに会いたいのなら、いくらかやり方は有るんじゃないですか？ 会いに行く都合をつけるのはもう立場上難しいかもしれないでしょうけど、ハンターならいくらでも都合つきますし、帰って来て欲しいと素直に手紙の返事に書くとか――」

「それじゃー兄がナナちゃんに会えなくて寂しがっているようではないか！」

まさか違うとも言つつもりか。この様で。

言葉を途中で遮られ口籠ったサイトにエモンは畳み掛けるように「兄は兄として格好良くありたいのだ。妹に会えなくて寂しがっているなんて、とっても格好悪いじゃないか。兄として！ それはダメだ。兄は格好良い兄でいたい。そしてナナちゃんに頼りたい」「激しく手遅れの氣がしますが」

「うむ？ 何か？」

「いえ、何でもありません」

思わずボソツと零れた眩きがよく聞き取れなかったのか訊き返してくるエモンから、サイトはジョッキに口を付ける事で目を逸らす。そこでエモンも一息吐き酒を煽るが、プリーズギブミーバックマイナナちゃんの勢いは収まらない。遠くにいる給仕の娘を大声で呼び付けると酒の追加を命じ、抓みのホタテチップをパリパリしつつ、再開。

「ああ、兄の網膜に焼き付いているナナちゃんは一昨年春の姿のままよ。あの時は目を丸くした。既に十分天使にも負けなくらい可愛かったナナちゃんが、たった三ヶ月見ない内にさらに見違えるほどの美少女になっていたのだ！……あれから早二年と数ヶ月……ナナちゃんは最早女神も裸足で逃げ出す美少女になっているに違いない。そんなナナちゃんを……兄は、一目見ることもできないな

んて」

嘆くエモンを眺めながらサイトは話題の少女の事を思い出す。

実はサイトはナナとは片手で数え切れるくらいしか会った事がない。

それも、最後に会ったのはナナが王都を離れる前だったので、十かそこらの頃だ。その時点ですでにエモンはナナにデレンデレンだったが、まあ、思い出してみれば寧ろこうならない方が無理な気もしてくる。

初対面は八年前、エモンとの初商談の時。

経済的に重要な地域であるシュレイド地方のルートを任されるようになっていたサイトは、多少商人として自信を付けてきていた事もあり、満を持して大陸全土を又に掛ける大商会、エイトテイルス商会の本店との商談の約束を取り付けた。

そこで砂漠の街の貴族スパイダー家の次期当主だと名乗った所——恐らくエイトテイルス家当主の計らいだろう——出てきたのが一般の商人としてはやっと師匠の下を離れ一人立ちできるような年頃のエイトテイルス家次期当主、エモンだった。

やはり育った環境がすでに大商会を統べるような人物になるべくした環境らしく、一回り年下のエモンにサイトは内心舌を巻いたものだ。

だが当時エモンは どうぶつのさかもり も開いたばかりで、一人で商談に臨める程場慣れておらず、対しサイトは様々な土地で色々なタイプの商人を相手にしてきた経験があり、互いの利益を賭けた戦いはサイト有利で纏まりそうになっていた。その時だ。

二人の間に女の子が闖入してきた。

今でも鮮明に思い出せる。商談の席で浮かべてしまうのは三流以下の証である焦りの表情を目一杯晒して闖入者を追い出そうとする、なんかもう見てて商人としては落第もいい所なエモンと、彼の膝の上から頑として動かず、意志の強そうな光を放つ漆黒の大きな瞳でこちらを親の仇のようにじ——と睨み付けてくる、長い漆黒の髪

が綺麗な八才の可憐な女の子。

まあ今思えば経験を積んできたサイトに当時のエモンが話を有利に運べるハズがなく、エイトテイルス家当主が敢えてエモンにサイトの相手をさせたのは商売以外の狙いがあったのかもしれない。

ともあれ、もゝそこからはとても商談を続行できる状況ではなくなり、うまくいきかけていた商談を相手の不手際でオジャンにされたサイトはしかしナナの健気な姿に毒気を抜かれて苦笑しながら快くエモンを赦し、そこでお詫びにと誘われた　どうぶつのさかもりでの談話で立場が近い事からか馬が合い（その際エモンが友好の印にサイトに贈ったアクラ地方の値打ち物があるのだが、それは結果的にサイトにとって一生忘れる事のない惨劇に直結しているの、以来アクラ関連は特産品が大陸に出回りでもない限りお互い話題にしなくなる）、二人の関係はライバルであると同時に良き友という形で続いていく事になる。

なのでサイトは、ある意味でエモンと今の友好を結ぶきっかけになったとも言えるナナをそれなりに気に掛けていた。

飽く迄想像だが、最後に会った姿から成長した今の姿をイメージしてみる。

社交の集まりにいれば間違いなく注目の的になりそうな美少女にしかならなかった。

「なんか、感動の余り再開の一目で目が潰れそうですね、貴方」

「最新に見る光景がナナちゃんの姿ならば本望よ！」

「そうですか」

すっかり空返事になっているサイトだが、エモンは聞いていないようだ。構わず声高に妹讃美を一生懸命語っている。

サイトは聞き流しながらジョッキを煽った。

なんとなく、今回のエモンはなんだかいつも増して暴走している気がする。

実はここ最近エモンに元気が無いように思っている、話を聞く限りそれは愛しの妹が帰って来てくれなくなった事が原因だ

ったようだが、そういえば去年も誕生日にどうとかで落ち込んでいたような記憶があるし、どうも誕生日ネタが二年連続してついに心の何かが決壊したようだ。酒場の従業員が席に近寄ろうとしないのは、手に負えない状態のオーナーをこの時間だけでもサイトに丸投げしようとか考えているからかもしれない。

適当な相槌を返しつつホタテチップを抓んでいると、腕を振り上げて熱弁を奮うオーナーの視界になるべく入らないように近付いてきたイタチミミの給仕の娘が追加の酒と飲み干されたジョッキを取り換えにきた。

ここまでで一体、二人で何杯飲んだかも数える気も起きない。確かこの男は数時間前に朝から晩まで飲み明かすハンターの気が知れないと言っていた気がするが、正直、商人という人種も相当、大酒飲み。だと思う。一体今日何リットル飲んだ。

まあ、どちらにも当て嵌まるサイトも、止まらないエモンに付き合っ
て負けないくらい飲んでるので、人の事は言えないが。

と、よく見るとイタチ娘は以前来た時に見た覚えのある娘だった。サイトがそれに気付いた時、ふと彼女と目が合い苦笑される。

同時にほぼ空になりかけていたサイトのジョッキを見付け、視線で酒の追加を訊ねてきたのでサイトは首の動きでお願いした。ついでにこのシスコンの相手を手伝うよう要請してみたが、丁重に固辞されてしまった。

「——ムサシからの情報だつてアテにならん。彼奴は元々屋敷あやっの使用猫の中でも特にナナちゃんに肩入れしていたからな。まあ、故にナナちゃんに付いて行かせたのだが……これで手紙まで来なくなったら兄は、兄は………聞いているのかサイト殿」

「お酒のお代りきましたよ」

「ぬ、うむ。いつの間に」

そう言っ
てマシンガン
トークで乾いて
きていた喉を潤
すエモン。
正直サイトはし
っかり聞き流し
ていたが、聞こ
えてはいたので
、
リロードの間に
直前までの話題
を思い出し、再
びエモンが喋り
出す

前に口を挟む。

「ナナさんからの手紙が、最近また減ってきてるんですね」

言ってから、もしかしたらこのテンションはこの件も作用しているのかもしれないな、とサイトは思った。

「んぐ、ぶはっ。そうなのだ。何でも近頃獵団連中の何人かの様子がおかしいらしく、ナナちゃんは其奴らを心配して……兄へノ返事ヲ書ク余裕ガナイヨウダ。と、ムサシが報告してきた」

なんか一部声が少し恐かった。

このまま話が進むと下手に突いて爆発させてしまいそうだったのでサイトは敢えてそこには触れず、少しだけ方向転換を図る。

「しかし、前に手紙が減った時は、貴方喜んでいませんでした？」

「……。……アノ時ニコウナル可能性二気付クベキダツタ」

エモンのトーンが一気に暴落した。

あゝ、コレ、地雷かゝ。とサイトは後悔するも、他にどうしようもなかったのだ。仕方ない。

だってあっちからビュンビュン地雷投げてくるんだもの。

「向こうに行ってからナナちゃんは本当に心細そうだった。手紙は届くまで数日掛かるのに、兄の返事も待たず毎日送られてきたのだ。お供にムサシを付けてはいたが、拠点の連中とは馴染めなかったようで、最初の一年は一月居続けられずに帰って来ていたな。そして兄が出迎えてやると、本当に、心の底から安心したような泣きそうな顔をするのだ。……見ていられなかった。兄は手紙でも、帰って来る度にも何度も言った。もう帰っておいでと。もう“辺境”へ戻るのはお止めと。狩りを続けるのは構わないから、もう少し大きくなってから出直せばいいじゃないかと。でもナナちゃんは負けず嫌いで頑固な子だから、三日も経つとまた“辺境”へ戻って行った……兄は見送るしかない。ナナちゃんが戻ると言うのだ。ここで逃げたら一生、この程度で負けた自分を恨むと言うのだ。お金を止められても絶対戻る、そしてここにも二度と帰って来ないと言うのだ。何度も打ちひしがれて帰って来てしまいが、何度でもまた立ち

上がって立ち向かえる生き方を見付けたナナちゃんを、家が用意したレールの上を歩いている兄には止められない。しかし兄はナナちゃんを失いたくない。だから兄はナナちゃんの命をより確実に守る為にここからできる援助は惜しまない。だが、あちらでのナナちゃんの人間関係までは兄の手は届かない」

ここでエモンは溢れ出す感情を一度宥めるように酒をグビグビ飲み込む。

サイトは黙って聞いていた。ぶっちゃけ二年前に同じ話を聞いていたけど口を出さずに聞いていた。

「だから……二年前。ナナちゃんが手紙に『仲間ができた』と書いてきた時は本当に嬉しかった。頑張って耐えてきて良かったねと、手紙でも書いたが直接、会って褒めてやりたかった。その手紙を境に届く手紙が激減したが、それがようやくナナちゃんに向こうで居場所ができた事の証左のようで、兄も報われた気がした」

約二年前のこの場所の光景を思い出し、サイトは小さく笑って囁いた。

「本当に。あの時の貴方の舞い上がりっぷりは凄かったですよ」

首まで真っ赤にして頭をフラフラさせ始めたエモンも、二年前を思い出したのかフム、ウム。と頻りに頷く。
が。

「アノ時二気付クベキダッタ」

繰り返して、エモンはズーンと首を鎌げた。目の光がなんか虚ろ。

「ふ、兄離れというのは唐突にやってくるものなのだな……兄がナナちゃんと最後に会ったのが……その手紙から二ヶ月後……二年前の兄の誕生日よ。三ヶ月振りだった。元々天使のように可愛かったナナちゃんはさらに見違える程の、女神も裸足で逃げ出すくらい的美少女になっていた」

なんかさつきも同じ描写を聞いた気がするが、しかも微妙に時制がズレてる気がするが、相手は酔っぱらい。サイトは突っ込まない事にした。それよりもお得意の妹讃美にテンションが上がってこな

い彼に驚いていた。

そんなサイトの様子に目もくれず、エモンはどんどん深みに潜っていき、

「そして、そして、兄は、最早、ナナちゃんに必要じゃなくなっていた！」

グワツ！ サイトに身を乗り出す。自分も相当だと思いが、サイトは、

（……酒臭い）

思わず顔を顰めた。これだからザルはと自身の体質を呪う。

ジョッキを持つ手先まで真っ赤なエモンはアルコール臭を吐き出しながら、

「それまでナナちゃんの心から安らげる場所は我が家の^け屋敷だけだった。それが、あの日は、どこか落ち着かない様子をしていた。兄がどうしたのかと尋ねると、何でもないと答えたが、兄には分かった。ナナちゃんは一刻でも一秒でも早く『仲間』の下へ帰りたかったのだ。事実、あの時は嘗て一度も無かった事に、ナナちゃんは一夜だけしか留まらずに早々に行ってしまった。少しでも早く戻りたがっているように！」

「素晴らしいじゃないですか。それだけ良い『仲間』に出会えたという事でしよう。ナナさんが帰って来たのは、その出会いからたった二月しか経ってないタイミングのようだし、お互いを知り始めてきた頃ならなるべく離れたくないでしょう」

「ウム。そうだ。その通りだ。兄もそう思い、……とても寂しくもあったが、安堵していた」

こくこくと何度も頭を振ってエモンが同意する。……いつブツ潰れてもおかしくない動きになってきた。

大きく頷いてくるので、サイトは頭突きを喰らいそうになって首を引く。

「だが、アレ以降、ナナちゃんは帰って来なくなったのだ。兄の、誕生日にも、……プレゼントすら……ムサシの定期報告の……」

“おまけ”みたいに一緒に送られてきた。

二年続けて。

「あゝ」

としかサイトには言えなかった。何というか。あゝ。

「それでも手紙の遣り取りだけは月に二、三度で続いていたのに……
……今や唯一残された兄と妹のコミュニケーションなのに………だった
のに………」

エモン。ゆらと顔を上げ、据わった目でサイトをその漆黒の瞳に
映し、

「二ヶ月だ」

もう一度すつと息を溜め、

「二ヶ月」

繰り返す。

何が？ と聞かなくてもサイトはもうその期間の意味を先読みで
きていた。

エモンは、

「その手紙さえ、ナナちゃんの字で返事が返ってこない……。ムサ
シの定期報告に便乗して、兄の手紙の返事をザックリとムサシに書
かせて済ませるようになったのだ………」

グゲ~~~~~~~~ウー！

嘆息に失敗して、新手のモンスターの鳴き声のような大きなゲツ
プを吐き出す。

サイトは耳と鼻を塞ぎたくなるのをグツと我慢しながら返した。

「お仲間の様子がおかしいのでしょうか？ その方達をナナさんは凄
く心配していると、ムサシ君の報告にそうあったってさっき言っ
たじゃないですか。何か余程の事態がその方達に起きているんだと
思いますよ。……それこそ、“大切なお兄さん”への手紙の返事す
ら書く余裕がなくなる程の心配を、ナナさんにさせてしまうくらい
に」

なるだけ“大切なお兄さん”の部分を強調し、エモンの気分上昇

(……そろそろ、限界ですかね)

どっちの、かはあまり考えず、ふう、と溜め息。

もういいやトドメ刺そう。

「いやゝしかし、ナナさんももうそんなに大きくなっただんですね」
唐突なサイトの感嘆の内容が分からず、「ふぬ？」と訝しそうな表情になるエモン。

一流の商人になるには何時如何なる状況どんな場所でも素敵な笑顔を作れるようにならなければならない。

サイトはキラッキラの笑顔を作って続ける。

「だって、仲間の様子が変だと、気付く時点でその人の事をよく見ているって事でしょう？ ハンターは仲間を特に大切にする傾向があります、いくら仲間とはいえ他人としての距離があります」

元ハンターのサイトが言うと言得力はこの上無い。

段々エモンの顔に動揺が広がる。心の底では“その可能性”に必ず気付いているハズで、とても強く！ 意識しているに違いないが、全霊を込めて無視していたのだろう。

アルコールが回り切って真っ赤になった顔がブルブル震え出す。

追い詰められたヲニチャンを見ながらサイトは、

「加えて、重大な怪我を負った訳でも無く、言ってしまったえば様子がおかしいだけの仲間を心配する余り他の事に手が付けられなくなっている。これはもう……」

容赦なく、

「恋してるんじゃないですか。その様子がおかしい仲間の内の誰か、とかに」

ニコやかに最後の一石を投じた。

次の瞬間、バボン！ と爆発したようにエモンの顔から蒸気が噴き出した。比喻ではなく。

蒸気と一緒にアルコールも放出したのか何なのか定かではないが、

煙が晴れるとエモンの顔はさっきまでの赤が錯覚だったのではない
かと思えるくらいに蒼白としていた。目や口がシヨックでグルグル
ガクガクしている。

「そそそ、そん、そん、そんなナナちゃんがががなハズななな
ダダだ」

エモンから人語が吹っ飛んだ。しかし言いたい事は大体分かる。
おや、とサイトはイジワルな目で笑む。

「人並みの恋愛ですよ。貴族の誰もが一度は夢見る幸せをナナさん
ができています。貴方も望むところでしょう？」

そこがエモンの臨界だった。

「それと、これとは、話が別なのだ——！」

ノオオオオオオオオ！ とエモンは頭を抱えて仰け反ると、直
後、ゴガーン！ とテーブルに思いつきり頭突きする勢いで突っ伏
し、

「すぴー……」

寝た。

直前までこれでもかと喧騒の一部を担っていた男とは思えない、
健やかな寝息であった。

「やれやれ」

苦笑するサイト。これだけ派手に騒ぎ倒しても、周りに気にする
者は誰もいない。皆それぞれで好き勝手に騒いでいる。この辺は本
当に“辺境”にいるようだ。

「しかし、もし本当にそうだとしたら、きっと貴方はやっぱり喜ぶ
のでしょうね」

ジョッキ片手にお行儀悪く肘ひじを突き、サイトは優しいとも、哀し
いともとれる目で見事に酔い潰れた酒場のオーナーを見詰める。

ナナの話だ。トドメを刺す為にああ言ったが、実際強あながち的外れで
もないとサイトは思っている。だからこそ、エモンの反応も予想以
上に敏感だったのだ。

そして、過敏な反応の裏にそう望む気持ちがある事を、彼は否定

しなかった。

スパイダー家もエイトテイルス家も、規模は違えど同じ商業を産業とする貴族だ。いかに市場全体に巨大な影響力を持つと、その最大の根である広範囲での活動という強みを維持する為には、家一つの力だけではどうしても補えない部分がある。他所の土地で融通を利かすには、地元の権力者達との良好な関係は必須だ。

尤も、大陸のほとんどを占める“辺境”に住んでいる者達は、過酷な環境がそうさせるのか寛容な者が多く、“辺境”の貴族も例外ではないので都市圏上層部のようなドロドロした感じにはあまりならないのだが、やはり家同士が互いの信頼関係を確認する機会は必要で、その儀式代わりのような意味で最も明確且つ手っ取り早い方法として、政略的に婚姻が結ばれるケースは多い。というか、貴族にとってはそれが普通だ。

サイトも九才の時、知らない内に婚約を結ばれていた。なんかこの女の子と一緒に遊ばされる日が多いな、とか思っていたら、そういうことだった。大人の狙い全開の逢瀬に（これはサイトの主観だが）相手はまんまと乗せられ、物凄い好意をバシバシ向けて接してきてサイトとしては正直ちょっと苦手だったのだが、ハンターライフから強制送還された折彼女の真意に触れた事で満更でもなくなり、家督を継ぐ為の修行が軌道に乗ったらという当事者同士で改めて決めた約束を経て七年前に結婚した。今では娘も一人いる。

エモンにも婚約者はいるようだが、こちらは貴族の婚姻の縮図のような感じでダラダラ先延ばしにしているらしい。

そういう思惑のない結ばれ方をするには年頃の時期に家を離れているしかない。特に王都という都市部この上ない街に本拠を構えるエイトテイルス家の場合は顕著だろう。当人の意思が介在していない取り決めなんぞに正当性はなく当然強制力も発生しないのが道理だが、都市部の権力者の中にはこういった事に関して著しくモラルを欠いた家が少なからずあるからだ。

だが約束を結ぼうにもすでにそこに当人がいないとなればどうし

ようもない。

だからどちらにせよ、遅かれ早かれナナが王都を離れたいと言えばエモンは必ず支援していたハズだ。寧ろナナの場合は早ければ早い方が結果的には良かったのかもしれない。

（ナナさんが“嗜み”程度では満足できない程、狩りに関心を持てる性根だったのが幸いしたんでしょかね。エモンさんは以前『態々必要も無いのに身を危険に晒す意義が分からん』と言っていたまして、あまり狩りを嗜まないようですけど。でも可能性……いや、僕の希望的観測としては、お二人のお父様がそれぞれ“嗜み”に誘い始めた年の頃や獲物の質に差があれば、狙って跡取りを家継ぎに向かせ、娘には自由へ向かわせるといった誘導も……）

などとサイトは考えてみる。エイトテイルス家当主とは直接会った事はないが、なんとなく、エモンの語る話や風に聞く噂に、彼が関わる若しくは関わったと考えられる状況の時、何故かどれも特定の誰かの思惑通りに事が動いている気がするのだ。

とは言っても、

（いけませんね。僕ともあろう者が、直接会った事もない方に妙な先入観を抱いてしまっているようです。もう止めにしましょう。これ以上思索した所で余計に先入観が増すだけです）

相手は大商会のトップ。自分は高々やつと隊商一つ率いるだけの若造。

又聞きだけで人物を量るには何もかも差がありすぎる。

そう思考を切り捨てたサイトは周りの宴会染みた喧騒をBGMに抓みと酒を味わう。騒ぎの一部になるのもいいが、ぼんやり騒ぎに紛れているのもサイトは好きだった。

宴会。

このキーワードからサイトがある白い竜人の姿を浮かべようとした寸前、すぐ脇から声が掛かった。

「若。ただ今戻りました」

ふい、と顔を向けると、そこにサイトの腹心とも言える部下であ

り、同時にスパイダー家に仕えて次期当主の教育係を担っている竜人族の男が佇んでいた。

「おや、とサイトは口元に笑みを作り、悪戯っぽく言う。」

「この酒場は終日無礼講だそうです。貴方があんまり仰々しくしてると僕が叩き出されてしまうので、気を付けて下さいね？」

「その酒場のオーナーは酒に潰れたようですが」

「彼はいつもの事です」

苦笑しながらサイトは寝入った男の側にあった掴みの皿を引き寄せ、自らの腹心に隣の肉球を模した席を示す。「残り物で良ければですが」「頂きます」「それと、今日は若干注文がし難いですよ」「これだけ盛況ですからね」「いえ、そうではなく」「？」などと遣り取りしながら竜人が席に着く。

オーナーがいつ復活するか分からないと思っているのか、やつぱり給仕達は呼ばないと近づく気がないらしかった。エモンは潰れた後も前触れ無く復活する事がある。

気付かず、酒抜きでオンプウオの刺身を咀嚼し始めた、給仕が通った時に声を掛ければいいと思っっているに違いない腹心にサイトは問い掛けた。

「それより、奥さんの様子はどうでしたか？」

「相変わらずやる気があるのか無いのかよく分からない調合屋をやつてましたよ。まあ、会いに行くと嬉しそうにしてくれるので、若には感謝しています」

真摯に告げる腹心に、サイトはいえいえと謙遜した。

「貴方だけでなく、貴方の娘さんと御義母様にもハンター時代にはとてもお世話になりましたからね。折角シュレイドまで来てるんです。これくらいのお節介はさせて下さいよ」

「そんな。シュレイドまで僕を連れ出す為に、当代からこのルートを任せるよう直談判して下さったと思うと、お節介を焼かれた方は恐縮せずにおれません」

「その代わりミナガルデに置き去りにしちゃいますけどね」

サイトの切り返しに、竜人は嘖き出した。そして次のセリフに、サイトは何も返せなかった。

「確かに。その後でミナガルデから王都まで追い掛けて来る間、気がでない気分を味わわなければならぬ事を考えると、相殺でいい気がしてきました」

若に何かあつたら先々代に顔向けできません、と続ける腹心の声には、確かに今しがた若の何事もなかった姿を確認するまでの本気の心労が孕んでいるように聞こえた。

エモンも。酔っぱらって妹へ熱烈ラブコールを叫びながら、一貫して妹を心配する気持ちは揺らいでいなかった。

大切な人の様子が今どうなっているのか分からない、その気持ち。サイトには待たされる者の気持ちを分かった気にはなれない。

この兄の身を心配する一心で付いてきて、最後は自分より酷い重症を負ったレインと、連れ戻された時に出迎えた婚約者の顔を見て、自分がどれ程身勝手だったか思い知らされはした。

それは命を賭した戦いの中に身を置く者なら必ず理解しないといけない事で、一番分かっていない者が多い事。

だからサイトはまだ身体が全盛期にも入らない内に、家督を継ぐ為にハンターを辞めると納得した。

ものの、今もまた自分は彼女らから遠く離れた地にいる。

自ら進んで死地に突っ込むような真似をしていないだけマシ、という話ではないだろう。腹心が言うような気持ちを、未だ彼女らに課してしまっているのは変わりない。

「若？」

黙り込んだサイトを腹心が不審気に呼ぶ。サイトは胡乱な目で独り言のように呟いた。

「僕は、結局何も変わっていないのかもしれないですね」

隣で腹心が目を丸くしている。それを傍目にジョッキに手を伸ばそうとしたら、すでに中身が空になっている事に気が付いた。ふう、と息を吐いて手持無沙汰に空のジョッキを弄ぶ。

と、

「若は、日に日に立派になっておられます。当代も妹君も妻方も、そんな若を頼もしく、また喜ばしく思っていていらっしゃりますよ」

今度はサイトが目丸くする番だった。竜人の男の目をじっと見る。

そこには確かな、嘘偽りのない温かみのある光があった。

「そう……ですか。そうですね。すいません、今のは忘れて下さい。またこんな情けない事言っていたなんて知れたら、レインになんと言われるか」

それに、今は娘もいる。あの子の前では、情けない姿は晒せないな、と思うと、

（エモンさんのナナさんに対する気持ちは、どちらかということに近いかもしれませんか）

なんて事にも気付いた。年が離れた妹なら、もう娘に近い存在に感じるのかもしれない。

まあ、どうであれサイトにはあんなにオープンな狂乱はできないが。

エモンに目を遣る。ムニヤムニヤ言ってる男は、眠りながらどんな事を想っているのか……

「うっ、ナナちゃん……ぐすっ」

（……考えるまでもなかったですね）

思わず肩を竦めて苦笑した。

すると不意に、

「申し訳ありません、ウチのオーナーがご迷惑お掛けします」

そう声が掛かった。

サイトは、おや？ と、腹心は、やっと来た、という感じで、声の主へ視線を投げる。

腕に毛布を引っ掛けたイタチミミ給仕の娘が細い眉を八の字にして、店の誇るシスコンの傍らに立っていた。少々緊張しているように見えるのは、バカがいつ起き上がって来るかと警戒しているのだ

ろっ。

しかしこの娘はそれよりも職務を果たそうという気持ちが上回ったらしい。そつと丁寧な、赤子を優しく包み込むような、もう今日は起きてきませんように！　と真剣に念じていそうな手付きでエモンの肩に毛布を掛けると、改めて頭を下げてきた。

サイト、手を横に振って、

「気にしないで下さい。僕らは所詮タダ酒を頂いている身です」

「いえ、お金を払わない人は客じゃないですけど、オーナーが招いた方々は歴としたお客様です。全てオーナーのツケという事になっておりますので。承り遅れて申し訳ありません」

「あ。こっちは呼ばれた訳ではないのですが……」

「大丈夫です。オーナーにツケときますんで」

見掛けによらず辛辣な事を言うイタチ娘は恐縮する竜人にもキュピーンと星が一つ瞬くような目で言い切り、二人の注文を受けてお決まりのセリフを残すと賑わいの中に消えていった。

「というか若。一体いつから飲んでるんです？」

一緒に飲んでいたハズのエモンを観察しながら腹心が半目で訊ねる。ここにきてまだ酒を頼むサイトにイタチ娘の表情が一瞬ヒクツと崩れ掛けたのを彼は見逃さなかった。

「蜘蛛の巣に酒を流してもザルのように素通りしていくんだと、昔爺様が笑っていましたね」

ケロツと答えたサイトに腹心は眉間を摘んだ。

「その辺は先々代譲りです」

言ってくつくつ笑う。釣られてサイトも控えめな笑いを零した。

それから腹心は声の瀑布が絶えない酒場を見回すと、

「しかし、いつ来てもいい酒場ですね」

「ええ。僕もそう思います。ハルバ・サンドに帰ったみたいな気がしますよね」

「ハンター時代を思い出す、とまではいきませんか？」

窺うような質問。一拍置いて、サイトは窓の外へ目を向けながら、

「メタペタットに居た時は、こんなもんじゃなかったですよ。酔いが回ると即席トラップを乱作し始めるスミレさん、隙あらばスミレさんを口説こうとするトウウィンクルさんに、突っ掛かっていくクジャクさん、そうするとすぐに機嫌が悪くなるコルチエットさん、その脇でクジャクさんに話し掛けようとオロオロするレイン、そんなレインをからかう僕、意外とお酒に弱いハウンドさんと、酔ったハウンドさんに絡まれるガルシアさんとリチャード。最終的に暴走したスミレさんが手当たり次第にトラップを発動させて、遠巻きにしていた人達まで巻き込んで集会所にいた人達を一網打尽にしちゃいましたっけ。あの顔触れでいられた時間は長くありませんでしたが、楽しかったです。本当に」

聳える城壁の背景にある空は、内街の明かりを吸い込む暗い灰色の雲で覆われている。

だがそのさらに向こうでは、どこにいても変わらない煌く星空があるハズだ。

「……あれからもう二十年近く経ちますか」

あの時自分の周りにいた人々は、今は誰一人自分の周りにはいない。

中にはきつとどこかで同じあの空を見上げているかもしれないし、中にはもう二度と会えない星の一つになってしまった人もいる。

「やはり、ハンターとして生き続けたかったですか？」

質問を重ねてくる腹心。サイトは視線を戻し、今自分を取り巻く人々を見る。

エモン。この男と付き合っていると、今日のように非常に辟易する部分もある。それは他の商人を相手にしていても変わらない。中には、それが戦略なのか地なのかは分からないが、嫌味な態度を私的な場面でも崩さない者だっている。

ハンター時代は常に絶大な危険の中に身を置いていたが、それすらも楽しんでいた節が自分にはあり、総じて楽しい一時だった。今は。

「ふふ」

思わず笑みが零れる。作りではない自然の笑み。

腹心の竜人。ほぼ毎日顔を合わせる彼は、一番の従者であると同時に人生のほとんどで世話になっている自分の教育係。彼に助けられた回数は計り知れないが、実は同じくらい細かい所で母親のように小煩おたふしかったりする。

ハンター時代に比べれば今は、地味な戦いの中に身を置き、ウンザリする場面の方が寧ろ多い生活を送っていると思う。

けれど一日の終わりにはこうして、自然に楽しくなるのだ。

さあ。次はどんな商品売ってみようか。と。

「楽しいですよ。今も」

真っ直ぐサイトが答えると、腹心も同じ微笑みを浮かべた。

奥の方から万歳するように手にお盆を持って、人垣を掻き分けこちらにやってくるイタチ娘の姿が見える。

結局二人はこの日、酒に漬れた酒場のオーナーを回収できるくらいに従業員達の手が空くまで、この場に留まる事になる。

総じて。

商人としての生き方も、飽きる心配は無かった。

scene 1 - 2 / 2 どうぶつのさかもり (後書き)

あらすじからも分かると思いますがこの作品は5編で別々です。

つまり書く順番は気紛れでいいので書く時に書ける話から書いてます。

ただし短編集として並ぶ順番は決まってるので、次の更新がいつになるかは本当に分かりません。

できれば一月以内を目指したいとは思ってますが。

では、今年も宜しく願いします(↑前回消えたセリフ

【現在進行状況】

シーン1公開済み

シーン2徐々に構想中

シーン3現在執筆中

シーン4手付かず(爆)

シーン5真っ先に完成(「+」)

s c e n e 2 - 1 / 2 狩人塾【雛祭】 （前書き）

段々『虹髪』の後日談にしては『虹髪』分が余りにも少なすぎる気がしてきました。

でもよく考えたら主人公とヒロイン全滅してるので、仕方ないと言えば仕方ないんじゃないかな・とか。

脇役しか残ってないシリーズで後日談やるのは無理があると今更気が付いた一休です（何

尤も、肝心のシリーズ本編が全くの手付かずなのですが（――；）

scene 2 - 1 / 2 狩人塾【雛祭】

どこことなく地に足が着いてないような感覚がしてすぐに気が付いた。

なにより今自分の視界にはまぎれもなく“自分”の姿が映っている。幽体離脱したのでもなければ、これは夢に違いない。

場所は淡紅色から白に近い赤をベースとした装飾で溢れた街だ。

見慣れた自らの拠点がこのような様相を呈するのは春先の雛祭期間中しかない。どうやら何年か前のこの時期の夢を見ているらしい。

昔の事を夢に見ているなんて、老いたる・如き。私も歳を取りましたかねえ。

などと思いながら、さてこれは何年前の夢かと疑問すると、答えはすぐに見付かった。

「おい！ 本当に“ミカツキ”を狩った奴が出たのか！？」

「ああマジさ！ もう何十年も娑婆に出てきやがらねえからワシもすっかり忘れとったが、ついにあのヤローを仕留めたらしいぞ！」

「くっつ、やるじゃねえかそいつあ！ しかもそれがこの街で出るなんてな！ おい、一体誰なんぞでえ。その栄光を？^もぎ取ったヤツは」

「どうやらあの『死神』らしいぞ」

「ほゝ、あいつか。さすがだなあ」

「いやまったくだ。まだ若えのに、本当に大した奴だぜ」

などと言い交わしながら後ろから追い越し走り去っていく熟年の男達。周りも大体似たような話題で持ち切りだった。

「でも受注したのは 天剣 なんだってよ。またあの愉快なガキが『死神』を連れ出したみたいだが、今回ばかりはそれが大正解だったって訳だ」

「それで今 天剣 が“ミカツキ”の懸賞金バラ撒いて集会所で大はしゃぎしてるんだとき」

「なにい？ おいどうする？ そろそろアリーナでも新人女王が始

まる頃だろう？」

と、大規模な祝宴が行われているらしい集会所か、後夜祭の目玉ともいべき新人女王が開催されるアリーナか、どっちへ行くべきかと悩む声や、

「師匠、さつきから皆が騒いでる“ミカツキ”って、何なんです？」

「ん？ そうか、オメーくらいだと聞いた事もねえか。いいか？」

奴はなあ——」

と、“ミカツキ”がいかに凄まじかったか当時を思い出し語る声。この街に身を落着けてから十年以上経ったが、『新人祭』とも呼ばれる雛祭で、有望な新人女性ハンター以外の話題がここまで席捲したのは一度しか知らない。

二年前の 狩人塾【雛祭】 後夜祭。

そう。そして自分は『宴会』と聞いて、

考す余地なき・即断、で、集会所に向かったんですよね。

すると場面は一瞬で集会所へ。

そこでは凄い騒ぎが起こっていた。

宴会とあらば全力で盛り上げる事こそが自分の至上の楽しみである。新人女王にはこの拠点で活動する一ハンターとして気にはなるが、アリーナで行われるような、予め段取りも決まっあらかしていて盛り上がったのも一定の秩序に収まるべくしたイベント色の強い場では自分の盛り上げは寧ろ邪魔になる。

だから無秩序に無制限に大いに自分の腕を揮える集会所の方へ来たのだが。

目の前で展開されている宴会は、街中のお祭り気分を全部この場に圧縮したような、すでに手の施しようもないくらいの盛況振りだった。もはや席など関係無い。完全に立食大宴会場と化していた。

「これはこれは」

夢の中の自分が思わずと感嘆の呟きを零す。

気付けば自分も引き寄せられるようにフラフラと騒ぎの中に踏み入っていた。

皆、何故か手に手に雛祭期間限定スペシャルピーチ&雛霰パフエを持っていた。確かアレ一杯で下手な討伐クエストの成功報酬程度なら綺麗に吹き飛ぶようなメニューだったハズだ。不思議に思いながら人垣を縫っていると、

「おっと、これはStradさん！ あんたが宴会の外野にいるなんて珍しいね！」

ポンと肩を叩かれる。目に付いた宴会には取り敢えず首を突っ込んでいくから自分を知る街のハンターは多く、自分の知り合いはほとんどそうして知り合った者だ。里を出てから定住した拠点はこの街が初めてだが、住み始めて少しした頃にはもう、集会所に行けば必ず誰かに声を掛けて貰えるようになっていた。

呼び掛けてきた男もその内の一人だった。見ると近くに彼とよく連^つんでいる仲間もいる。振り向いた夢の中の自分はひたすら圧倒された様子で答えた。

「今しがた来た所なんですよ。それにしても、驚嘆すべき・大宴。凄い盛り上がりですね」

男はたははと笑って騒ぎの中心地を指差しながら、

「ここに来るまでに“ミカツキ”の件をちよつとは聞いたろう？俺達もそのクチでね、来てみたらこの騒ぎだ。なんでも、あの子が今日集会所に入ってきた奴全員に、コレ、奢^{ちや}つてやるぜ！ って宣言したらしくつて。お、そういやStradさんまだ貰^{もら}つてねえじゃん」

両手フリーの自分に気付くと、男は大声で給仕を呼んだ。この日はこの集会所に登録しているほとんどの受付嬢が投入されていたらしく、同じ制服を着た何十人も^{ひるがえ}の給仕の娘達が健全なスカートを翻し縦横無尽に人海を駆け回っていた。

彼女らもある意味ではスペシャリストだ。男が呼んでから十秒もせずに受付嬢の一人が現れ、手持ちの無い夢の中の自分に素早く且つ丁寧に雛祭期間限定スペシャルピーチ&雛霰パフエを握らせると、営業スマイルを忘れずに残してからすぐに新たな声の下へと飛んで

いった。

「ま、俺らが着いた時にはもうこんな感じだったよ。祭りはもうすぐ終わっちゃうからさ、最後に皆で思いっきり騒げるなら乗らない手はないぜ」

呆氣に取られ呆然と目を瞬^{しんぱん}かせる夢の中の自分に男はそう言つて、仲間の下へ帰つていった。

自分は胸の中に掻き立てられる思いのままに、雛祭期間限定スペシャルピーチ&雛霰パフェを味わいつつ中心人物達を探した。

パフェは良く冷えてとても甘かった。特に果肉の厚い桃が、甘党でなくてもクセになりそうだった。

ここでまた場面が少し飛ぶ。一瞬前にいた所よりも騒ぎの中心に近い位置だ。

溢れる人々が好きに飲めや歌え状態だったから、自分の長身の視点でも中心の様子は全く見えてこないが、皆、特定の席の方を向いて称賛を浴びせているので居場所は分かり易かった。

「しかし、つい一昨年の夏前に華々しいデビューをしたと思つたら、あつという間にドンドン手柄を上げていくなあ、Dolphinは」

「まったくだ。デビュー戦からブツ飛んでたが、あの子もいずれはG級に名を連ねるだろうな」

「でも確かまだ十二、三なんだろう? 『神童』もそうだけどよ、生まれながらに強者つてのはいるモンなんだよなあ」

「あそこまでいくと最早見てて清々しいってな」

「ははっ。違えねえ」

中心に近付くにつれて笑い声の洪水はどんどん大きくなっていった。聞こえてくる会話の話題は全部がこの騒ぎの主演達だ。

そしてその内の半分以上が 見栄姫 の称号を持つ黒髪黒瞳の美少女についてだった。

「『死神』と 天剣 で霞んでるけどよ、あそこにいる 見栄姫 も中々の活躍をしたらしいぜ」

「見栄姫 が？ へ、ついにあの金持ちお嬢様が実力を証明したって訳だ」

「そうね。それに、『死神』と 天剣 が共にいたとは言え、下位ながら実質G級戦に出て生き残ったんだもの。もしあの子が新人だったらそれだけで今年の新人女王は満場一致であの子だったわよね」

「ああ。これで悪く言ってる連中も認めざるを得ないだろうよ」

「あの子もようやくこの街に打ち解けられそうね。良かったわ」

「あれ？ 皆結構あの子の事気に掛けてたんだ？」

「そりゃーな」

「かわいいし」

「心配してる方が多いだろ、寧ろ」

「オレも正直、 天剣 が新しく作った獵団に 見栄姫 を引き込んだって話を聞いた時から少し安心してたんだよな。まさかこうも早く効果が出るとは思わなかったけど」

「肩肘張って強がりたりなんかしないで、子供らしく周りに助けを求めていれば皆進んで守ってあげてたのにね」

「この街は余所に比べて年少ハンターにも受容的だからな」

「え？ それは大人が誰も『神童』に敵わないからだろ？」

「『いやいやそれは関係無いうんきつと』」

と、多少論点が逸れつつも少女が功績を上げる事を待ち望んでいた者達の喜ぶ声が五割、

「ううううううううおうおうおう……」

「親方、何泣いてんすか……」

「儂とした事が、あんな素晴らしい女の子になんて酷い事言っちゃまったんだと、自分が情けの〜て情けの〜て」

「ああ。あの娘のやり方は鍛冶師の気持ち^{にじ}を踏み躪る最低の金持ち道楽だつてヤツツすか。そーいや親方そう言つてあの子の注文突っ撥ねた事あつたっすね。泣いてたな、あの子。メツチャ我慢してたっすけど」

「くう、あれだけ言つてやりやちったー武具を簡単に手放すなんて

「こたしなくなるかと思つたら、いつまでも頑固に貫きやがつてよ。まさかここまでデッカー器量を持つてたあ天晴よ！ 周りに相手にされなくなつても自分のやり方を貫き通すなんざあ半端な玉にやだねえ」

「でも親方、ウチらが丹精込めて作つた武具を一回使用しただけで廃棄されて、こちとらやつてられつか！ とか言つてた派っすよね。昨日まで」

「バカ野郎！ そりや相手が実力も伴わねえペーパーだつたらの話よ！ 儂がスミスハンマーに込める魂は、口くでもねえ戦場のチヤチな爪牙を受ける為にあるんじゃないやねんだよ！ 一瞬の判断が死を招く。そんな極限の戦場で、誇り高い戦士の命を守る一助となり、共に戦う為にあるのだあ！ 一戦一戦に命を賭して戦う戦士が、共に戦う武具にも一戦ごとに魂を込めろというのなら、儂はあ喜んで何度でも魂を分けてやるのさ！」

「まあ、どっちにしろもうあの子は二度と親方に注文しないだろう。つすから、関係ないっすけどね」

「ううううおうおう……そうかなあ？ ホントにそうかなあ？ 謝つたら赦してくれないかなあ？ もう一度儂に、共に戦うチャンスを与えないだろうか？ あんな芯が強くて真つ直ぐな、そのうえかわいい女の子。是非共に戦わせて頂きたい！」

「親方。あつし明日つから別の親方の下に付いていいっすか？」

「Nanaちゃん！ すまゝん！ 儂が間違つていたー！ うおおおおん！」

みたいに、今までの見栄張りお譲様と罵つて来た者達の懺悔と称賛の声が一割くらい。

それらがスクランブルになつた声の渦の中を夢の中の自分は雛祭期間限定スペシャルピーチ&雛霰パフェ片手に掻き分け、とうとう最も熱狂している席まで辿り着いた。

ヒトの群れに囲まれている、主役の三人がそこにいた。

ああ、懐かしき・光景。ふふ、会長もNanaさんも、二年で少

し成長したんですね。

今よりもつと小柄で、子供特有の丸っこい肉付きを残した少年と、今より少しだけ背が低く、かわいいか綺麗かどうかと問われればこの頃ははつきりかわいだった少女を見ると、二年という時も微笑ましく感じる。

その二人の子供に並んでいるのは、街の誇るG級ハンターの一角、『死神』と呼ばれる長身の男。人と群れるのが嫌いらしい彼は一人だけ、

「うっせえつつつてんだろウジ虫共！ 耳障りなんだよさつさと散れ叩き潰して血噴き出させんぞ！」

と、血のように赤い テオストレート を怒らせ辺りに叫び散らしている。こめかみの青筋が浮き上がっていて本気でキレているのが分かる。『眼力で狩りができる男』とまで謂われる彼の恫喝の前にすれば並大抵の者はビビって失神する所だ。

が、この日はかりはその限りでなかった。

何故なら『死神』の手にはしつかり雛祭期間限定スペシャルピーチ&雛霰パフェが握られ、叫びながらも生クリームを絡めた桃の果肉を銀色のスプーンで掬って口にせつせと運んでいるのだ。

全然恐くないのである。

さらに三人の真ん中で同じく雛祭期間限定スペシャルピーチ&雛霰パフェを頬張っている、顔面の右半分を分厚い眼帯で隠した水色の レウスレイヤー の少年が、見てるこっちも楽しくなってくる笑顔ですかさず周りに宣言する。

「そうだぞ皆！ 実は激甘党の、師匠の至福の一時を邪魔するな！ あの『死神』がパフェの甘さに打ち震える様を、静かに観察しよーじゃないかー！」

どつと一際大きな笑いが起こった。夢の中の自分も声を上げて笑っている。

二年前の会長はこの日もご機嫌だった。

「チッ、こんのボケチビ目ん玉穿り返すぞコルア！」

「なんだと俺の金でパフェ食ってる身のクセに！」

ガチーン！

大柄な大人と小柄な子供のスプーンがぶつかり合う。お互い片手で大きなパフェを落とさないように庇いながらも片手でギチギチと鏝競り合い。その少し上では大人と子供がマジ顔でメンチを切り合っている。

周りは大爆笑しながら野次を飛ばしていた。

「そりゃ賭けに勝ったオレの当然の権利だろうが！」

「だからちゃんと奢ったじゃん！ 例え崖の所で一番下まで叩き落とされて余計なロスさせられたのが凄く横暴だと思っけていても！」

「ハッ！ 妨害禁止なんてルール決めてなかったからなあ。要は早く着いた方の勝ちっつー公平且つ明快な勝負だ。勝手に妨害無しと思っ込んでたテメーがボケだったんだよボケ！」

「うつわ大人げな！ こうして俺みたいな穢れ無き子供が汚い大人に染まっけていくんだねっ！」

「勝負の世界はいつでも残酷なんだよ！ また一つ賢くなれて良かったな！」

「なにおう！？ お子様ナメんなよこのドSこうなったら腹いせに胸上げしてやる！」

「はあ？ お前何言って——」

「ヤロー共！」

突然会長が少年らしい高い声で周囲のギャラリィに向き直る。この瞬間に 天剣 が何をさせようとしているのか場の全員が察した。だが皆は敢えて少年の言葉を待つ。『死神』がとても嫌そうに顔を引き攣らせた。

「あ、ゴメン女のヒトもいたか。じゃあえー……分かんない！ やっぱりヤロー共でいいよね！」

「テメ、ふざけ——」

「ヤロー共！ 今その手に持つてる雛祭期間限定スペシャルピーチ&雛霰パフェは誰の奢りだ！？」

『天剣 Dolphinです!』

声を揃えて相の手を上げるギャラリィ。言葉を遮られた『死神』が強硬手段に出て少年を羽交い絞めにしようとするが、まだまだ残ってるパフエを意識してしまつて自由に動けない。動きの鈍った『死神』の腕は少年にひよいひよい^{かわ}躲される。

「そうだ! 俺が賑やか嫌いな師匠への当て付けに奢り捲つた雛祭期間限定スペシャルピーチ&雛霰パフエだ!」

「テメー金の使い所間違つてんだろ!？」

珍しく『死神』が驚愕しているが少年は気にしなかった。続けて周囲に問い掛け、

「じゃあ俺達はそもそも何の祝宴を上げてんだ!？」

『“ミカヅキ”討伐祝いです!』

と返つてくると“へ?”とでも言いたげに目を丸くした。

「……へー」

「へーつてお前!」

「なんか俺いつの間にか騒ぐ事自体が目的になつてたよ」

「お前はいつもそうだけどなあ!」

「“ミカヅキ”って何？」

「オレらが捕獲したラージャンだろうがどう考えても! 額に“三日月形”の傷痕がある!」

実はこの時周りは初めて討伐じゃなかった事に気付いて皆ちよつとだけ気まづくなっていた。

思いつきり、堂々揃いし・大間違い、でしたからね。

気の抜けるポケットコミを繰り広げる二人を眺めながら夢の中の自分もポリポリ頬を搔いていた。

しかしすぐに少年が何事も無かつたかのように同じ調子を取り戻し、

「ではヤロー共! この宴の主役の名を言ってみろ!」

この最後の誘導場は一気にヒートアップするのだ。

『天剣 Dolphin! 見栄姫 Nana! 血色の魔

王 『死神』 Killer!』

「ならばヤロー共!」

ここで少年は、パフエの安全を考慮し足技で擦じ伏せようとしてくる『死神』の攻撃を潜り抜けながら、すー、と息を吸い込み、

「主役の俺達を胴上げる——!!!!!!!!」

『おおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!』

正当な理由をこじつけた少年の号令で、ヒトが雄叫びを上げ津波の如き勢いで主役の三人に殺到した。圧倒的数の嵐に、さしもの『死神』も大好きなパフエを庇いながら抵抗するには限度があつた。あつさり担ぎ上げられ何度も投げ上げられる。

「うお! あぶ、危な! くおのおお貴様らあああ! オレの雛祭期間限定スペシャルピーチ&雛霰パフエが零れた分だけ平等に苦痛を味あわせてからブツ殺してやるうアアア!」

とか『死神』が叫んでいるが皆ハイになってて止まらない。実は後日彼らは正確に一人残らず世にも恐ろしい目に遭うのだが、この時は全然その可能性を気にしていなかった。

「あははははは! もっとだヤロー共! もっと高く飛ばせー! きゃほーう!」

少年は誰よりも楽しそうに笑い声を上げていた。身軽な体が鍛えられた大人のハンター十数人に思いつきり放り投げられボーンと高く天井付近まで打ち上がり、くるくるとポーズを取って回転しながらすぽと元の位置に落下してくると再び飛んでいく。

夢の中の自分はこの中にいた。第三者の視点で見ると改めて思うが、

私、完全なる・ガヤ、になってますね。そういえばただ宴の楽しさを享受するだけの立場で楽しんだの、実はこれが初めてだったかもしれない。

ちなみに主役のあと一人、漆黒の ナデシコ が艶あでやかな美少女はというと胴上げが始まる直前まで、すぐ隣で進展していた『死神』VS 天剣 の遣り取りにも全く気付けなくらいの勢いで怒涛の

言葉攻めにあっていて、温かい称賛や暑苦しい謝罪や熱烈なラヴコールに、一々顔を赤くして照れ隠ししたり顔を赤くして強がりたり顔を真っ赤にしてブン殴ったりしていた為、唐突な急転同然の事態に混乱し、

「きゃあああ！　きゃあああ！　な、何ですの！？　何事ですのコレちょっと止めて下さいまし！　どうなってますの会長——！」

と、半分泣きながら恐怖に悲鳴を上げていた。

しばらくそんな投げ上げられる三人と入り乱れる大勢の人々という場面が続くと、夢を見ている時の曖昧な時間経過が起きてまた飛んだ。

胸上げからそれ程経ってない場面だ。自分の目の前には二年前の姿の会長がいて、離れた所でヒトが次々とゴミのように宙を舞っている。解放された『死神』がこれ以上雛祭期間限定スペシャルピーチ&雛霰パフェが余計な騒ぎで失われるのを避ける為、一人になれる場所へ逃げるべく邪魔な者を文字通り蹴散らしているのだ。爆心地の方からは身の毛も立つ咆哮が轟いてきていた。

そんな中で自分は、会長と初めての会話をしていたのだ。

「ねえ、あんたいつもここで歌ってる竜人だよね」

「ええ。狩りより・唄、のハンター、Stradと申します。僭越ながら　宴会の奏者　の称号を賜っています。宜しく願いしますね、　天剣　Dolphinさん」

「うん。ヨロシク。へへ　宴会の奏者　っていうんだ。うん。ぴつたりだね」

「ありがとうございます。あなたの称号も、かつこよくて素敵ですね」

「えへへ〜そうでしょ。ありがとう。結構気に入ってたんだ、今の称号」

ニコーと微笑む少年に夢の中の自分も笑む。こうしていると本当に、大きく顔を覆う分厚い眼帯も男の子がカッコ付けてお洒落で付

けているようにすら見えてくる少年だ。

「それでさ、俺 S t r a d に訊きたかった事があるんだ」

「なんでしよう？」

夢の中の自分が訊き返すと、今より少し幼い会長はん？ と首を捻り、

「忘れちった。なんだっけ？」

「さあ。私に訊かれても、知る由・皆無、ですからねえ」

「あれー？ 今日のクエストで最初の方は覚えてたんだけど」

そうやって二年前の会長はうんうんと悩んでいたが、十数秒くらいで諦めたようだ。

「ま、いつか」

「よろしいのですか？」

「うん。思い出したらまた聞いてくれる？」

「ええ。可能な範囲でなら、いつでもお答えしますよ」

そう答えると会長は「ありがとう」と言って嬉しそうな笑顔になった。それから彼はこう言った。

「ところで今日は歌わないの？」

言われて夢の中の自分は一瞬きょとんとし、気付く。

宴会と聞いて盛り上げに来たという目的をすっかり忘れていた。

「そう、ですね。あまりにもあなた達の宴会がすでに、極限なる・高潮、に達していたモノですから、つい私も一緒に楽しんでしまっていましたよ」

見上げてくる会長はふん、と相槌を打ち、

「そっか。じゃあ、一緒に歌おうよ。オレもつとこの宴会盛り上げたいんだ。これ以上ないってくらいに」

笑顔でそんな事を言った。

この表情が会長の、最たる・魅力、ですね。不思議とヒトの心を惹き付けるんですよえ。

もちろんこの時自分は断らなかった。持ってきていたアコーデイオンを掻き鳴らし、ハンターの間で広く歌われている、生きとし生

ける全ての命の力強さを詠った唄を始め、何時間もある有名な歌を歌い続けた。隣で会長も声を合わせて歌っていた。集会所に集まっていた人々も次々と合唱に加わり、中には態々自宅に帰って自前の楽器を持ち込んで来た者達もいた。雛祭の合唱はどんどん大きくなっていき、最後にはギルドの職員やアーリーナの方に参加していた人々まで集まって来て、集会所前の広場に溢れる程になっていた。

強大な脅威が跋扈する“辺境”の地で、強く生きる力に満ちた人々の大合唱は、天に瞬く春の星空にも届いたろうかというくらいに大きく響き渡った。

やがて祭りの終了が宣言され、街中の住人が歓声と共に解散していく中で、自分と会長はこんな言葉を交わし合っていた。

「ねえ、Strad」

「なんでしよう」

「俺さ、こないだ獵団作っただけで、良かったらウチに入らない？」

「それは、私を誘ってくれるのですか？」

「うん！俺、Stradの事気に入ったんだ。Stradは？」

「もちろん。確たる・本心、私もあなたを気に入りましたよ」

「えへへ、じゃあ。ウチに来て、くれるかな？」

「ええ。喜んで。改めて宜しく願います」

あの時の眩しいくらいの会長の笑顔が白い光に包まれるようにして塗り潰された時、夢から覚めたのだとすぐに分かった。

scene 2 - 1 / 2 狩人塾【雛祭】（後書き）

今回はホントに『Dレポ』侵食率がエライ事に；

でも本作品の趣旨の一つが『虹髪』と『Dレポ』を繋げる事なん
で、いつかな。

これ以上は限度超えだとは思いますが。

ところで某竜人の夢って事で時系列を無理矢理捻じ曲げた今回の
場面はいつかの某旅が大好きな先生が下さったとある感想の一言に
より生まれました。

お蔭で都合良く竜人の入団エピソードもできたし、楽しかったで
す。この通り書き始めると言ってから更新するまでの時間が異様に
短かったくらいに。

ありがとうございます♪

ところで一休の作品で足りないキャラはなにか今回判明しました。

ズバリ。常識人不足（爆

普通の人がないからテンション高い人がツツコムしかないんで
すよねえ……。

ていうか師匠アンタ……

あ、シーン2後半に続きます。いつ書き始めるかは知りませんが、

二月のどっかを目指そうと思います。

流石にこれでターンエンドは扱い酷過ぎますからねー。

s c e n e 2 - 2 / 2 宴会の奏者（前書き）

一月中に書きちゃいましたが何か？

宣言破りは得意技ですが、たまにはいい意味で裏切りたいんですよ。

……いい意味で裏切るためにボーダー下げてる訳じゃないですよ？
しょうがないじゃないですか。書きちゃったんだから。

ところで今回は今まで書いた話の中で、一番“本編”に近い内容の話になってます。

まあ、“本編”の拠点の話なので当然なんですけど。早く本編書き始めたくなっちゃいました。

scene 2 - 2 / 2 宴会の奏者

「キタノゴルドラ特別狩猟振興開拓地区の猟団 JPハンター連
合会 団員寮」

「ふえ……くちゅっ」

「おや、可愛らしき・くしゃみ、ですね」

白濁色の石床。高い天井。奥の壁にズラリと並ぶ意匠を凝らした
様々なモンスターの首の剥製。独特の爽快な開放感。

有り過ぎるくらいのゆとりに溢れた団員寮のロビーに設えられた
小振りな円卓で、

「やめて下さいまし。可愛らしくなんてありません。ただのくしゃ
みですわ」

「いえいえ。可愛いものは、可愛いのですから」
「もう」

飄々と受け流す白い竜人を、頬を仄かに朱にした十代中盤くらい
の黒髪の美少女がちよつと拗ねたように睨め付けた。

丁度“(。)”の形になる感じで二つの弓なりの長椅子が円卓を
挟む。そんな組が適当な間隔を空けていくつも置かれている中でも
この四階建ての建物の中心を一階から屋上まで真っ直ぐ貫く大黒柱
に最も近い席の一つに座っていた少女と向かい合う位置に竜人が丁
度腰を降ろそうとした所の遣り取りだ。

すぐ傍の円柱形の大黒柱は樹海の千年樹を彷彿とさせる程に太く、
巨大な存在感をロビー全体に振り撒いている。場を占める圧迫感と
言うよりも、家を支える安心感と言った方が強い。

柱の円周には突き出るようにして剥き出しの螺旋階段が蛇のよう
に巻き付き、上階へと繋げている。その張り出した階段の足下に、
猟団で購読している日刊新聞 星月 だとか週刊マンガ誌 少年サ
ザン だとか月刊情報誌 狩りに生きる なんかそれぞれ過去数

刊分納まっているラックがある為、団員は皆この付近の席を好んでいた。

「それより、氣遣うべき・体調。大丈夫ですか？ 風邪でも拗こじらせました？」

特徴のない声で竜人が氣遣う。というのも、彼は歌姫の一族に匹敵する声域を持ち、さらに声質を自在に変えられるという特技によってその日その時の気分で声を別人のように変える為、聞き手の印象に残らないのだ。

声真似で彼が真似できなかった発声は、本人曰く一人しかないという。

対し少女は、

「至って健康ですわ。どうせまた何処ぞの誰かがワタクシの噂でもしているんじゃない？」

素っ気なく答え、手元の日刊新聞 星月 に視線を落とす。つれない態度に竜人は肩を竦めると、背凭れに身を預けて自身も自室から持ってきたお気に入りの吟遊詩人の詩集を開いた。

ロビーは獺団の構成員である九匹のアイルー達が小まめに調整している採光窓の仕掛けのお蔭で、日光が隅々まで万遍無く行き届いている。日が傾いてきている今時分なら表よりも下手をすれば明るいかもしれない。何かを読むには、街のどこよりもこの場所が一番いい。光陰の具合によって字の見辛い角度を避け見易い位置を探す、といった手間が必要ないからだ。

飯時以外なら基本的に静かな事もあり、楽な姿勢でゆっくり読書ができる。狩獵を盛り上げる目的で興されたハンター中心のこの街に於いて、こんな環境が存在するなんてもう一種の奇跡みたいなものだった。

が。

只でさえ部屋数を勘違いしていると思えないレベルで無駄に広域なロビーに、二人。

しかも相手は他にいくらでも空いている席があるのに態々（わざ

わざ)目の前にやってきた。

これが自分とは関わらない距離での、例えば別の席の誰かの会話とかキッチンの方の炒め物の調理音とか大農場の方の爆弾採掘の爆音とかなら気にならないのだが。

有り余る空間の中で至近距離。

ページを捲る紙擦れと身動きの衣擦れが妙に耳につく静寂。

悪意をビシバシ感じる沈黙に堪え切れなくなったのは、少女の方だった。

「Strad様は、今日は仕事に行きませんか？」

渋々と問い掛ける少女へ竜人は顔を上げ、とても笑顔で答えた。

「ふふ、ええ。優々たる・休日、のように過ごそうかと思ひまして手始めに今し方起きてきた所なんですよ」

その笑顔に、少女は悔しそうに柳眉を寄せる。

なんとなく、先に話しかけた方の負け・みたいな勝負に負けた気分。悔し紛れに精一杯呆れ声を返してやった。

「まさか今まで寝ていましたの？ もう夕方に近いですわよ？」

「たまにはダラダラと寝坊をするのもいいかと思ひましてね。いや、お蔭で久し振りに懐かしい夢を見れました」

「……というか、ワタクシStrad様が仕事に出ている所をあまり見掛けた事がないのですけれど、ちゃんと仕事取ってますの？」

「はい。ちゃんと取ってますし、こなしてますよ。確かなる・事実、仕事の回数が皆さんより少し不真面目であるのは認めますけどね」

二人は同じ猟団に所属するハンターであり、ハンターの仕事とは狩りである。

そしてハンターは基本的に、好きな時に自分の都合に合った仕事を受け、休みたい時に休む自由業だ。

ただし、彼らの狩猟生活に昼も夜もあつたモノでないというのは言うまでもない事だが、やはり街全体の生活リズムとして朝起きて夜寝る型が基盤にあるので、ハンターといえど自然、街に住まうヒトとして一人一人が標準的なリズムを基準に生活している。それは

どんな狩猟拠点であっても変わらない。

という訳で寝坊の一言で括るには苦しい時間帯にやっと起きてきた上に夜戦明けでもない竜人に少女の冷やかな視線が向けられているのだが、竜人は悪びれる様子もなかった。

「Nanaさんも、今日はお休みですか？」

演技振った律儀な返しの質問。少女は長く艶やかな黒髪に白磁のように繊細で綺麗な指を絡め梳きながら、

「このところ長期戦が続いていましたの。少しの羽根休め、といったところですわ」

答える傍ら、実に無意味な問答だ・と思う。

二人共、少なくとも今すぐ狩りに出ようと思っていない事はこんな所で寛いでいる時点で十分解るし、服装から見ても明らかだ。

温暖期が近くなり、大陸北方に当たるこの地も最近少しずつ暖かな陽気が増してきている。

二人の服装は互いに強大なモンスターの爪牙から身を守る為の防具とは似ても似つかない薄手の普段着だった。もちろん傍らに武器の類も見当たらない。

尤も、普段着と見紛うような防具もあるにはあるが、アレらは往々にしてネタ装備であるし、そういうのをイベント以外で好んで身に付け狩りに出るのは極一部のアレな連中くらいである。

……まあ、そのアレな連中の筆頭のようなアレが物凄く身近にアレしてたりするのだが。

それはともかく。つまりは話題の取っ掛かりを見付ける間の時間稼ぎであり、くだらない遣り取りを共有する取り留めの無い遊びなのだ。

心を許せる仲間同士ならではの。

だからこそ、竜人が笑顔であるように少女の口元にも微笑が浮いている。

「それでは、今頃集会所では、暗澹たる・嘆息、があちこちで零れている事でしょうね」

「なんでワタクシが一日休むだけで集会所の空気が沈みますのよ」
「またまた。皆さん楽しみにしているんですよ？ 今日の姫はどんな衣装を披露してくれるんだろう、とね」

「人の格好を酒の肴にするような輩の期待なんて知った事じゃありませんわ」

「おや、純粹に応援してくれてる方々もいるじゃないですか。きつと今日もあの、熱烈なる・エール、をいつでも捧げられるように準備していたと思いますよ。 Nanaちゃんファンクラブ」

瞬間、ボツと火が出そうなくらい少女の顔が赤くなった。

「なぶっ……なな！ あ、あれはあの方々が勝手にやっているだけですわ！ ワタクシはお止めなさいと何度も言っていますのに……」
「ふふ。いいじゃないですか、街のアイドルみたいで。楽しいですよ。気楽なる・傍観者、の私としては」

「ワタクシは迷惑しているんですよ！」

バン！ と少女が新聞を円卓に叩き付けて抗議する。

小振りな顔に、端々（みずみず）しい小さな口と形良く可愛らしい鼻。気丈な輝きを放つぱっちりとした漆黒の瞳。同じく漆黒の、毛先まで潤っているように艶やかな髪はサラリと腰まで伸ばされ、ナデシコ というその髪型が彼女の産まれながらに持つ高貴と気品をさらに引き立てる。ハンターらしからぬ小綺麗で雅やかな容姿は、百人が百人共美少女と認める美貌を備えている。

それでいて、ちよっとイジるとすぐに顔が赤くなっちゃうところがたまらなく可愛く、一部の熱狂的なファンなぞ年中トキメキっぱなしだ。

最近では、ようやく布越しから控え目に主張し始めてきているさやかな胸の膨らみが、周囲的にはさらに“ぐ”なのであった。
「ふん、ちよっと前までは散々、人に蔑視を向けて下さっていたの、どの連中でしたかしらね」

「過ぎ去りし・昔、じゃないですか。実際、言うほど悪く思ってた人もあまりいませんでしたしね」

竜人の言葉に、少女は納得いかないといった目を向ける。竜人は
やんわり付け加えた。

「本当ですよ？ 寧ろ遠巻きに気に掛けていた人の方が多かったよ
うな感じてしたね」

「なんで遠巻きなんですのよ」

「仕方ないじゃないですか。だってNanaさん、追い詰められし
角竜、のようにプライド高いんですもん。こっちから話し掛けたら
逆に泣かせてしまいそうで」

言われて少女は言葉に詰まった。言い返したいが、確かに言い返
せないような節もないではなかったからだ。でもやっぱり認めたく
ないらしい。

「な、泣く訳ないですわ！ 初めて会長に話し掛けられた時だって
泣きませんでしたもの……」

と、言ってしまったから、凄く子供染みた言い訳に自分で顔を赤
くする。狼狽したように手をわたたさせながら、頭の中では何と
か言い繕う道を探ろうとしているのが「いや、そうじゃなくて、
その、えっと、う〜〜〜」という唸り声として出てしまっている。

思わず竜人は噴き出した。

「わ、笑わないで下さいまし！」

「いや、これで笑うなと言う方が無理でしょう。歳を重ねた老人に
若い娘の可愛い様子は、何と言いますか、耐え難き・撥^{くすぐ}り、みたい
な感じですよね」

「Strad様だってまだ若いじゃありませんの！ あとさつきか
ら可愛いってバカにしますの！？」

「なに言ってるんです。私これでも八十代ですよ？ あと可愛いも
のは可愛いんです」

「竜人族の八十歳なんて完全に若者の部類ですわよ！ それとだか
ら止めて下さいまし！」

少女の全力の反論も竜人は涼しい顔で流していた。ゼーゼーと息
切れしている少女は自分が無意識に身を乗り出していた事に気付き、

ストンと椅子に戻る。そして気を落ち着かせるように深く息を吐いた。

見計らったタイミングで、竜人は少女に微笑んで告げる。

「強者こそ・正義、ですからね。皆Nanaさんが明確な戦果を上げるのを待ってたんですよ」

嘗て、この街で少女は孤立していた。

十になるかならないかの歳で単身、この街にやって来て、上流貴族という実家の財力に物を言わせ、武器防具を素材から買い集めてハンターを名乗った。しかも、一度使用した装備品は破棄し、狩猟毎に新調するのだ。

自由で大らかなハンターにも一応の共通美学に似たものはある。

職人氣質の武器工匠なら言わずもがな。

実直に狩猟に携わる者達からすれば少女は、金持ちを笠に着て実力者振る傲慢不遜で愚かしいお嬢様、にしか映らなかったのも無理からぬ話だろう。

しかし、実力主義の狩猟社会だからこそ、実力さえ示せば異端は個性に置き変わる。

見栄を張って強力な装備を着飾っていたお嬢様は、今ではこう称されている。

千の装備を着こなす麗しの姫。

千装麗姫　ナナ・エイトテイルス。

ちなみに。近頃毎晩、遠く離れた王国の首都で、彼女の兄が妹への燃え上がる愛を絶叫している事を、彼女は知らない。

「ふん、ああもあつさり掌を返されると、いっそ清々しかったですわ」

腕を組むナナに竜人は苦笑する。

「あつさりなんて。まさかあれ程の、絶大なる・戦果、を上げるとは誰も予想してませんでしたからね。ギルドが即座に上位昇進を決めたくらいです。“ミカヅキ”の一件はNanaさんの評価を引っくり返したのですよ」

“ミカツキ”。

二十年近く前にフラヒヤ山脈に現れ暴虐の限りを尽し、いくつもの村落を壊滅させ、幾人もの超一流ハンターを返り討ちにしたままだが、姿を見せなくなり、忘れ去られていた最高峰のラージャンに付けられた呼び名だ。割と地理的にフラヒヤ山脈に近い位置にあるこの街も当時は緊張の空気に満ち戦々競々としたらしい。

その“ミカツキ”を二年前に捕獲したチームの一人がナナであるのだが、“ミカツキ”と聞いて彼女は柳眉を下げた。

「あの戦いで、世間のワタクシへの評価は過大すぎますわ。ワタクシなんてあの戦いでは……ただのお荷物でしたもの。ワタクシだけ救護に助けられて、戦いの最中はずっと後ろの方で縮こまってるか死神様に担がれてるかでしたし、足を引っ張るのもいい所でしたわ」

「おや。でも最後を決めたのはNanaさんだったと聞き及びましたよ」

「そうですね、あれだって、全て死神様の指示にただ従っただけですわ。それすら会長がいなければ失敗していたかもしれないでしたし……ワタクシがあれだけ動けたのもお二人がズバ抜けて優秀だったからですわ。だからお二人には、過大に評価されたワタクシの分まで、もっと評価されるべきでしたのに」

段々とナナの声が尻すぼんでいく。今でも“ミカツキ”の功績でナナを称える者は多いが、あとの二名について言う者はあまりいない。彼女は自分ばかりが評価された事を控えめな胸の内できにしているのだ。

そんな様子を見て取り、竜人は鷹揚と言った。

「まあ、あの二人と言われたら何をやってもおかしくないですから“ミカツキ”程度では、驚くべき・戦果、とは思われなかったんですよ」

最早人外に対するような竜人の評に、落ち込むナナも思わず失笑を漏らした。確かにあの二人なら、そんな評価も否定できない。そ

こがまた何ともおかしかった。

「それにやはり、本当に下位の實力しか無かったのならとても生き残れるような相手ではありませんから。Nanaさんの評価は正真正銘、誇れる・実績、にしてよいと思いますよ」

私なら生き残れなかった自信があります、と何故か誇らしげに続ける竜人。励まされてるんだと自覚したナナは代わりにイタズラっぽく微笑んだ。

「まったく、毎日集会所では見掛けますのに。人様の祝宴に首を突っ込む前にもう少しご自分の祝宴を上げるよう努めたらいかが？」

「おや手厳しい」

竜人は読みかけの詩集に指を挟んだまま両手を肩まで上げた。それについては申し開きの余地もありませんという意味表示だ。

だが気にする意思はないようだ。

「至高なる・愉楽。宴会を全力で盛り上げるあの充足感は、一度知ったらやめられませんよ。どうです？ 今度一緒に盛り上げてみますか？」

「Strad様と一緒にしないで下さいまし。ワタクシに音芸の素養はありませんもの。恥を晒すだけですわ」

「大丈夫ですよ。宴会は音楽が全てではありません。Nanaさんなら参加してくれるだけで場が盛り上がるというものです」

「ワタクシ何もしてないじゃありませんの」

「人目を惹く容姿はなにより、得難き・才能、かと」

さらりと容姿を褒められ、ナナは一瞬キョトン、としたがすぐに見るみる顔を朱に染めていく。それを見て竜人は心の中でくつくつと笑った。ナナは大変、可愛かった。

「また……もう。と、とにかくワタクシは、人様の祝宴の中心に立つなんて気にはなれませんのっ」

すると竜人は特に残念そうな色も見せず、でしようねとも言わんばかりに息を吐いて、

「では、次にNanaさんが主役の宴席を見付けた時にでも取って

置きましょう」

「……もう、好きにしてくださいな」

「はい。楽しみにしています」

竜人はニツコリとナナに笑い掛けた。

隆盛期に入って数十年の若い竜人。細身の長身で、竜人族特有の乳白色の肌に、均整の取れた目鼻立ち。濁りのない真白の頭髮は全て頭の後ろに束ねた マスターロング。エメラルドグリーンの瞳を柔和に細めた美貌は森奥に似た神秘的な雰囲気を感じさせる。

竜人は大陸でも広く名を馳せるハンターだ。

しかしそれは狩りの腕前で、という意味では無い。尤も、狩りの方も並々ならぬ実力の持ち主であるのは間違いないが、彼はそれ以上に飛び抜けた個性がある。

そこに宴会あらば歌と音楽で盛り上げ会場全体を巻き込む大宴会となす竜人。

この街を訪れるまでは大陸各地を転々としていた彼は、行く先々でハンター達の祝宴、或いは景気付けの激励会なんかにまるで最初からそこにいたかのように紛れ込み、いつの間にか中心になって場の空気を掌握し、可能な限り盛り上げる。

故に、人は彼をこう呼ぶ。

宴会の奏者 ストラド・イバリウス・トライボーダー。

ハンターの名声としてはどうなのかとも思えるが、賑やか好きのハンター達にはこの上なく歓迎される人物だ。

見方によつては対称的とも言えるストラドとナナは共にある人物（ていうか会長）の琴線に触れてこの獵団に誘われ、今こうして同じ獵団に属し談笑をしている。ほんの二年前までは、お互い顔と名前は知っていても言葉を交わす事は絶対に無かった二人だ。

考えてみれば不思議な縁ではあった。

「ところでStrad様？ お暇なのでしたら少し相談に乗って下さる？」

おや、とストラドは石の影に隠れた特産キノコを偶然見付けた時

の表情になる。

「何でしょう？ 長らく・懊悩、していたお兄さんへのバースデープレゼントは、会長に選ぶのを手伝って貰ったのでは？」

「う……一体どこから仕入れてきますの、そんな情報……」

と言われても同じ獵団にいれば勝手に聞こえてくる。それを口実に会長を連れ出そうと勇気を振り絞るナナの姿がいかに可愛かったか、とかそういう話が大好きなアイルーが一匹いるだけなのだが。

「それはもうムサシに送って貰いましたわ。まあ、会長の話ではあるですけど」

ナナの言葉に、ああ、とストラドも心当たりを付けた。

「確かに最近、寮に帰ってこない日が増えましたよね、会長」

ストラドが答えると、ナナは気になつていたので自分だけでは無かつた事に安堵したように肩の力を抜き、頷いて肯定する。

「やつぱりStrad様も、気付いてたんですね」

「なんとなくですけどね。ここ三月みつきくらいの話ですか。会長を含めて、獵団の創設メンバーが揃って寮を空ける日が増えたのは。と言っても、微々たる・変化。無視しようと思えば無視できる範囲ですが」

「でも、少し様子も変ですわ。しばらく帰って来なかつた時がありましたけど、あの時、クエストが長引いたのだと考えても、帰って来た時はあの方達にしては疲労が溜まり過ぎていたように感じましたわ」

「ふーむ、そうですね。あの日は私も、盛大なる・宴席、を盛り上げててずっと集会所にいたのですが、実は彼らが帰って来たのを見なかつたんですよえ。……尤も、見落としたと言われればそれまでなんです」

獵団の他の仲間も、帰ってこないのが普段の者は別として、気付いているだろう。該当の四人は元々一緒に獵団を立ち上げる程の仲ではあつたのだが、それにしても揃って寮を空ける頻度が増えていく、特に最近、個人差はあるが確実に四人とも、なんだかコレま

で見た事が無かったような、少し暗い色を表情に滲ませるようになったのだ。

「では、やはりStrad様も？ 何か聞いてないかと思っただけですけど……」

「残念ながら。私も、詳しく・事情、を聞かせて欲しいとは思ってるんですけどね」

「そうですよ……」

ナナは深い溜息を吐いた。別に答えが得られると強く期待していた訳ではなく、ダメ元で相談してみたただけなのだが、結果が予想通りでも可能性が一つ消えた事に変わりはない。

これがただの杞憂なら構わない。しかし、とストラドは思う。

自分達のコレがただの杞憂だとしても本当に何か深刻な事態が起こっているのだとしても、獵団にこんな空気が漂うのを誰よりも会長が良しとしないだろう。

あの少年はそういう人間のハズだ。

「私は、会長は言うべき事は言ってくれる人だと、信に足る・人格者、だと思っているので。言い出してくれるまで待とうと思いますよ」

少なくともストラドはそう信じている。

年長者の意見が聞けて、少し気が楽になったのかナナは表情を緩めた。

「そうですわね。ワタクシも、会長を信じていますわ」

そこで少女は、ですが、と繋げ、

「やっぱり、気になって悶々とし続けるのは性に合いませんわ。次に会長に会ったら、きっと問い詰めてやりますわ」

意志の強い目で言い切ったナナに、ストラドは満足そうに微笑む。獵団の仲間は会長曰く『家族』だ。そして様子がおかしい『家族』を心配するのは当たり前。心配の仕方は『家族』それぞれ。ストラドが信じて待つのなら、ナナは信じて問い質す。それでいいのだ。

「安息たる・想い。では、私も今日中に胸のつかえが取れそうですね」

「？ 会長が帰って来るのが分かりますの？」

きょとんと訊ねるナナに、ストラドはホットドリンクと鬼人薬を間違えた時のような顔で告げた。

「帰ってきてますよ、会長。さっき起きた時、大農場で釣りをしてるのが窓から見えましたから」

なっ……！ とナナが驚きを表わそうとするのとはほぼ同時。ロビに新たな声が炸裂する。

「や———！」

凄い女の子の子女の気合いを上げて、大黒柱の剥き出しの螺旋階段の手摺りを蹴り、ロビーに一人の少女が降り立った。

頭の両側で ザザミ結び にした桜色の長い髪が落下の軌跡を描くように少女の後ろで靡き、着地後はふわりと背中に吸い付いていくように流れる。

ナナより少し年下な感じの少女は、立ち上がった姿勢のまま硬直しているナナと優雅に長椅子に背を預けているストラドに気付くと絵から飛び出してきたかのようにかわいい顔にパツと喜色満面を浮かべて、

「Stradさん！ Nanaちゃん！ いまいまフェアリーお部屋の窓から会長が見えたんだけど帰って来てるんだよっ！」

「Fairy！」

ナナが少女の名を呼ぶが少女は聞いちゃいない。

「ええ、私も見ましたよ。夢ではなく、確たる・現実、会長は今釣りの最中です」

とストラドがのんびり答えると、

「わ———い！ かいちょ———！」

少女は諸手を挙げてロビーの奥に凄い速さで駆け出した。その先にある裏口は猟団が管理する大農場に直接繋がっている。

「ちよっお待ちなさいFairy！ ワタクシあなたにちゃん付け

される謂れはなくなつてよ！」

出遅れたナナが慌てて少女を引き止めに走り出そうとする。

しかし。

それを断ち切るかのようにさらに新たな声が螺旋階段の上から降り掛かった。

「YO——！ Nana、今ヒマ・KA!？」

ビシリ、と黒髪美少女の動きが止まる。

ここに来るか。こんな時にアンタか。アア、振り向キタクナイ。

一体何ノ用ダドヘンタイ。

そんなドス黒い感情がナナの内側で奔流する内に、桜髪の少女はバーン！ と裏口を開け、元気よく大農場へ「かいちよ——

！」ドタタタター！ と飛び出して行つてしまった。

「不可避なる・運命。生きているとどうしても越えられない壁の一つ二つあるものです。諦めましょうよ、Nanaさん」

ストラドは他人事のようにナナを諭した。実際他人事だが。桜髪の少女の勢いと、この変態さんのコンボはナナには相性が悪すぎる。一人ずつ相手でも分が悪い。

「うう……」

獵団のアイルー達がたまに団員に付き合わせる新たな味覚への挑戦で、明らかな失敗作が出てきた時のような動きでナナが振り返る。螺旋階段の上にいたのはアフロだ。巨大な。オレンジ色のブラザーアフロ。

しかし決してそこから下を目にしてはイケナイ。コイツを認識するには夕日みたいなアフロだけで十分だ。

褐色の肌にコンガとブランゴを足して二乗したくらいの濃ゆい顔面とか。達人のドクロもビックリの濁り切ったシャボントーンがドロドロ垂れ流れてきそうな恐ろしい笑顔とか。ただでさえ露出が激しい上にサイズが合つてなくてパツンパツンなコンガSメイルのお蔭で裸よりも暑苦しさが増強してる上半身とか。剥き出しの厚い胸板を覆うもじやもじやとか。ゴツゴツした両腕に万遍無く

深く広がるもじやもじやとか。脇下で噴火してるもじやもじやとか。インナーの方がまだマシな ブランゴSレギンズ の赤いブーメラパンツしか穿いてなくてヤヴァイ食い込み丸出しの下腹部とか。筋肉でモリモリな太腿から足首までを大植生してるもじやもじやとか。へその下から茂るおぞましいもじやもじやとか。絶対はみ出ちゃイケナイもじやもじやとか。言葉では死んでも表現したくない股間の膨らみとか。

そんな珍獣(23)が手摺りの斜面に乗って器用にY字バランスを決めてる姿とか……。

下から見上げると回避不可能だった。否応なく、全部。視界に映ってしまった。ていうか一番見たくない所が一番よく見えてしまった。

ナナは目に手を被せて崩れ堕ちる。ダメだ手遅れだコノ汚イ映像ガ消エテクレナイ。

「Turmeric様。ワタクシ、一生分を使ってもあなたにやつて頂きたいお願いがありますわ」

「OH! なん・DA?」

「せめて下をもう一枚穿いて下さいまし」

「H A H A H A H A! ! N a n aは恥ずかしがり屋だ・N A!」

獵団の誇るド変態は街のアイドルの一生を懸けた切実な願いを少しも意に介さず豪快に笑い飛ばす。

ナナは本気で泣きたくなった。孤独に過ごしていた時期もこんなに泣きたくなった事は無い。

なんとコレでも獵団の副会長である。

「ほらほらNanaさん気をしっかり持って。ある意味・チャンス、ですよ」

「うつ……何がですか?」

「ホラ、Turmericさん四人の中では一番変化が分かり難いですけど、一応創設メンバーの一人じゃないですか。会長と何をやってるのか聞き出すチャンスですよ」

その言葉にナナは物凄く葛藤した。唸りながら苦悩した。この世の辛苦の八割くらいを背負わされている人みたいに頭を抱え、

「ああもう！ 一体何の用ですよ！」

自棄になって振り切ったようだ。漆黒の瞳がちよつと潤んでいる。ド変態はそんな乙女の心境など微塵も気付かず、

「AH！ なるべく注意を払ってはいただけど・YO！ なんかまた機嫌悪くなっちまったみたいだから、手伝ってくれない・KA？」

徹底して主語目的語の抜けた状況説明。ただし関係者とその周辺にいた者ならば通じる内容だ。何も言わないが、ストラドにも理解できた。ナナをチラリと見遣る。意外にも、嫌そうにしていた表情に若干、しょうもない弟の世話を焼かなければならない姉みたいな空気が窺えた。そこからの彼女の動き出しは迅速だった。

「仕方ありませんわね。ではStrad様。失礼しますわ」

「はい。頑張つて下さい。二重なる・意味、^{ふたえ}で、お願いしますね」
見送るストラドの激励にナナは特に反応を示さず、珍獣男と連れだって螺旋階段を上がって行った。

と思えば今度は立て続けに大農場への裏口がズバーン！ と開き、さっきの桜髪の少女が戻って来た。少女は「ケイーンちゃ————ん！」と叫びながらロビーを疾走し、所属のアイルー達が平時に控えている食堂へと突っ込んでいった。

さらにどやどやと自室にいたらしい仲間達が数人、ロビーに入つて来る。多分これで、ストラドは今日寮にいる仲間全員の顔を見た事になった。こんな日も中々珍しいが、理由は明白だ。

彼がいる。それだけで獵団はこんなにも賑やかになるのだ。

ストラドも腰を上げ仲間の輪の中に加わった。皆が集まったのは大農場への裏口前だ。

まもなくして扉が開く。そこから、何故か見慣れないアイルーを抱いた会長が入ってきた。水色の レウスレイヤー の下に、顔の右半分を分厚い眼帯で隠す少年は嬉しそうに笑い掛けてくる。二年前から何も変わらない笑顔は、やはり先程までのストラドとナナが話し合っていた事なんて杞憂に過ぎないのかもしれないと思わせる。扉の形に切り取られた少年の背景は、少年の髪がよく映える夕焼け空だった。

長年大陸各地を転々とした歌う竜人が、初めてというくらい強く心惹かれた少年の笑顔と同じくらい、遥か彼方まで晴れ渡る夕空なのだった。

s c e n e 2 - 2 / 2 宴会の奏者（後書き）

『放送コードに引っかかる奴が一名います。ぶっちゃけ投稿する身としてはハートがズキズキなんですが、どうしてやりましょう。取り敢えず、読む前に心の準備をしておく事をお勧めします』

という文句を前書きに書いてこうかと思いましたが、無いほうが面白そうなんで止めちゃいました。そして敢えて後書きで書くのが面白いと思ったので添えときます。

えーと、気は確かですか？（笑）

てへ

【執筆状況】

シーン1 投稿済み

シーン2 投稿済み

シーン3 連日投稿予定

シーン4 さっぱり手付かずorz

シーン5 何度も読み返しちゃってます♪

s c e n e 3 - 1 / 2 冒険王（前書き）

一部 冒険王 でとある爆走コンビを期待された方がいらっしや
ったようですが、残念ながら違います。

一休がキャラに付ける称号はほとんどオリジナルで、たまに原作
から引っ張ってきても取得条件ガン無視ですけど、彼に限っては原
作完全準拠になりました。

だってぴったりなんだもの。

という訳で誰も期待してなかったであろうお方の後日談です。

ところでミントくん4号「ぼうれん」の変換候補に「@」が出る
んですけど、なんで？

scene 3 - 1 / 2 冒険王

「辺境最大の街ジオ・ワンドレオの上流貴族スターモント家屋敷」

冒険王 バテン・スターモント。

それが上流貴族スターモント家現当主の昔の呼び名だ。

大自然の中にキラリと輝く天然のレアトレジャーを自らの足で集めて回るのが趣味だったバテンは、父親から家督を譲り受けるまで、お宝の為なら前人未到の土地にすら躊躇なく踏み込む高名なトレジャーハンターとして活動していた。

その時代に彼が集めた古今東西のあらゆるレアトレジャーは、一部、幼い頃の最愛の一人娘によって粉微塵にされてしまったが、ほとんどはスターモント家の屋敷の長い廊下に陳列され、またそれでも並べ切らない物や体積の大きな物は、専用の保管部屋に丁寧に収められていたり吹き抜けのエントランスにドデデンと飾られていたりする。

南向きの正面玄関を潜ると、厳つい鉄製の正門目掛けて縦二列、石畳の一本道を挟むようにして、幾何学的なデザインに剪定された植木が並ぶ庭に出る。植木の列の外側は柔らかい芝に覆われ、繁殖期から温暖期に移ろうこの時期なんかは見ているだけで駆け回りたいくなるくらいの濃い緑に染まり、実際現在進行形で何人かの子供達が保護者の女性を囲うように走り回っている。屋敷の者ではなく、スターモント家も援助している街の孤児院に住む子供達だ。街が発展するにつれて子供達の暴れる場が無くなってきた事を思い、近年では毎日子供達の遊び場として庭を開放しているのだ。こうして自分の土地が余っている他の者にも、子供の遊び場を提供するよう呼び掛けている。

バテンがいるのはそんな庭の片隅、屋敷の東端と敷地の間に植えられた一際大きな木の下だ。

広く枝葉を伸ばし、幻想的な木漏れ日を足元に注ぐ大樹は、爽やかな庭とは切り離された神聖な雰囲気のある領域を形成している。

聖域には石段があった。石段の上には大樹に寄り掛かるようにして、大きな石版が鎮座していた。縦長の長方形に近い形で、上辺だけ弧を描いている。天辺には九つの流星が交わらずに渦を巻く、スターモント家の家紋・九連流星が彫られ、その下にズラリと文字が刻まれている。

歴代のスターモント家の血筋を汲む者の名前。

亡くなった眷族を祭る石碑だ。

齢六十もとうに越え、軽くウェーブの掛かった紫の髪も半分以上が白くなったバテンは石碑にそっと手を伸ばす。

——スマレ、クジャク、キク

最後に並んだ三つの名前を遡るように触れ、もう一度娘夫婦からゆっくりと（途中、真ん中の名前の前で一瞬止まって、その名前だけはグリグリと擦り消すように）撫で、最後の名前は慈しそくに一字一字なぞる。

「よく、頑張つて長く生きてくれたよなあ。キクよ」

思っていた事がつい口を衝いて出てしまったかのような声音でバテンが呟く。深いマリンブルーの瞳はどこまでも愛おしそくに細められていた。

そんな主の三步後ろで、二人のメイド姿の女性が静々と黙祷しながら控えている。一人は服の上からでも分かるメリハリのいいラインの体をした感情の読めない年齢不詳の女性。もう一人は雰囲気も顔もおまけに体付きまで清貧な感じのする二十代前半くらいの若い女性。

彼女等は呼吸もしてないんじゃないかと疑いたくなるくらい身動き一つしない。みじろ

だがそれも、バテンが悔しそくに拳を握り込んだ次の瞬間までだ

った。

「くっ、本当はオレも、お前を連れて一緒に骨を埋める地を探す旅に出てやりたかったのに……っ。あんのポケのおたんこなすのせいで！」

「なんつー事言いますかバテン様コノヤロー」
スパーン！

真顔に平坦な口調で暴言を吐いた年齢不詳のメイドが音も無く三歩の差を詰めピンと張った平手で主の後頭部を引つ叩く暴挙に出る。凄くいい音と共に「ぬべっ！？」「グシャア、とバテンが顔面から石碑に突っ込んだ。

「きゃああだだだ旦那様だびびよーぶですか——！！」

途中謎の単語を挟みながら若いメイドが主に駆け寄る。多分、「大丈夫ですか」と言いたかったのであろう。

若いメイドは「うゝむ」と首を振って起き上がる主に寄り添いながら、紫色のリボンを結んだ年齢不詳のメイドに食って掛かる。「メイド長！ 確かに旦那様の今の発言は控えるべきものだったかもしれないが、いくらなんでもこれはやりすぎです！」

「……アルクウ」

対しメイド長はやはり抑揚のない声で水色のリボンを結んだ若い後輩の名を呼び、ある一点を指差す。

追うように視線を移すと、

「うゝむ、アルクウのここはちつとも成長せんなあ。二十三にもなつてこれだと、捕まえられる男も捕まえられんぞ」

膝を突いて寄り添っているせいで近くにあるアルクウの胸元を、カール鬚をミヨンミヨンやりながら真顔で覗き込むジジイ。

「きゃあああああ！！」

アルクウは思わず全力で屋敷の当主を突き飛ばした。

「ぬがああ！」と悲鳴を上げながら石段から転がり落ちるバテン。

夜空の紫を想起させる質感の服を乱して無様に引っくり返った主を、メイド長は石段から冷ややかに見降ろす。

「仮にもキク様のお眠りする墓前でアホな事しないで下さいバテン様バカヤロー」

「いや、アルクウが日に日に逞しくなっているようでオレは嬉しいよ」

悪びれもせずバテンはカラカラ笑っていた。

反省の様子がないのでメイド長は、

「報いが足りないようですねバテン様お置きですクソジジー」

ふわつと段差から飛んでロングスカートの中に隠されたしなやかな足を曲げ、膝から落下していった。

「ちよおおお待て待てお前そればうっ」

ドム！ ととても重い音が上がる。さらにガス！ ドシ！ 「ちよ、おま、これはやりす！ いつま」ズゴン！

そんな石段下の遣り取りから取り残されたアルクウは、

「あ、あ、あの、えっとあのえと、うう……」

未だ子供っぽさが抜けない両眼に涙を浮かべ、羞恥に真っ赤になった顔で胸元を庇うように腕を交差させながら、思わず突き飛ばした事を謝らなきゃって気持ちと大丈夫ですかって旦那様を氣遣う気持ちと旦那様を助けに行かなきゃって気持ちが三竦みで何を言えればいいのか分からなくなり、女の子座りでオロオロしていた。

数分後。

三人は再び元の位置に立っていた。ただし表情はそれぞれ違う。

さつきよりも真面目くさった顔で石碑を見詰めるバテン。しかし服は皺だらけで髪は所々ビヨンビヨンだから少しアホっぽく見える。後ろに控える二人は、メイド長は無表情でじく、と長年お仕えするジジイを睨み付け、アルクウはどんな顔を浮かべたらいいのか分からないといったような曖昧な困り顔を浮かべていた。

コホン、とバテン咳払い。そして、

「よく、頑張つて長く生きてくれたよなあ。キクよ」

さつきとまったく同じセリフ。だがこの続きを誤ってはいけない。

感情の出ない顔で制裁を止めようとしなないメイド長に「なし！

なしさっきのやり直し！ やり直すから止めて〜！」と叫んでようやく解放された手前、今度しくじったら明日の朝には自分の名前が目の前の石碑に刻まれ兼ねない。

「元々体の弱いお前が、よくもここまでオレに付いてきてくれたものだ」

バテンはつい半年前まで刻まれていなかった名前に語り掛けるように、思い出を懐かしむように呟く。

「思えば最初からムチャクチャな出会いだったな。お宝を求めてシキ国に密入国し、忍び込んだでかい屋敷の中でバツタリ見付けたお前の、その儂げな美しさに一目惚れしたオレは、」

感嘆の吐息を漏らし、しみじみと。

「思わずお持ち帰ってしまった」

旦那様と奥様の馴れ初めをここで初めて聞いたアルクウが目を丸くしている。

え？ それ、誘拐じゃない？ ていうか密入国？ あれ、シキ国って極東じゃなかったっけ？

隣でメイド長が呆れたように鼻から溜息していた。

「だというのにオレは、お前を連れ帰ってからスミレちゃんが生まれてからも、我が父から家督を継ぐまでフラフラとトレジャーを集めて回ってばかりいて。随分寂しい思いをさせたるうな。……八年前にはスミレを失い、一人目の孫まで火竜に連れ去られて――」

「クジャク様もですバテン様」

割り込んだメイド長の言葉にバテンは痒い所に手が届かないような顔をして、

「うむ、あと、義息子も失って……」

歯切れ悪く付け加えた。

「そんな事があるながらも、四十五年も。こんなオレに笑顔を絶やさず寄り添ってくれてな。お前は本当にいい女だな。オレは本当に幸せ者だよ」

目を閉じ、バテンは亡き妻の姿を想う。

民のほとんどが黄色肌に漆黒の髪と瞳を持つシキ国に於いて、肌も、髪も、突けば簡単に砕けそうなくらい儚げな白で、瞳だけが血のように怪しげなルビーレッド。

キクは普通の人間ではなかった。

アルビノ。

先天的に色素を欠き、色が抜け落ちたような白い身体に、虹彩に色素のない瞳だけが血の色を透過する突然変異。

ただ、アルビノは皮膚や眼が日光に弱かったりするが、それ以外は普通のヒトと何も変わらない。

キクの体が弱かった原因は別にある。

キクはシキ国の旧家・邪馬^{やま}家の姫だった。そして父親はシキ国皇家直属の特殊技能集団を束ねていた男。

つまるところ。シキ国に於いては余りにも特殊な容姿を持つて生まれた為に、この大陸でも都市部にはよく見られる、上層階級の体面を気にする精神がキクを世間から徹底的に隠す方向へ働いたのだ。屋敷に半ば幽閉に近い形で閉じ込められ、屋敷内の者からは忌避の視線を向けられ続けた。まともな扱いを受ける訳も無い。常に孤独に苦しみながら、死なせたら死なせたで祟られそうという理由で生かされ続けた。十五年もの年月。

心身ともに弱くするには十分過ぎる時間だった。

そんな彼女が、突然現れ自分をまったく知らない異大陸の地へ連れ去ったこんな賊に、四十五年間も明るく笑い掛けてくれた。彼女が抱えた、娘夫婦と孫を失った悲しみと負担は誰よりも計り知れないものがあつたハズなのに、あれから七年半も生きて、精一杯周りに愛を与え続けてくれた。

バテンにとつて。妻は間違いなく。

「お前はオレが人生で見付けたトレジャーの中で一番の、宝だよ。今でも。これからも」

だからこそ。

「できれば共に、一緒に骨を埋める地を探す旅に連れて行ってやりたかった」

しかし。それはもう叶わない。妻はこの地と定めて天寿を全うした。

そう。間に合わなかったのだ。自分は。

それもこれも何もかも。

あの！

アンポンタンのせいだ！

と、叫び掛けてバテンはぐぐぐ……と堪える。石碑に刻まれた最後から二番目の名前を娘と妻の仇のように睨みながら我慢した。舌の根も乾かぬ内に同じ過ちを犯す訳にはいかない。

俯き加減に肩を震わせる主を見て、何を勘違いしたのか後ろでアルクウがぐすつと鼻を嚙る。メイド長、顔色一つ変えずにジト目。

バテンはふう、と深呼吸で気を取り直した。

「お前がここで決めたのだから、オレもいずれこの地に埋まろう。なに、安心しろ。もうお前を置き去りにするような事はしない。オレは何処へも行きやしないとも」

さわさわと頭上の枝葉が風に吹かれて静かに擦れ合う。庭の方から子供達の高いはしゃぎ声が聞こえる。

この場で唯一言葉を紡ぐバテンの声は、石碑に染み入るように響いた。

「だから、必ず帰ってくるからな」

アルクウにはそれが、旦那様が自らの胸に刻み付けているようにも聞こえた。自然とアルクウは再び黙祷する。丁度隣でメイド長もずっと改めて目を閉じる所だった。

この場にいる者達は、全員、「必ず帰る」という言葉の重みを知っている。よく、分かっている。

奥様が亡くなられて以降、屋敷を離れたがらなくなった旦那様が、

今日、初めて屋敷を空けられるのだ。その旅路に同行する役を、アルクウは旦那様から指名されていた。黙祷し、奥様に誓う。旅の間は、私が旦那様をきつと守り通します、と。

屋敷を任されたメイド長も、立場は逆でも心境は同じだったろう。そんなメイドさん二名の前で、当のバテンはというと。

「うん、大丈夫だ。決して、お前を置いて行くんじゃないんだからな」

珍しくバツの悪そうな、思いきれてないような煮え切らない様子で、言い訳みたいな事を言い募っている。

自分が言ったセリフが矛盾しているのが気になるらしい。

「ただスミレちゃんと、……あと、義息子に会いにちょっと出掛けただけだからな。うん。あゝ、それと孫達な。そうそう、アキちゃんとりッくん。まゝ半年前に。あの、お前の時に。帰ってきてくれたけどな？ やっぱり、確実に会える年に一度の機会だろ？ お前だって気になるよな？ オレだって会いたいし。すつごく。だからオレがあの子達の様子、見てきてお前に報告するから。んで、お前の分も、うんと可愛がってくるからな！ あ、いや、もうあの子達に会えないお前に嫌味言ってるんじゃないでその」

「キク様には誠実でありたい気持ちは分かりますがいつまで続けるつもりですかバテン様」

「うぐ」

ギシ、とバテンが固まる。それから止まない弁解にストップを掛けたメイド長を振り返り、

「そ、そゝは言ってもな、こういうのはやはり、色々複雑であつて……」

「見てて不毛ですバテン様」

「ぐはっ！」

一言で切り捨てられ、胸に手をやりハートにダメージを負うジェスチャー。アルクウが「メイド長……」とこんな時でも容赦ない上司をハラハラ見ている。

そこで「あ」と何かを思ったメイド長は言い直す。

「不毛ですバテン様ハゲ」

「ハゲとらんわ！　というか不毛の意味違っそれ！」

ビシ！　とバテンが指差しでツツコミを入れた。メイド長は横を向いて相変わらず無表情。

でも微妙にニヤーと口元が緩んでいるように見えなくもない。メイド長はたまにこういう冗談を言う人だった。

アルクウはますますハラハラドキドキする。しかしその眼差しの中には少なからず、羨望も含まれていた。

見ると旦那様は目を三角にしつつも確かに笑みを浮かべていた。

奥様が亡くなって以降の旦那様が、こうして笑顔を失わずにいるのはメイド長のお蔭だとアルクウは思っている。いや、アルクウだけでなく、恐らく屋敷で働く者全てがそう思っている。

凄いなと思った。自分もいつかこういう風になれるかなと憧れてしまう。

……いや、まあメイドにあるまじき行為とかはとてできないけど。

本当は自分も大恩ある旦那様にこういう形で報いたいと思うからだから。

「旦那様」

思い切ってアルクウは言い争ってる（というかバテンが一方的に文句を言っでメイド長はツーンと無視してる）所に呼び掛けた。「ん？」と二人が目を向けてくる。

出来る限りの優しい笑みを浮かべ、アルクウはハッキリと言い放った。

「そんなにお気になさなくても、奥様はきっと旦那様のお気持ちをしっかり分かっていて下さると思いまむみよっ！」

ハッキリと言い切った。

「……………」

「……………」

scene 3 - 1 / 2 冒険王 (後書き)

かなりデリケートな要素なので、「アルビノ」という言葉を明言しようかどうかどうしようか考えたのですが、力不足故使わないとうまく表現できませんでした。気になった方がいらっしゃったらごめんなさい。

この作品は飽く迄フィクションです。言葉の概念も現実とは多少異なる解釈がなされているという事で、現実とは切り離して頂けると助かります。

後半は日付が変わったあとに更新します。起きてたら。

寝ちゃってたら明日朝起きてからの更新で。

いや、なんか同日更新って節操ないような気になっちゃって。

scene 3 - 2 / 2 スターモント (前書き)

寝て、しまいました……。

万が一深夜まで起きて待ってて下さった方、本当にスイマセン。

あ、そんな人いない。いやいや一人くらい、あ、自惚れんなど。
でも念には念をと、え、寝言は寝てから言えですかそんな寝言
じゃないからようやく更新してる訳でしてー！

とにかくごめんなさいでしたー！

リニューアル前に、更新タイマーなる機能の話が出てましたけど、
アレ、早く実装してくれないかなー、

とか密かに思ってるのは一休だけでしょうか？

べ、別にヒナプロの皆様に責任転嫁しようなんて全く思っていない
んだからねっ！

scene 3 - 2 / 2 スターモント

「スターモント家の当主は代々家督を次代に譲ると伴侶と共に旅に出るんだ。そして大陸中を回って、自分達が骨を埋めてもいいくらい気に入った場所を見付けると、そこで死ぬまでの余生を過ごす。

行先は同伴する執事長かメイド長しか知らない。オレも我が両親がどこで最期を迎えたのかは知らん。前メイド長から訃報の知らせを受け取るまで一切連絡は無かったしな。そして旅に出る前に伴侶が当主が亡くなった場合のみ、死者は屋敷の石碑の下に埋葬されるのだ。この場合残った方は家督相続後も屋敷に残って余生を送り、最期は共に石碑に眠る。別に決まりとかでは無いんだが、自然とそうなるらしい。オレもキクを置いて旅に出る気なんてさらさら起きないからな。本当はできれば旅に連れて行ってやりたかったのだが……。だからまあ、我が義息子が家督を継ぐ前に逝きおったのは許し難いとは言え、ちゃんと自分達の土地でスマレちゃんと共に眠った事だけは、オレも感謝してるんだよ。スターモントの人間にとって、それが人生で最期の幸福だからな」

という話をアルクウが道すがら聞いたのは数分前。現役一流ハンター並の運動能力で追い付いてきたバテンが羞恥に狂ったアルクウを何とか宥め落ち着かせた後、そういうええ骨を埋める地を探す旅がどうこうってどういう意味なんですか、のような主旨の質問をした際に返ってきた答えだ。

その流れを取っ掛かりに二人は雑談しながら並んで歩いていた。話題は主にスターモント家についてだったが、八年以上もお仕えしている割に今まで家の事を詳しく聞いた事がなかったアルクウには結構新鮮だった。特に、スターモント家の役目は“大陸最強の人脈”を用いて色んな所に人材を紹介する事だ、というのをアルクウが知らなかったと言うと、逆にバテンが虚を突かれた顔をしていた。

正面の路地からいきなりプーギーが現れたのはそんな時だ。普段

トテトテと歩いている姿しか見ないプーギーがピューというくらい
のスピードで真っ直ぐバテンの足元までやってきて、ブウブウ言い
ながらバテンの足に纏わり付いて顔を見上げてくる。時々腰辺りま
でピョインと跳ねる。

人に飼われているのか首には――恐らく虹色鉱石とクリスタル系
を混ぜて加工した物だろうか――複雑に複数色の鮮やかな輝きを放
つ親指サイズくらいの大きな雫型のペンダントが提げられていた。

随分人懐っこいプーギーにバテンとアルクウは足を止め、バテン
は対応に困り、アルクウは嬉しそうにプーギーを構ってあげようと
した。

「見付けた！」

すると前方から少年の声が張り上がった。直後、プーギーは一も
二も無くアルクウの手を擦り抜け駆け出した。ピューと少年から逃
げるように走り去っていく。

「くっ、こいつ！ 待て！」

慌てたように少年が追い掛けていく。十才くらいの少年だ。活動
的ながらもちよつと格好付けたような服装で、首に鍛冶職人が付け
るようなゴツいゴーグルを引っ掛けていた。どこかの裕福な所の子
だろうか。

少年はバテンとアルクウを眼中に入れず脇を通り過ぎ、なんだか
真剣な顔でプーギーが入っていった路地に突撃していった。

「あれれれ！？ どうしようどうしよう見失っちゃったにや！」

今度は少女の声だ。プーギーと少年が来た方と同じ方向に二人は
目を戻す。近くの路地から飛び出してきたらしい、今し方の少年よ
り少し年上くらいの少女と、黒地に緑の網目模様のバンダナを頭に
巻いたアイルーがいた。アイルーはともかく、少女の服装は少年と
違い行商人が身に付ける旅装に近い。の割に手や首や耳など引っ掛
けられる所全部にゴチャゴチャジャラジャラとアクセサリーがくっ
付いているからこの子もそれなりに裕福な所の子のようだが、折角
かわいらしい外見に元気なテンションをしてるのに、子供にしては

装飾過多な為なんだかミステリアスな雰囲気を感じる。

ところで今の発言には語尾に軽くネコ訛りがあつたのだが、

「大丈夫、こつちだ！」

と、鼻をひくひくさせながらアイルーの方がネコ訛りの完全に抜けた口調で言つたので、どうやらネコ訛りで喋つたのは本当に少女の方らしい。少女は四足で走り出すアイルーに「にやつ！ 待つてよ」とか言いながら付いていく。

プーギーと少年が入り込んだのと同じ路地へ姿を消すアイルーと少女を見送り、アルクウは優しい声音で呟いた。

「こんな所でもおいかけっこなんて、ふふ。元気いいなあ」

直前までの会話内容とは全く関連がないが、どうせ雑談だったので問題ない。

「む？ あー、うーん……」

しかしバテンは齒切れ悪く応じた。

ただのおいかけっこ。と言うにはなんとなく真剣味があり過ぎるようにバテンには見えたのだ。が、

「やっぱり子供は元気が一番！ あれなら特に、お屋敷を解放する必要もなかったかもしれないねー」

嬉しそうなアルクウを見るとどうでもよくなった。まあ、大方少年と少女の間でどちらが先にプーギーを捕まえるか・みたいな勝負でもしてたんだらうと適当に考える。アイルーは少女に味方したとかきつとそんなんだ。

「いや。元気なのはいいが、やはり危なっかしいな。子供が駆け回るにはここは乱雑過ぎるぞ」

言い交わしながら二人が再び歩き始めた場所は辺境最大の街ジオ・ワンドレオの一角。港へ向かう海沿いの道で、航路から仕入れた物品を運び入れる倉庫が並ぶ、街の中では最も広い道の一つではあるのだが、如何せんそこら中に木片や釘や何かの鱗の欠片など細々したモノが散らばっている。踏み付けたら転んでしまいかもしれないし、転んだ拍子に釘が目に入ったりとか海に落っこちたりとかした

ら惨事だ。海面は平均で堤防の下五メートルにある。

「皆さんがちゃんと掃除すればいいんだと思います。転んだら危ないのは大人も同じですよ」

「毎日毎日次々と色々な物が行き交うからな。一々目くじら立てて掃き掃除などやってられんのだろう。込み合う時間帯などでさっさかしてたら邪魔になるし」

「今みたいな時間にはぱつと掃除するだけでも変わるのに。何で誰もこういう所に気を配らないんでしょう」

「そもそも駆け回る為の場所ではないからなあ」

「うーん、と困ったように腕を組むバテン。隣を歩く若いメイドさんにしては珍しく強気な発言が目立つが、それ程腹に据え兼ねているのが分かる。街内で最も子供の人口密度が高く、また自由度の低い場である孤児院で暮らしていた為か、基本的に控え目なアルクウは少しでも子供が絡む問題に対してだけはかなり積極的になる。屋敷を子供の遊び場に解放したのも元はと言えばアルクウが相談してきたからだった。

「なんなら私が清掃を受け持ちたいくらいなんですけど……」

アルクウが窺う目でバテンを見上げる。もちろん屋敷の仕事を疎かにするつもりはないが、旦那様が許してくれるなら、時間外でこの掃除をさせて欲しいという想いだ。

そういうアルクウの面を八年でよく理解しているバテンはしかし渋い顔をする。

「勝手にやる訳にはいかんよなあ。この辺りの管理者に、ウチの使用人を清掃に派遣しようと思っ掛けてやってもいいが、現状で十分問題無くこの仕事回っているなら余計な給金の増加にしかならないだろうし、難しいな」

「給金なんて、私なら無償でやらせて貰います」

「うん。やるこちらとしてはそれで良くて、やらせる形になる相手としてはそういう訳にもいかないんだよ。困ってる訳でもないしな」

こういう問題は現場の意識に任せるしかないな、とバテンが諭すと、アルクウはしゅんと頂垂れてしまった。ちょっとした簡単な事ですぐに改善できるのに、自分では手が出せないのがもどかしいのだろう。

どこまでも直向きな彼女の様子を見、バテンは何でも無い調子で付け加えた。

「だが、どうやら子供が入り込んでしまっているようだし、大人でも危ないのは確かだ。今度この辺りの管理者にもう少し清掃に気を配るよう説得してみるか」

ハツとアルクウが顔を上げる。バテンが何か？　とでも言うように肩を竦めると、「旦那様……」と呟いてじーんと感激の涙を目元に浮かべた。

「まったく、お前はホントに養女として迎えたくらいだよ」

くつくつ笑いながらバテンがうら若きメイドさんの頭をくしゃくしゃー！　と乱暴に撫でる。彼女は「わっわっ、やや止みめみまさいー！」と悲鳴を上げた。動転すると新言語を開発してしまうアルクウは今日も絶好調だ。たぶん、「止めて下さい」。

「んー、お前が養女になつてくれれば跡継ぎ問題もかなり軽くなるんだがなあ」

「そそそそんな私なんかなんてとても無理です！　だって、私は孤児で、スターモント家は上流貴族で」

「養子縁組に生まれなんか関係ないぞ。壊滅したキャラバンからお前をこの街に連れ帰った時、お前をウチの子として引き取るって話も実際あったんだし」

なんて遣り取りをする二人は、アルクウの服装さえメイド服でなければ傍からは主従の関係というよりも、親子か、年齢差的に祖父と孫娘くらいに見えるのかもしれない。

「大体、私なんかよりもっと、アクイラ様とリンクス様という立派なお孫様がいらっしゃるじゃないですかあー！」

バテンの手から脱出しようにも旦那様から距離を離すという選択

肢が最初から排除されていて射程範囲から逃れられないアルクウが苦し紛れに叫ぶ。

なんかちよつと涙声になってきたのでバテンはアルクウで遊ぶのをいい加減にし、現在身近にいない孫達を憂いた。

「うーん、だつてアキちゃんもリツくんもいつ帰って来るか分からんしなあ」

「だから私は反対だつたんですよ！ あんな小さな内から狩りだなんて……子供はさっきの子達みたいに安全な所を駆け回っているのが健全な姿なんです！」

娘夫婦が亡くなった時、双子の孫達は六才だった。娘の夫は天涯孤独の身だったし、姓はスターモントを継いでくれたので自然な流れで孫の二人はジョ・ワンドレオの実家が引き取った。そして祖父母と孫二人はしばらく共に暮らしていたのだが。

一緒に暮らし始めて三年後。孫達が九才になった時。

自分たちが生きてる世界がどういう世界なのかを真に理解させるという名目のスターモント家伝統行事として、バテンはメイド長ダリアと共に孫二人を狩りに連れて行った。まだまだ現役ハンターにも劣らない大人が二人もいるとは言え孫達は僅か九才だ。万一があつてはならない。

獲物は最低ランクのランポスの群れ討伐。

バテンもスミレも初狩猟の時はコレだった。

取り敢えず最初は直に目で脅威を感じる程度の距離でいいと思っていた。のだが。

一体娘夫婦はどんな教育を子供に施していたのか。

最初の一頭こそバテンが斬り伏せるのを黙って見ていたものの。次に遭遇した三頭のランポスを。

大人組が止める間もなく双子は突撃し、手持ちのアイテムやその辺に転がってる素材を完璧に駆使して瞬く間に一掃してしまったのだ。恐怖心については双子はこれより三年も前に一流のハンターすら尻込みするレベルの脅威に晒された経験があった。下位以下のラ

ンポスなんて屁でも無かったのである。

ともあれ実の孫達の資質に「いやー血は争えないな」はっはっはー！」と気を良くしたバテンが調子に乗ってあの シューティングスター 狙撃天使 を育てた狩りのいろはを積極的に教え尽した結果、類稀なる凄腕のハンターを両親に持つ双子は一気に才能を開花。各々勝手に受注を取って来てどんどん難しい狩猟に挑むようになり、

二年前。ちゃんとした狩猟拠点へハンターやりに出て行っちゃった。

「うう、アクイラ様もリンクス様も、普通の子供達と一緒に普通に遊んでいれば、自ら危険に赴く風にはならなかったのに」

「ま、これも一つの形であろう。あの子らには元々狩猟に強い関心があったようだしな。遅かれ早かれハンターを始めていたろうよ」
オレもスミレちゃんもそうだったしな、と心の中で付け加えるバテンにアルクウは眉を怒った形にする。

「だとしても早過ぎますよ。お二人はまだ十四才なんですよ？　まだ甘え足りない年頃のハズなのに……せめてあと一年は戻ってくるよう言い聞かせるべきだと思います」

「えゝ。十四も十五も大して変わらんだろ？」

「お二人は十二才からじゃないですか。だからこそなんです！」

「いやゝ、でも、オレもスミレちゃんも大陸フラフラし始めたの今の我が孫達と同じ年頃だし、今更そんな事言っても自分達はハンターやってたクセにゝみたいな」

「そんな事言ってるから跡継ぎ問題が解決しないんですよ！」

「……ホント、お前は子供絡みになると勢いが別人みたいに変わるなあ」

バテンはボソツと呟くがアルクウは気付かずガミガミ陳情を続ける。

双子が出て行った後、屋敷に血族が爺さんと婆さんしか残っていない屋敷で当主は跡継ぎが割と洒落にならないくらい深刻な事に気付いたのだった。バケモノ染みてお肌つやつやな真っ白い婆さんは

何故か「あらあら。娘もそうなら孫達もあなたに似てしまったのねえ」とか漏らしながら嬉しそうにニコニコしていたが。

「そうだアルクウ。ならいつそお前がリツくんオトさないか。玉の輿だぞ」

「なばあ！？　なななにをいきなりわわわ私なんかがリンクス様にましまもみやでむ！？」

アルクウの氣勢が一言で大転倒した。反動で新言語開発も新たな境地に達したようである。

ましまもみやでむ。ましまもみやでむ。

ニュアンスは感じ取れるが何を言っただかさっぱり分からない。流す事にする。

「嫌なのか？　我が孫じゃ不服か？　アルクウならオレ大歓迎なんだけどなあ。跡継ぎ問題も同時に完全解消するし。万々歳じゃないか」

「いいい嫌とか嫌じゃないとかそういう事ではなくてですね！　ただだつて私は飽く迄使用人でありリンクス様はいずれ旦那様とお呼びすべきお方であいやこの旦那様の意味は夫という意味ではなくてつまりお仕えするご主人様であつて」

「我が母は元々ウチのメイドだったらしいぞ」

「ええ！？　そうなんですか！？　あ、あの中でも私はその、身元も分からない孤児ですし……」

「問題無かるう。ポツケの小僧だつて身元不明の拾い児だ」

「ひやい！？　な、なんか私、さつきから驚愕の事実ばかり知らされてるんですけど……」

お仕えし始めてから八年余り。ここにきて、なんか屋敷での奥様誘拐暴露に始まり平然と明かされる色々に整理が追い付かないアルクウである。これまでこの手の話はあんまり尋ねる気が起きなかったのだ。というか訊く勇気がなかったというか、気にしちやダメな気がしてたというか。

「あの、その、でもやっぱり十近くも離れてますし……」

「む。歳の差か。確かに十歳差は少々ハードルが高いが」

バテンをズビツ！と親指を立て、キラーンとアルクウに告げた。
「そんなもの、愛の力で乗り越えちゃいなヨ、ユー？」

「あ、あ、あ、ああ愛だむめなしやふ——！！！！？」

意味不明の新言語を絶叫するアルクウを連れ、バテンは港に到着した。

二十三にもなって「愛」でここまで取り乱してしまうなんて、この娘の相手が見付かるのもまだ当分先かなーとか適当に考えながらメタペタツト行きの船を探す。話は通してあるので、後は乗船して到着を待つだけだ。

明日は孫達の十四回目の誕生日。

この日に娘夫婦の墓参りを行うのがスターモント家の毎年恒例となっていた。

港から北西に伸びる海岸線を眺める。丁度水平線と地平線の境目の先に、娘夫婦の眠る村がある。

そこには早くも巢立ち掛けている愛しの孫達もいるハズだ。中々会えなくなってしまうたのは寂しく思うが、どこでどんな風に過ごしていようと、生きて、年に一度あの場所で両親に元気な笑顔を報告する姿が見られれば。

それだけでいいとバテンは想える。

もうしばらくは自分も頑張つてやろう。

波はこの日も穏やかで、快晴は空の果てまで続いていた。

scene 3 - 2 / 2 スターメント (後書き)

一休の中でアルクウ株速上々中→→(爆)

何かしらこの娘一休自身が言うのもなんですからメツチャツボだわっ！

ともあれ「虹髪」後日談も残す所あと二編。

一年くらいずーっと書き出せなかった割りに、書き出せたらさくさく進んでる気がしますね。

だがしかし！

シーン4が……彼の地のシーンが……

この夢いっぱいの脳内ワールドでも話として纏まらないのよー！

最後の一コマの景色しか出てこないのよー！

という訳で、唐突に自然と書き出せるようになるまでのんびり待とうと思います。

ホントはシーン5を早く投稿したくてしたくて堪らないんですが、シーン4が書けないんだから仕方ない。

二月中には書けたらいいなと思います(↑

【現状】

シーン1公開済み

シーン2公開済み

シーン3公開済み

シーン4「誰か、沈黙の呪いを解呪できる者は居らぬかー！」

シーン5早く日の目を見せてやりたくてしょうがない（ω（

s c e n e 4 - 1 / 4 番犬 (前書き)

えーと？

……。

あれ。更新したら前書きに書くと思った事があったんですが、何でしたっけ？

Dレポ2の時とかは前書き後書きのネタをメモってたりしてたんですが……やっぱメモしとかないと忘れちゃいますね。

んー？

そつえば気付きたくなかった事に気付いちゃいましたよ。

なんと。

きやわいいメイドさんと北の地のドヘンタイ、同年。

ま、あんな子もいればそんな奴もいるんですよ。だから世の中面白いです。

つまりこんな二十歳でも全く問題ないのです

f (ω ノ

scene 4 - 1 / 4 番犬

「アルコリス地方の港村メタペタット狩人道場」

赤い十字がゆらゆら揺れる。可変にカスタムされたスコープの倍率を最大にしている為、自分の呼吸ですら画面が映す世界を大きく揺らしてしまう。

ふー、と深呼吸。数瞬、ピタリと画面が固定された。そのタイミングで引き金を絞る。

ドシュツ、と火薬が爆発し銃口から弾が飛び出す。軽くない反動を利き足で堪えると、金属と地面の砂利が擦れる音が足元から聞こえた。スコープの画面は銃口から漏れた火の粉と黒煙に一瞬だけ包まれたが、すでにそこからは目を離している。発射された弾はゴーグル越しに行く末を見守られる中、二〇メートル先の岩に印された二重丸の中心へ正確に突き刺さった。

「おー、ナイツシユー。お見事ド真ん中っしょ」

「はー、凄いですねえ。この距離であんな小さな的に」

殺風景な訓練場にそんな二つの声上がる。言いながらチパチパ拍手している後ろの二人に振り返り、でっかいテントウムシを二匹連結させたような見た目のヘビィボウガン ナナホシ天砲 を抱えた男は鼻息を吐いた。

「ふん、これで的が動いてるか狙いを定めるのに一分も掛かってなきや、その言葉にも素直に喜べるんだがな」

ボウガンに加えてそちらでも狙撃を補助するスコープを内蔵したゴーグルをぐいと外し、無造作に伸ばしたような暗赤色の ドスシヤギー をバサッと掻き上げ半目を向ける。すると二人はいいややそれでも凄えっしょそうすよ俺にはできませんとフォローしてきた。男はそれを聞き流しながらボウガンを折り畳み、これ見よがしに嘆息してから改めて向き直る。正直まだ物足りないが、射撃訓練は中

断だ。

「で？　今日は何の用なんだ？」

「そうそう聞いてくれっしょハウンドさん！　こないだの狩りん時にコノヤロー——」

「だからあれは違うだって！　ねえハウンドさん聞いて下さいよあの時は先輩が——」

途端に同時に自分の言い分を捲くし立てる二人。色黒の男が隣の男が如何に酷い失敗をしたかを言及し、言われている方はここにはいない別の熟練の先輩がどうこうと身の潔白を主張してくる。時々村の双剣使いを代表する女性の名前も飛び出てきたりするが、ハウンドと呼ばれた暗赤色の髪の毛の筋肉質はこの二人と話に出てくるもう二人の四人がよく組んで狩りに出る事を知っている。八年前のとある戦いが組み始めるきっかけだったらしいが、めきめき成長して今ではこの、狩りの中継地点として昔のハンター達が自ら興したアルコリス地方の端の港村、メタペタットで最も実力のあるハンターのチームだ。

が、村最強チームの一員である目の前の二人を見ているとちよつと切なくなってくる。

（つたく、俺の仕事は新人教育だったのに。いい加減後進の相談に乗ってやるべき立場の奴らまで手が掛かるな、ウチの連中は。俺が引退した歳なんてとうに過ぎてる奴も、やっぱ俺が相手になってやんねえとダメだよなあ……）

村の教官として。村のハンター全体の兄貴分的存在として。

尤も、彼が教官の職に就いたのはほんの三年前なのだが。元々勝手に実力者が集まってくるような立地なので、メタペタットには興村以来教官はいなかった。

そこへ村初の教官となつたのがこの男。名をハウンド・フアングという。

嘗ては 番犬 の称号で知られ、その剛腕でハンマーをブン回しあらゆるモンスターを噛み砕いていた元一流ハンターだ。

しかし新人に狩りの「いろは」を指導するのが主業務であるハズの彼の元には、週五日くらいの頻度で一人前と認められたようなハンターが入れ替わり立ち替わり色々な相談にやってくる。人によってはそれは近頃狩りで伸び悩んでいたりと、仲間と上手く連携が取れないとかから狩りとはあんまり関係ない妙に壮大な人生相談やら、ハウンド本人としてははつきり言って苦手なのでとても困る恋のお悩み相談（しかも男女問わず）やら十人十色だ。というか皆、本当に真剣な狩猟方面の悩みならともかくそれ以外の話題では別に意見が欲しいのではなく単に話を聞いて欲しいだけらしい。今のようにぎゃーぎゃー互いに負けまいと言い寄ってくる二人へハウンドが投げ遣りな相槌を返しているような光景もここでは日常茶飯事である。

こうなつた理由はいくつかある。

まずメタペタットの狩人道場は村規模の拠点にしては中々立派な訓練場を有しており、そんなもんをまさか村のど真ん中に作れる訳もなく、少々村から外れた場所となつていてる為用が無ければまず人は来ない。新人が指導を受けにくる時間さえズラせば他の人に話を聞かれる心配がないのだ。

さらにハウンドは現役時代、この村に実在した『英雄』の仲間であつた。八年前に殉職した『英雄』は村の墓地の一番奥でこれでもかというくらいに大きな墓に葬られているのだが、八年以上前から村に住んでいて生前の『英雄』を直接知っている者はもちろん、それ以降に移住してきた者も大半が早くも伝説化している『英雄』の話を知つて来ているので、そんな人物と肩を並べて戦つてた彼が番犬ですとなれば、そこまで老いてもいないのに“生ける伝説”みたいな感じで元々村人からは一目置かれた立場にあつた。

そして最大の要因は彼が教官になるまでの経緯だ。現役時代の備蓄が底を突き掛けてきたハウンドは食いつぱぐれを回避するべく、ハンターズギルドの出張所が間借りしている村の集会所に連日足を運び、ハンターしてれば度々ブチ当たる壁という魔物に苦しんでい

る様子の若輩ハンターを見付けると親しみ易い態度で話し掛け、相談に乗りつつもこつそりメシを奢らせる・なんて事をしていた時期があった。まあ悩める若者としても相談相手は欲しい訳で、『英雄』の仲間がその相談に乗ってくれるとなれば願ったりであったのだが、形だけ見ればコレは、というか結構前から皆密かに気付いていたのだが。ハウンドは。

ただの働きもせず年少者に集る無職のオッサンであった。

しかも実際に的確なアドバイスをしていたから質が悪い。

で。流石に村の長である竜人族の小っこい爺さんが村の仕事を唯一何もやってない働き盛りのマツチヨを見咎め、

『いい加減なんか仕事せんかい』

と襟首捕まえて叱りつけ、おまけに当時は集会所の受付嬢だった女性にも、

『ハウンドさんってー、ぶっちゃけいい歳こいてニートですよー』
とキュートな笑顔にのんびりとした口調でトドメを刺されてしまった三十三歳の冬。

じゃあ丁度村にいないし俺ができるのはこれくらいしかないんでハンターの教官になりますと一念発起したハウンドは、現役の頃はハンマー一筋だった為その他の武器を嘗ての濃密な経験で補いながら基本から勉強し直す等の準備を進め、その間に村中の協力で狩人道場を建設して貰い、二十歳にハンターを引退してから実に十五年間ものニート生活に晴れて終止符を打ったのであった。

……振り返ってみれば、教官になろうと頑張ってた最後の一年ちょいはいはともかくとして、よく十五年も無職で食えてたものだ。ハウンドは自分の事ながら呆れたものだ。贅沢に興味なかったり、現役時代に稼いでいた分も少なくなかったのだろうが、何より最早振れなくなってしまうたハンマーや身に付ける機会が無くなった防具を粗方売っ払った分がそれだけ莫大だったという事か。

とにかくこうして村での明確なポジションを獲得したハウンドは、^{やま}疾しい部分が消滅したと同時にニート時代末期の名残でハンター達

から気兼ねなく相談できる兄貴みたいな信頼が確立し、

「——てなるまで必死に俺が体張ってたのにホントコノヤロー有り得ないっしょ!？」

「——なんて先輩が言ったらそう繋ぐって考えちゃってもしょうがなくはないすか!？」

こんな感じになった訳だ。

ちなみに教官職のお給料は村長から約束されている“毎日の食事”。ただし、リアルタイムで教え子がいる場合に限り。

どこの教官も拠点の長に頭が上がらない理由は完全にコレである。メタペタットでは特に必要だと言われてこなかった教官の席であるだけに、ハウンドは需要に関して内心こっそり不安だった。しかし幸い、どうやら教官というのはいないならないで問題ないけどいたでありがたい職であるらしく、この三年間教え子が途絶えた事は無い。寧ろ逆に教官のいない近隣の拠点から指導を受けに来る新人までいて、現在三名いる教え子の内二名は他所のハンターであるくらいだ。それよりもよっちゃん訪ねてくる目の前のバカ二名みたいなのが三十人くらいいる方が余程不安な気がするこの頃である。

当の今日の相談者達はハウンドが「あーそら酷えな」とか「いやーそこは確かにないよな」とか適当に返事している内に気が付いたら顔を突き合わせて二人だけの口論に突入していた。他人の人生相談に乗ってもメシが貰える訳じゃない上にもう相談ですらなくなっていてやる事がない教官の顔など全く視野に入っていない。

まー勝手に解決するならそれに越した事はないし、熱くなりすぎて拳が出そうになったら止めればいいかと深く考えずに一歩退いてくだらない舌戦に火花を散らす村を引っ張るハンター二人とその様子を眺めるマツチョという構図が出来上がる。

しかしハウンドは手持無沙汰且つ不毛な状況にすぐに飽き、コイツら無視して射撃訓練再開しようかと真剣に考え始めた時、訓練場に一人の女性が現れた。

女性は湧き上がるパトスに従うがままの実力派二名を発見すると間延びした声で呼び掛ける。気付いた二人はピタリと素に戻り声を揃えて平静な挨拶を送った。気の抜けた表情でそれに応じた女性はさらに彼らのチームの一人である熟練者の名前を出しながら、

「鬼の形相で集会所を飛び出してつちやいましたよー。あのバカ共に血の鉄拳制裁をくれてやる、とか叫んでましたけどー」

「ぎゃー——！！——」

バカ共が互いに抱き付いて悲鳴を上げる。ハウンドは話を聞き流しながら何となく察していたが、要は二人でやらかした失敗の責任を如何にして擦り付けるかで必至だったらしい。

しかし惜しくも時間切れ。チームのリーダーは平等に裁きを下すと決めたようだ。ハウンドとしては下手に逃げ回ったせいで無駄に油を着火させたんじゃないかみたいな感想を抱いてたりするのだが、根本的に目前の地獄絵図しか見えていないあぽん達は巨大な拳そのまんまな外見の漢気溢れる熱血決戦ハンマー テッケン を担いで今まさに自宅を飛び出しこちらに全力疾走を開始する鬼の姿を想像し、直後に聞こえてきた雄叫びに再度悲鳴を上げた。

「すすすすいませんじゃあ俺はこれで失礼するっしょー！！」

「あ待て俺も！俺も！お邪魔しましたすまた来るすー！！」

我先にと押し合い圧し合い出口ヘダッシュする二人だが恐ろしい勢いで近付いて来る鬼からは逃れられない。二人が狩人道場から一歩外へ出たくらいのタイミングで恐怖も最高潮に達した悲鳴のデュエットが上がり、数秒後の重々しい振動音がそれを掻き消した。

「この村のハンターはいくつ世代が変わっても皆元気ですねー」

「ふん、ハンターってのはそういう人種なのさ。獲物を追う足を？がれ、隅っこで静かに丸まつてる獣も放って置いちゃくれない」

のんびりと呟く女性から目を逸らし、ハウンドはそう嘯うないて右足の膝上辺りを何気なく掻く。その利き足の膝から下は裾の布地が途切れているハズなのに、外気に晒されているのは脚用防具の脚甲のような鉄製の脚。しかし足首の間接部を見ると、布地に装甲を当て

て強化しているのではなく、本当に鉄の塊が連結しているのだと分かる。

義足だ。

ハウンドがハンター稼業を引退する事になった要因を無意識に擦っている、女性はふいつとそこに目を向けてこんな事を言った。

「うーん、やっぱり木の棒の時の方が海賊みたいでかわいくていいと思うんですけどねー」

「……だから何故俺にかわいさを求めるか。あと海賊はあんまりかわいいモンではないだろ」

「海賊は怖いですよー。でも船長さんみたいな棒の義足はかわいいじゃないですかー」

「ふ、そうかい。全然分かん」

「えー？」

ぼやーと首を傾げてちよつと拗ねたような仕草を見せる女性はやや前かがみの姿勢で肩越しに振り返り、

「かわいいよねー？」

問い掛けた先にはもう一つの小さな命があつた。女性と同じ髪色の頭は女性の肩甲骨の真ん中に乗っかり、その体は後ろ手に回された女性の細い両腕と華奢な背中でした。しっかりと抱えられている。よくもまあここまで緩んだ表情ができるなと思ってしまうくらいに緩み切った表情でお寝むしている一才の幼子は、背負われるまま重心が動いた事に目元をくしゅ、と動かし、むー、と唸った。女の子みたいに丸っこい顔の息子の反応を女性は都合よく解釈し、「ねー」とか話し掛けながら、肩口をぎゅつと握っている小さなぐーを張りのある頬で擦る。

そんな母子を尻目にハウンドは腰元に提げていた ナナホシ天砲を再び展開した。煩いのが去つたので、射撃訓練を再開する為だ。腰を落とし、銃身を下に向けてリロードする。弾はLv1 通常弾。ボウガン本来の威力がほとんど発揮されない最低性能の弾だが、安価に買える雛型さえ持っていれば勝手に弾を無限複製してくれる

為、ボウガンの入門者や射撃訓練では無駄撃ちを気にする必要がなくなるという道理でよく用いられる弾だ。ガンナーにとっては致命的な弾切れもこれさえ持つていれば事実上起こり得なくなるので、保険として狩りに持ち込む者も多い。

ゴーグルを掛け直して背後の母子を意識から追い出す。スコープを覗き込み二〇メートル先の狙いを付ける。さっきは狙いを定めるのに一分も掛かってしまった。今度は一度も躊躇わないように心掛ける。画面は揺れたままだ。それでも視界の十字が岩に描かれた二重丸の中心を捉えた瞬間、一思いに発射した。利き足の義足で反動に飛びそうになる体を支える。目はすでにスコープから離し弾の行方を追っていた。弾は的の三メートル程手前で急激に軌道をぶらつかせたが、ギリギリ外円の内側へ着弾した。

おゝ、と小手を翳^{かき}して見学していた女性が感嘆を零した。しかしハウンドはふん、と悔しげな鼻息を洩らす。

「今のダメなんですかー？ あんな遠くのあんな小さな的にちゃんと当たってましたけどー」

「それでも ぶれ幅DOWN のスキルが身に付く装備で補助してるんだ。早撃ちを意識したとはいえ、せめて内円の中には入れたかった」

淡々と解説するハウンド。目を覆うスコープ内蔵ゴーグルは ハンターキャップ と呼ばれるハンター用の頭用装備だ。その他左腕に物々しい鉄板の楯が付いている腕用装備は ハンターガード、胸元にちよつとおしゃれな弾丸用ポケットがある胴用装備は バトルレジスト、滑らかな光沢を放つ特殊合金製の腰用装備は クロムメタルコイル。脚だけは（義足が布を噛んでしまいそうという理由で右の膝から下は切り取られているが）普通の運動着だが、それ以外はいづれも 精密射撃 を促す機能（または他防具のそれを増幅させる機能）を備え、同時にフリーサイズで完成品が店頭にて販売されている程度のハンター用装備である。

「あ、だから支給された教官用装備じゃなかったんですねー」

「ふん、クロオビシリーズか。まあアレは教官の制服みたいなモンだから、指導時以外はあまり着ないな。お前だつて受付嬢やつてた頃は営業中以外あの制服着なかつただろ？ それと同じだ」
「着てましたよー。おんなじの二〇着揃えて公私共に使い回してましたー」

「……うん。ほるほど。道理でギルドマネージャーの任を村長から引き継いだ時に、制服姿以外の姿を初めて見た気がした訳だ」

げんなりとハウンドはあの冬の日に自分にトドメを刺してくれた子持ちのギルドマネージャーへゴーグル越しに視線を遣る。

そこそこ美形のこの女性は、この世には慌てるべき事態なんて何一つないんですよー、と全身を使ってばやいているような所作でハウンドを見返し「？」と小首を傾げている。これまで村がどんな危機的事態に陥ろうと、彼女だけはマイペースに集会所でうたた寝していたとハウンドは記憶していた。断定する。村人の誰も、彼女が取り乱した所を見た事がない。村長に突然、「受付嬢を世代交代してギルドマネージャーの業務を引き継いでくれんか」と言われた時も、特に明確に交際していた訳でもなかった十三も年上の男にいきなりプロポーズされた時も、よく考えたのか何も考えなかったのか曖昧な間を置いてから「いいですよー」といつもの調子で承諾していた。

どこからどうみても母親似の背中の子も、なんとなくそんな人間になるのだろうというのが村人一同の意見だ。基本一日中喧しい集会所で母親に負ぶわれているにも関わらず、誰も起きている所を見た事がないのだ。将来は大物のマイペースに違いない。

「ところでそろそろ集中したいんだが？ 今日のノルマはまだ四分の一しか済んでないんだ」

「じゃ危なくないように離れてますねー」

言ってギルドマネージャーはてくてくと訓練場の隅に移動していく。

というか集会所にいないていいのか？ とか、そもそも何か用が

あつて来たんじゃないのか？　みたいな根本的な疑問がハウンドの頭を一瞬過つたが、気持ちはすでに訓練に向いていたし、何より彼女の動作が凄く自然だった為その疑問は解けるようにして擦り抜けた。そして彼は射撃に集中していく。

——ハウンドの射撃訓練は丁度八年前に始まった。

彼の片足は義足だ。ハンマー一筋だった彼にとって、片足を失うというのは利き足であれ軸足であれ致命的だった。利き足が無ければ踏み込めない。軸足が無ければ踏ん張れない。モンスターを叩き潰す所か、ただその場でハンマーを振り回す事すらできなくなった。日常生活くらいは杖無しで送れるようにと、木製の棒みたいな義足を利き足の膝から生やしたが、試すまでもなくそれではハンマーを担いただけでぽつきりいく事請け合ひだった。

そうしてハンターを引退に追い込まれた彼は金だけは余っていたので、クセのように集会所に顔を出しつつも仕事はせず、自分の利き足と同時に失った大切な人の墓に通う毎日が習慣となっていた。たまに『英雄』の子供達の相手をしたりもしながらしばらくそんな生活を続けていた。

そして八年前。『英雄』が伝説になつてしまった一連の事件の中で、彼は絶望の中にたった一つだけ、自分に戦える道が残されている事に気付いた。いや、もう使う事の無い現役時代の装備品を一斉に処分した時に、“ソレ”だけは念の為に残しておいた時点で気付いてはいたハズだ。ただ、深い暗い失意が掴む事を忘れさせていた。八年前に彼はソレを取り戻した。

そう。もう狩り場に出れなくても。もうハンマーを振れなくても。動き回らなくていいのなら戦える。足で体を支えなくていいのなら戦える。

拠点防衛戦なら力になれる。固定砲台のようにすればボウガンでの遠距離射撃で力になれる。

八年前まではその時の為の備えを怠っていた。ある少年とアイル

「、二つの悲劇が自分の怠慢を知らしめてくれた。あの悲劇から何も学ばないなんて事は決して許されない。」

以来、ニート時代後半から今日まで、ハウンドは自分の現役時代の唯一の名残である ナナホシ天砲 を新しい相棒に、使い古された言い方だが、實際雨の日も風の日も、射撃訓練を欠かした事は一日足りとも無い。

災厄は、晴れの日以外は嫌いなんて甘っちょろいセリフを吐いてくれたりはしないのだから。

本日のノルマをちよつと食み出した所で訓練を終え、訓練場の片付けも済ませたハウンドは狩人道場の建物に入り、 ナナホシ天砲 と脚用装備のような鉄製の義足を労うように軽い手入れを施す。滅多にお目に掛かれなくらいに精巧なこの義足は、教官になるに当たり、せめて軽量の簡易模擬武器での実演くらいはできるようになりたいと、ン・ガンガで修行しているツクシという名の知り合い——というより正確には『英雄』の友人であった鍛冶見習いに、頼み込んで開発して貰った物だ。足の形をしている上に、足首の部分がちゃんと曲がってボウガンの反動にも耐えられる義足を作れる者は世界広しと謂えどそう何人もいないだろう。

ちなみにツクシは元々、師事していた祖父に付いて太刀の本場シキ国から刀鍛冶の鍛練にこの大陸へ移住してきたのだが、こういう繊細な物を開発したり、加工業に限らず料理や裁縫などとにかく『作る』という行為に関して凄まじく尖った才能を持っているクセに、唯一本人が一番作りたいと精進している『刃物作り』だけは決定的にセンス皆無、トドメには望んでもいないのに剣の扱いの方は超一流という、溢れる自分の才能に逆に泣かされる男である。

まあとにかくこの義足のお蔭で銃身を何かに乗せて安定させるとか壁を背にして反動の支えにするなんて事をせずに己が身一つでヘイボウガンを扱えるようになったので、ハウンドとしてはツクシ様様なのである。

尤も、義足の関節は基本直立時の形に戻るように設計され、足首が曲がるのはハウンドの意思ではなく単に地面に引っ掛かると足裏が地面にペタンと着くような仕掛けになっているだけなので、やはりこんな足で満足に走る事は叶わず、仮に戦闘中に壊れでもしたら間合いを取るとか以前に敵から逃げる事もできなくなるので、とても本来の狩猟に復帰するなんて事はできないが。

「で前は結局何しにここに来たんだ？ 仕事はどうした仕事は」

義足の手入れも終わり、机に足を乗せるとガチンバチンと慣れた手付きで接続部を締め、膝に装着し直しながらハウンドは、向かい側にドバーと腕枕しているギルドマネージャーに声を掛ける。彼女の背の幼子はこれまで一回も目を覚まさないまま今現在もすやすや眠っており、なんだかオンブバツタみたいだ。その姿勢のままギルドマネージャーはのんびり答える。

「お仕事なら大丈夫ですよー。受付の子達をしつかり教育してますからー」

「いやあんた現場の責任者だろうが。何かあった時に責任者が対応しなきゃならん場合だってあるだろうに」

「大丈夫ですよー。あの子達なら何かあっても慌てず騒がず責任者不在の場合の対応を寝惚け眼でこなせますからー」

「寝惚け眼なのか」

「はいー。ちゃんと教育してるのでー」

「ク、ハッハッハ。そうか。いらん教育すんな」

ズビシ、とギルドマネージャーにチョップを下して立ち上がる。

そしてうあーと両手で頭を擦りながら呻くギルドマネージャーを無視し、何度か右膝を振ってみて義足の接続具合を確認したハウンドは ナナホシ天砲 を腰に提げるとズボンのポケットから狩人道場の鍵を取り出しつつ、

「おい、今日はアイツの忘れ形見が帰ってくるんだから、もうここ閉めるぞ。年に一度の帰還くらい出迎えてやりたいからな。その為に教え子達にも今日は来ても休校だって宣言したんだ」

「もう帰ってきてますよー。見張り番の方からそういう報告が来たんで、呼びに来たんですー」

……ちーん。

と、数秒時が止まったような空気になった。

直後ドタガタン！ と椅子を撥ね退ける勢いで動き出そうとするハウンドの右膝を裏からガツ！ といつの間にか伸びてきていたギルドマネージャーの細腕が掴む。彼女の力は元ハンターのマツチヨの膂力を力尽くで抑え切る程のモノではない。しかしその手に握っている箇所が義足の接続部ならば話は別だ。これではハウンドが強引に動こうとすると途端に義足が外れてしまう。

「ちよー！ おま、来てから一体何分経ったよ！？ 確実に一時間半は経ったよな！？ 離せチキシヨーもうあの子達絶対集会所着いてんじゃねーか！」

「その足で走ろうなんてダメですよー。聞けばこうなると村長が見越したから私が遣わされたんですー」

「だったら来た時に言えよそう！ なんで今まで黙ってやがったああああ！」

「射撃訓練の邪魔しちや悪いかなーと思ひましてー」

「オノレよりもよって滅多に発動しない気遣い精神がここで発揮されるか！ ならせめて俺がどれ程にあの子達を出迎えてやるのを楽しみにしてたかも察しやがれ！ 訓練なんぞ出迎えた後でもできるんだよ！」

「下手にそんな事言つて折角ワンちゃんが毎日続けてきた習慣がここで途切れたらイヤだしー」

「だからワンちゃん言っな！ 止める！ その呼び名！」

「えー。番犬 よりかわいくていいと思うんですけどねー」

「俺にかわいさを求めるなっつーに！」

「ていー」

ギルドマネージャーが気の抜けた掛け声と共に掴んでいた接続パーツを思いっきり引つ張る。ウォンウォン吠えて食って掛かってい

た 番犬 はたったのそれだけであっさり義足の支えを失い派手にスツ転んだ。ハウンドは悪態を散らしながら接続作業を一からやり直すハメに。この義足、外すのはとっても簡単ワンモーションなクセに、しっかり固定して装着するのは結構メンドいのだ。

だが、そのお蔭か作業を進めていく内にハウンドは頭の血が冷めてきた。最後の行程を終える頃には荒ぶっていた気も落ち着き、うし、なんて一言まで零れている。そして立ち上がろうとすると、

「……ふん」

思わず苦笑した。

「？ 早く行かないんですかー？」

見上げたまま口角に笑みを浮かべるハウンドを不思議そうに見降ろしながら、ギルドマネージャーは手を差し伸べている。白くて小さくて細くて武器を持った事が無い柔らかさのある手だ。

ハウンドは手を伸ばす。日焼けしてて大きくて太くて武器を持つ者の硬い手で、高級な工芸品のような手を掴みぐいっと立ち上がる。「ありがとよ。倒れたのは主にあんたのせいだけど」

「いーえー」

返事になっているのかわからないのか微妙な返事を残し、ギルドマネージャーは息子を背負い直して狩人道場の出口へ歩き出す。従うようにハウンドも歩いていき、建物を出た所でしっかり施錠した中には危険な物が一杯なので、主に子供達が留守中に勝手に入って怪我するのを防ぐ為の処置だ。その間ギルドマネージャーは立ち止まってハウンドを待つ。二人は一緒に歩き出した。

「別に待つてなくてもいいんだがな」

「目を離したら走りそうですからねー。のんびり歩いて行きましょー」

「ふん、走らねえよ。どうせこれ以上一分遅れようが十分遅れようが変わらないだろが」

「そうですよー。あの子達は一週間滞在するんですから、まだ時間はいっぱいありますよー」

気の抜けるような会話をしながら二人は村の中心地へとのおんびり歩を進めていく。

ふと、ハウンドは隣を歩くギルドマネージャーの背中で寝こける幼子が寝顔をこちら側に向けている事に気付く。身長差の関係で自分の肘の高さにある幼子の頭に掌を載せ、ハウンドはぐしぐしと撫でた。ギルドマネージャーは肩越しに微笑んでいる。

“二人”の息子は、くしゃ、と顔をしか顰めてむず痒がった。

scene 4 - 1 / 4 番犬 (後書き)

正直、挿し込み方が悔しい結果になったと思ってます。もっと自然に、会話の流れに組み込みたかった感じですが、ま、いいでしょう。

お蔭で思ってもなかった真理が一言ひよっこり出てきたので。

ともあれシーン4は三部になっちゃいましたが、実質ハウンドタインは終了っぽいですね。

まだこの先一文字足りとも書いてないのでどうなるかは知りませんが。

しかし、うーん。

「あれ？ このオッサン無職じゃないかしら？」

て事実気付いたのは『虹髪』執筆中で、ウン年後に教官になるってのは『虹髪』完結前から決めてたんですが……。

まさか十三も下の子に手を出すとは。

犯罪？ 犯罪ですかハウンドさん？ いや、ワンちゃん？

あ、そうだ思い出しました。今回一休、初めて他のキャラ同士で名前と呼び名を被らせてしまったんですね。

ま・どーでもいいんですけど、名前の方の子はいつ出せるのか分かんないし、いつそ予定変えようかな？ 呼び名優先した方が遥かにおいしい気がするし。

ところで一休にとってやたらと名前ネタひやひやな作者様が一名いらっしやるんですが、その疑問が解消しました。

そりゃ同作品から名前引っ張ってきてりゃ被りますよ（爆）

人気ある少年マンガからキャラ名を拝借するのはもう止めにします（ごーん）

scene 4 - 2 / 4 打ち上げタル爆弾 (前書き)

書く前はシーン4も二場面だったんですよ。

まさかワンちゃんの訓練場話があんなに長くなるとは思ってたんで、急遽三場面にしたんですよ。

まさかここもこんなに長くなるとは思ってたませんでした。

自分の文字数爆発っぷりを、甘く考えてました。

でも次がどうなるかまだ分からないんで、一応分母は3のままにします。

いや、場面を書けば確実に一回分になるとは思っんですけど、そうすると次の場面の話の流れが非常に難しくなる気がするんですよ。まあ、どうせ予定してても逸れて反れて原型留めないのが一休なんですけど。

話数が増えて何が一番困るって、そんなにサブタイのネタ用意してないってトコですよ。

ついにアイテムいっちゃいましたよ？ 次どうすんの？

scene 4 - 2 / 4 打ち上げタル爆弾

見張り番はそわそわと双眼鏡を何度も前方へ向けていた。

村の門に常駐する見張り番は観測塔からでは見えない近辺の警戒をするのが主な役目である。

大昔に巨龍が通過した時にできた道を利用してできたメタペタツトは、そこから延びる道も同様に巨龍が木々を踏み潰し、地面を陥没させた跡を利用している。ぴつたりとメタペ湿密林を区切るように地平線まで続く街道は見晴らしが良く、それ故に普段はあまり意識する必要がない。街道より寧ろ何が潜んでいるか分からない周囲の木々の間に気を配るべきなのだが。

その日に村に来客の予定があるという街道の先が気になってしまふ。それが知り合いであり、赤ん坊の頃から知っている子達となれば尚更だ。

だから地平線の向こうから大荷物を運ぶアプトノスが見えた時、見張り番は歓喜に叫び声を上げて大きく手を振りたくなった。

しかしもしかしたら人違いかもしれない。アプトノスの背に乗り手綱を握っているのはこの辺りを周回コースにしている運び屋だ。それだけでは後ろの幌の中に乗っているであろう来訪者の顔は分からない。もし人違いだったらとても恥ずかしい。門番とは村に訪れた人が最初に目にする村の住人なのだ。彼の恥ずかしい失敗が来訪者に、この村は恥ずかしい奴がいる村だ・という第一印象を与える事になってしまう。なので思い留まった。

幌から誰かが飛び降りた。体の動きに合わせてここからでも分かるくらいによく跳ねる、鮮やかな夕色の短髪が見えた見張り番は今度こそ腹の底から大声を出して呼び掛けたくなった。

しかし自分は今周囲の警戒に当たっているハズの見張り番で、街道の先にいる人物を大手を振って出迎えているなんて事が知れたら仕事をサボっていると村内の人達に思われるかもしれない。実際あ

んまり職務を全うできている状態とは言えない。なので見張り番はドキドキと高鳴る胸を精一杯抑え付け、真面目に木々の間に目を光らせているフリを頑張った。

この辺の小心さが、彼が門の見張り番を任されている所以なのだが、当の見張り番は健闘空しく表情筋の全てが満面の笑顔を作ろうとピクピク痙攣し捲り結果中途半端に気持ち悪い顔になっているという、傍から見ればしつかり恥ずかしい自分に気付いていない。

活動的な ココットシヨート の夕髪を躍らせて――動作の端々から判断して――少女はアプトノスを追い越し、途中何事か御者に小言を言われたらしく振り返って両手を合わせてから、手をぶんぶん振って村へと駆けてくる。小心な見張り番は足の先から頭のとっぺんに向かって噴き出すかのような激しい感情を大人の体面という蓋で必至に押し隠し、控えめに手を掲げて応えた。もちろん、進む程満面の笑みである。

「見張り番さん!!」

少女がそう叫んで見張り番に飛び付いた。

八年前に亡くなった、天使と呼ばれるくらいに美しかった純白の美女にまた一段と似てきた十代半ばの美少女にむぎゅー、と首に手を回され温かい頬を耳の下辺りに押し付けられおまけに足を浮かして抱き付いてくるもんだからこちらも細いくびれに手を回して支えるしかなくそうすると胸元に薄着の布越しから伝わる二つの膨らみが余計に柔らかくてああああああああ――

と、硬派とかではなく単純に小心が災いして未だに女性経験乏しい見張り番は脳内血管が破裂し兼ねない状況で懸命に理性を繋ぎ止め、緊張している事をおくびにも出すまいと裏返った声で苦笑する。
「あ、あはは。おかえりなさいアキちゃん。相変わらず元気がよくて安心したよ」

「うん！ ただいま見張り番さん！ あたしも見張り番さんが変わってなくて嬉しい！ 村の皆も元気？」

「あ、あははは。ところでもう僕を名前で呼んでくれるようお願い

するのは無謀なのかな？」

「？ なあに？」

「いや、ああ。もちろん皆元気だよ。今日を楽しみにしてた。早くアキちゃんとリツくんに会いたがっているよ」

そう言つてやると少女は足を九〇度に曲げて見張り番の首にブラ下がるような恰好のまま嬉しそうにはにかみ、やっと足を地に付け小心のオジサンから離れた。

人肌の体温が離れた事に見張り番は若干心の寒さを感じつつ、それ以上にホツとする。

底抜けに無邪気な輝きを放つ深いマリンブルーの瞳であの至近距離から真っ直ぐ見詰められるのは正直、精神衛生上非常によくない。理性という名の鋼のハメがぐわらんぐわらん揺さぶられて、大変危険だ。まだ脇の内側で何か得体のしれないモノがのた打ち回っているような感じがする。

「でも、走行中の荷車から飛び降りるのはダメじゃないか。御者さんに怒られてただろう？」

「だって、村が見えたんだもん。我慢なんかできないよ。リツくんも早く降りてくればいいのに」

少女はかわいらしく口を尖らせ、自分が走り抜けた街道を振り返る。「こらこらだからダメだって」と見張り番が夕髪のを小突くと、少女はてへへと舌を出した。

後方のアプトノスは変わらないテンポで歩を刻み、繋がれた荷車をガラゴロとこちらへ運んできている。人間の徒歩よりは早いが、あの分ではもう少し掛かるだろう。

「今年も途中で待ち合わせてから来たのかい？」

「ううん。去年は待ち合わせた村でお互いを見付けるのに苦労したからって、今年はリツくんがシドリフまで迎えに来てくれたの」

「へー。やっぱり仲いいねえ。確か今アキちゃんが暮らしているシドリフって、リツくんが暮らしているハルバ・サンドからここまで来る間に寄るにはかなり遠回りになっちゃうのに」

「えへへ。リツくん優しいもん。今は別々に暮らしてるけど、あたしが手紙書くとすぐに返事くれるんだよ」

照れくさそうに双子の弟の事を自慢する少女。見張り番は二年前のこの日にハンターになる事を両親の墓前に報告し、そしてその一年後、去年のこの日にそれぞれが選んだ拠点から帰って来た時の双子を思い出した。

「そっか。いや、去年会った時はなんか……リツくん凄く変わったように見えてビックリしたけど、うん。アキちゃんを大事にする所は昔のまんまなんだね」

うん、と少女は頷き、

「あたしにとつてもリツくんが一番大切な人。だって双子で、たった一人の弟だもん。確かにリツくん最近ちよつと恐くなっちゃった感じするけど、優しいところはずっと変わんないよ」

その表情はとても晴れやかだった。さらに笑顔を一層濃くして、少女は付け加える。

「それに、年内にはリツくんお師匠さんから卒業できそうなんだって。そしたらすぐにシドリフに拠点を移すって、昨日車の中で言うてくれたの」

本当に嬉しいのだろう。この調子だとこのニュースを全村人に三回くらい繰り返して回りそうな勢いだ。

しかし飽きる者はいないと思える。両拳を肩まで上げてぴょんぴょん跳ねるように語る少女を見てみると、聞いているこっちもなんだか無性に嬉しくなってくるのだ。

「お、じゃあついに双子の息の合ったコンビネーションが復活するのか。こりゃあ狩られるモンスター達にとってはとんだ凶報だろうなあ」

「そうなの！ まだ半年以上も先の話だけど、楽しみだなあ。また毎日リツくんと狩りに出られるんだもん」

「じゃあ今日から一週間はその先取りみたいな感じになるのかな」

「うん！ それも楽しみで最近あんまり眠れなくてね、あ、そう

だ。また今年も一週間宜しくお願いします」

思い出したようにペコリと少女が頭を下げた時、丁度荷車を牽くアプトノスが到着した。少女にマナー違反をされた御者は苦笑を滲ませた目で手綱を引っ張り、アプトノスを停止させる。

「まったく……反則みたいな元気さだな譲ちゃんは」

「あう、ごめんなさい」

「いいよ、次から気を付けてくれれば」

アプトノスの高い背中から飛び降りた御者は、素直に体の向きを反転させて謝る少女を前に、他に言いようがないとばかりにやれやれと肩を竦めると、灰色の相棒に括り付けた荷物を降ろす作業に入る。

その内に、後ろの幌から一人の少年が降りてきた。お、と見張り番がそちらに目を遣る。そして覚悟はしていたが、やっぱり複雑な気分になった。こんな時どんな表情で迎えばいいのか分からない。目付きの悪い少年だった。なにが不満なのか見たくもない世界を無理矢理見せられているかのような半目で、眉間には深い皺がたくさん刻まれていた。何かがあつて機嫌が悪くなったというより、常時不機嫌にしてそんな雰囲気だ。元の目鼻立ちは整っていそうだが、張り付けた表情が「不良」の二文字でそれを覆い隠している。

逆立つた山吹色の クロオビショート をガシガシ掻く少年に気付き、少女はパツと顔を上げて小走りに寄っていった。

「リックくんおかえり」。一年振りの帰郷をお姉ちゃんが出迎えてあげよう」

「ああ？」

ガラスの悪い返事が返ってきた。視線も鋭い。双子共揃って同じ深いマリンブルーの瞳なのに、姉が小動物みたいに無邪気な輝きを放っているのに対し、弟の方は狼や鰐ワニのように獰猛な光をギラつかせている。

たった今聞いた、心温まる姉弟愛に満ちた発言をする優しい弟には、全然見えない。

「つーか姉^{あね}? あんた何いきなり飛び降りてんの? 姉がああいう幼稚な事すると? 双子のオレが恥かくんだけど? いい加減そろそろ考えてから行動してくれないかなア?」

言葉の区切りを一々疑問形のイントネーションにする口調で少女を威圧する少年。片手で夕色の頭を鷲掴みにしてガクガク左右に揺する。もう片手はズボンのポケットに突っ込まれていた。双子にしてはあんまり顔は似てないが、近くで並ぶと身長はぴったり同じだ。「だ、だって一秒でも早く村に着きたかったんだもん」

「それはオレも同じだけど? それって姉に恥かかせる程じゃない? でも姉は? 村に早く着けるなら? オレが恥かいてもいいってワケだ?」

「ふえええんごめんリツくん」

「オレに謝る前に? 自分を反省した方がよくなくくない?」

少女が目尻に涙まで浮かべても少年は容赦ない。仲睦まじいといつか、上下関係がともはつきりしている双子の様子をこの旅路で散々見てきたであろう御者はもう見向きもせずせせと自分の仕事を進めている。見張り番は複雑な気分を引き摺ったまま双子に水を差した。

「まあまあリツくん。アキちゃんも御者さんにちゃんと謝ったんだからもうその辺で許してやりなよ。一年振りの故郷でアキちゃんも嬉しくなっちゃっただけなんだって」

「嬉しくなってるのはオレも同じだけど?」

え、そんなもの凄くテンション低いように見えるんですが・という言葉を見張り番は寸前で飲み込んだ。少年が少女を解放した事で一応収めてくれたと判断できたのもあるし、下手にそんな事言うて矛先がこっちに向いたら怖いなーと思っただのもある。

「と、とにかくリツくんもおかえりなさい。二人共同体の一部が無くなつてたりとかもせずに元気なようにで安心したよ」

「ただいま? 見張りのオッサンも? 相変わらず彼女がいなさそうな様子で? 大変だ?」

「……見てたのかい？」

「見張りのオッサンなら？ どうせ姉にフザケタ真似はできないと思っただけとほつといたけど？ こんなガキにコチってんのって結構ヤバくなくない？ まあ頑張れ？」

「あ、あはは。ありがと……」

自分の呼び名に関してツツコム気も挫かれ、見張り番はちよつと海岸行つて膝を抱えてきたくなりながらなんとか返す。

三十四歳独身。彼女イナイ歴絶好調更新中。

あのハウンドさんだつて今では赤ん坊がいるのに……。

と見張り番が煤けている横では少女が少年の一言にムスつとしていた。

「ガ、ガキつてなによー！ リツくんだつてあたしと同じおんなじゃん双子なんだからー！」

「オレは別に？ まだガキであるのを自覚してるし？」

「え？ あ、そう。ふ、ふーん……あ、でも。へっへーん。あたしなんかもう告白とかされちゃったもんっ」

その瞬間。

「へえ？」

少年の周りの空気が変わった。見張り番がビクツと震える。笑顔なのに目が笑つてない顔なら何度か見たことがあるが、少年は真顔のまま目だけ笑っている。むちゃくちゃ恐かった。今ならその茂みからいきなりドラゴンポスが五頭くらい、大軍勢を率いて飛び出して来ても喜んで受け入れられそうな気がした。それくらい狂暴な殺気が真顔から噴き出している。

そんな弟の様子に気付かない少女は得意げに続けている。

「狩りで組んでる仲間の一人だね。三つくらい年上でー、まーちよつと、村の女の子達に噂されるようなかつこいい人。断つちゃったけどね。あ、もちろん後腐れとかはないように断ったから安心して。その後も狩りでは組んだままだし。ウチの村は新興だから人足りなくて、彼とも組むしかないってのもあるけど。ふっふーん。リツく

んはそういうのまだでしょー？　　いっつも恐い顔作ってるリックン
なんかに、告白しようなんて女の子がいるワケないんだから」

「その男――」

「え？」

小さい口の動きで零れた少年の声に少女が話を止める。少年は半
目のまま疑問形の抑揚で告げた。

「帰りにシドリフに着いたら取り敢えず眉間に徹甲榴弾ブチ込んで
やるからヨロシク？」

「ダメだよ！！　ヨロシくないよ仲間だつて言っただじゃん！！」

少女が仰天するが少年は絶対本気だ。射撃のそれになっている指
の形が物々し過ぎる。来る時に立ち寄ったシドリフで心当たりのあ
る顔でも見たのか、殺気に満ちた視線は特定の方角から動かない。

ここで双子の荷物を降ろし終えた御者のオジサンが呆れた様子で
口を挟んだ。

「おい譲ちゃん達。こっちの仕事はもう済んだんだが、幌の中に忘
れ物は無いかね？　ここの隣の村に予約が入っててな。客を待たせ
る前に着いときたいんだよ」

「あ、ちよつと待つてあたしリュックを――」

「オレが出てくる時に姉の分まで確認したから？　大丈夫なんじゃ
ない？」

少女の言葉に被せる形で言った少年が腕を上げる。そこに女性物
のリュックが提がつていた。もう一つ少年は肩から旅行用の麻袋を
引っ掛けている。こちらは少年の手荷物だろう。

そして、おゝ、と少女が関心しているのを無視して少年はアプト
ノスから降ろされた荷物を見回し、

「こっちも問題無いんじゃない？」

「おお、そうか。じゃ、また用があつたら利用してくんな」

御者が高いアプトノスの背にひよいひよいよじ登っていく。双子
は向き直り、揃った動きでお礼を述べた。

「数日間お世話になりました？　どうもありがとうございます？」

「あたしもありがとうございました！ 道中に聞けたお話、とっても面白かったですっ」

「ははは、ありがとよ。こっちも楽しませて貰ったよ。じゃ、縁があつたらまたな」

最後に双子と順番に握手を交わし、御者は手綱でアプトノスを叩いた。指示に従ってアプトノスは歩き出し、回れ右して来た街道を戻っていく。

少女が「ありがとー！」と手を振っているのに少年が付き合う形でしばし運び屋を見送り、さて、と切り出したのは見張り番だ。

「さあ。二人共長旅で疲れ……てはいないだろうけど。いつまでもこんな所においては僕が二人を独り占めしたみたいになってしまう。荷物は後で手分けしてゲストハウスに届けといてあげるから、早く村の皆に顔見せに行つてあげなよ」

「うん。そうする。あたしも早く皆に会いたいもん。行こ、リツくん」

少女が少年の手を取り村に入ろうとする。引かれるままに少年もそれに続こうとしたが、

「あ、そうだ。ごめんごめん、その前にお願いしたい事があるんだけど」

一転して呼び止めた見張り番に双子は目を向ける。少女など「？」と小首を傾げていた。しかし「いや格好がつかないな」と内心氣にした風にバツの悪そうな表情で見張り番が取り出した物を見て、ああ、と二人共納得の色を見せた。

「君達の到着を、村の皆に知らせてやらないとね」

言いながら双子に一つずつ手渡されたのは手持ちサイズのタルだ。上蓋の真ん中からは紐が垂れている。導火線である。

打ち上げタル爆弾という代物だ。点火すると数秒後に小規模の爆発を起こす小タル爆弾にランゴスタの羽を調合する事で、点火数秒後真上にスッ飛んで行って上空で爆発するビックリ爆弾だ。

普通ならそれは地面に設置して使う物だが、

双子は時間差をつけて点火すると、それぞれ大きく振り被って思いつきリタルを上空へブン投げた。今は亡き母親の教育によってこの手のアイテムを自分の手足のように使いこなせる双子が投げ上げた打ち上げタル爆弾は、上空で仕掛けが起動すると正確に垂直上向きの軌道に乗ってさらに天高く上昇していく。

「ようこそ、メタペタットへ！ アキちゃん、リツくん、おかえりなさい！」

高らかに見張り番が宣言した直後、遙か上空で花火のように咲いた二つの爆発が、二人の帰還を村全体に知らせた。

少女の名はアクイラ・P・スターモント。

少年の名はリンクス・P・スターモント。

八年前に伝説となった、メタペタットの誇る『英雄』の子供達が一年振りに村へと帰って来た。

scene 4 - 2 / 4 打ち上げタル爆弾 (後書き)

ちなみにアキラはアキちゃんと呼ばれてますが、「アキラ」よりも「アキラ」に近い発音です。

アキラ↓アキちゃん↓アキちゃん

リンクス↓リンクン↓リツくん

こんな感じなのかな？

なんか予想してなかった勢いでメタペタツトの名無しーズがしゃしゃり出てきてしまったシーン4です。なんとなく2部で終われなかった原因を奴らに擦り付けたい気分です。

…… 一休の実力不足ですね分かっていますとも。

最後の打ち上げタル爆弾の件は前回を書き終えた時点では頭に全くありませんでした。

なんか江戸時代の人みたいに門のトコから旗でも振ったのかなーとか考えてました。

角笛？ いやいやそんなん使ったらモンスター寄って来ちゃうし。見張り番がモンスター召喚してどうすんの。

そんな事考えながら書いてたらいつの間にか双子が打ちタルブン投げてました。

二段ロケット式打ちタル爆撃。もちろん双子は打ちタルGでも同じ事ができますが……このネタ他のトコで使おうと思ってたんだけどなー。

感性に従って行き当たりばったりに書くから作者であるハズの
休にすら予想外の展開になるし無駄に一場面が長引くんです。

書いててホントに楽しいです。

s c e n e 4 - 3 / 4 ヒーヒーカレー (前書き)

ええ。案の定分母が4になりました。

そこに全てを察して下さい。

scene 4 - 3 / 4 ヒーヒーカレー

メタペタットの集会所は歓迎ムード一色に盛り上がっていた。帰って来た双子を中心に多くの村人が囲うように、明るい声がそこかしこから飛び交っている。

日はまだまだ高くにある時間だ。なのでハンター以外の村人はほとんど現場で仕事のだが、双子の周りには本来はまだそっちにすべき村の次世代達の姿が集まっている。ここに来る前に双子が各職の作業場に顔を出して回り、その際気を利かせた現場の代表者達が、双子がこの村にいた八年前まで二人と一緒に遊ぶ事の多かった同年代の少女達を、「アキちゃんとリツくんに免じて今日は特別だ」と、双子に回収させるような感じで一足早く解放したのだ。

そうして、主にハンターの大人達が外周から見守る中、集会所に集結した村のティーンエイジャー達はここ一年の近況報告を姦しくし合っている。

「え！？ エルア姉村を出るの？」

驚きに声を跳ねさせたのは夕髪の少女、アクイラだ。彼女が真っ直ぐ見詰める一才年上の少女は、自分の決めた進路を語る気恥ずかしさから苦笑する。

「うん。秋には十五になるし、そしたら大陸中を見て回る旅に出ようと思ってる」

「そうなんだ……なんだか、寂しいね」

「ちよつと、なんでアキちゃんが寂しくなってるのよ」

「そうだけど……でも。やっぱり寂しい」

アクイラだって今はもうメタペタットの住人ではない。外から村にやって来る者はたくさんいるが、同じように去っていく者だっているのだ。同年代の中でも、この八年で双子以外にも親について他の拠点に移住していった子は何人かいた。それがまた一人増えるだけの話。

だが、目の前の少女はそこに自分の意志がある。

自分達は、もう自分の意志で生きる道を決め、自分の力で歩めるくらいに大きくなったのだ。

アキラは二年前からハンターになって保護者の下から離れた生活を送っているが、幼い頃から一つ上のお姉さんと慕っていた人の決意を見て、ようやくもうそこまで来ている、言葉では言い知れない特別な時期を実感できた。それはとてもわくわくし、よし頑張るぞ・という気にもなるけれど、同時にとても不安になり、そして今まで当たり前だった何かがゆっくりと、でも確実に離れていってしまうような気持ちになる。

二年前に一足早くその一歩を踏み出した一つ下の少女が小さく肩を落とす姿に、エルア姉と呼ばれた少女は優しく微笑んだ。そっと手を伸ばし、羨ましいくらいにさらさらの夕髪を梳く。

「大丈夫よ。村を出ると言っても他所に移住する訳じゃないわ。ただ、色んな所を見て回って、色んな所で生きる色んな人達と知り合いたいだけ。一周したらメタペタットに帰って来るつもりだし、機会があればシドリフにも立ち寄るから。また絶対会えるわよ。ね？」

「そーそー。エルは私らの年代の中で一番しっかりしてるからね。ちゃんと帰って来て貰わないと困っちゃうよ」

「見識を広めて帰ってきてくれれば村の為にもなるからって、村長が賛同して村から出資してくれるんでしょ？ 私が行くーって言うても絶対そうはならないもん」

横から首を突っ込んで来た二人はフリルがかわいいチェック柄の制服を着ていた。集会所の現受付嬢達だ。ギルドマネージャーがどっか行って御留守の今、彼女らがこの集団に混じっているという事はつまり集会所の営業が完全にストップしている事を意味しているのだが、咎める者はいない。

受付にはでかく「全面セルフサービス展開中」と達筆で書かれた張り紙が掲げられていた。カウンターのの上には各種業務のマニュアルがデデンと置いてあり、利用者が何をどうすればいいのかが非常

に分かり易く纏められているから用意がいい。というか項目の中に「セルフ営業スマイル」まである所から本格的に何もする気がないコレ読んで自分でやんなさい私ら今忙しいのだから話し掛けんナ・と言わんばかりである。

ギルドマネージャーの日頃の教育の賜物であつた。

また、山吹髪の外見不良少年、リンクスの周りにはハンターになった若しくはこれからなろうと志している数名が控えていて、彼が師匠から教えられた秘奥みたいなアレコレを聞き出そうと機を窺っていた。昔っから言葉少なだつた彼が砂漠の地方でどんな影響を受けたのか、去年むちゃくちゃ恐い顔になって帰つてきた時は皆流石にビビつたが、一週間で中身はあんまり変わつてないと分かつた事と、その時に彼の口から零れた師匠の名が村の『英雄』に並ぶレベルの超大物の名であつた事で、一年間ずっと待ちに待つていたこの日なのだ。

しかし当の『英雄』の息子で超大物のお弟子さんに猛然と愚痴つているのは彼らの誰でもない。

「イケナイなア文句ばつか言つてちゃ？ 君の仕事も？ 村には必要なんだから？ その先輩もそうやって一人前になつたんじゃなくなくないの？」

餌を前に満腹で食べる気が起きない時の鮫のような目で諭すリンクス。苦勞が多そうな眼鏡の少年は哀れなくらいの若白髪を振り乱して否定した。

「んな事言つけどさあ！ 毎日毎日いつ使うかも分からない知識を見上げる量突き付けられて明日までに覚えて来いとか言いつつその日はその日で気球操作を有り得ないくらい細かく確認されてさあ！ しかもあんな観測にや絶対使わないような速度の出し方とか言つて飛ばしやがつて目回つちゃつてもう暗記所じゃないってのにさあ！ 一割くらい覚えられなかったから罰とか言つて去年一年分の資料の整理と覚えきれなかったトコー〇〇回書き取りとか鬼ですか！？ それ終わるまで局から出るなとか鬼畜ですかっつーの！ あの

先輩絶対んな事下積み時代やってないし！　できる訳ないしコレ虐めですかー！！」

んなお前の愚痴なんかいつも俺らが聞いているだろさっさとそこをどけ、という周囲の視線は完全シャットアウトだ。古龍観測局で下積み中の少年はそんなモノ物ともしない。どうにか件の鬼先輩を説得して今は抜け出して来ているが、その分明日がインフェルノと化する事は目に見えている。

だが仕方がない。意外な事に幼い頃最も仲が良かった少年が一年振りに帰ってきたのだから。どうせ変わらぬ地獄の毎日。やっと解放される頃にはもう精根尽き果て、碌に話もできぬまままた見送るくらいなら。

一週間分を初日に懸ける覚悟で目一杯時間を共有しようというインテリ少年は親友の隣を譲らない。

そんな若者集団に混じって、一人の小っこい竜人族の爺さんが笑っていた。

「ふおっふおっふおっ。二人ともますます両親の面影が重なってきたおのお。あいやよう帰ってきたよう帰ってきた。年置きに又シラを見るからかのお、こヤツらより大きく成長しおるように見えるわい。ふおっふおっふおっ」

門の方からの知らせを受け、集会所の入口でスタンバって双子を出迎えたメタペタットの村長である。村長は表情豊かで活発な元気が昔っから変わらない夕髪ひねの少女アキラにも、ちよつと捻ひねた感じになつてしまった山吹髪の少年リンクスにも、我が孫に向けるような眼差しを向け喜びに相好を崩しっぱなしだ。

村長の発言に、双子を境に二つに分断していた次世代達の意識が一方向に向き直った。

「もーおじいちゃんってば毎年そればかり。別にあたし達だって皆と変わらないよ」

アキラが照れながら謙遜し周囲を見回す。双子を囲む同年代達は便乗するように声を上げた。

「そうそう！　ボクだつてちゃんと成長してますよ村長！　こないだついにモノブロスの狩猟に成功したの、もう忘れちゃったんですか？」

「私だつてまだまだアキちゃんトリックくんには負けてませんよ？　ホラホラ見落とさないで下さいこのガレオス装備上位素材なんですから」

「俺ももう今年に入つてキングガジキ三尾も釣り上げてんですぜ村長！　二人ばつか持ち上げねーでもっと身近な成長も褒めてくれよ！」

「村長、この前ウチが作つてあげたヒーヒーカレー、感涙してくれました」

「いや、あれは美味くて泣いてたんじゃないと思うぞ」

「そうそう、何でお前のカレー、よそいだ後も皿の上でぐつぐつ煮え滾つてんだよ。アレ熱いからとかじゃねーだろ。村長アレ食つてる時、ヒーヒーすら言わなかったぞ」

「村長は竜人だから、人間が食べたなら死ぬくらい辛くないと物足りないと思つて」

「お蔭で村長しばらく口利けなくなつたけど。見なさい、村長がああ時の惨劇を思い出して震えているわ」

「未だに忘れられない感動。そんなに気に入ってくれたなんてウチ嬉しい。また作つてあげる」

「や、やめてくれい！　作るならせめて又シが味見しても死なん程度の辛さにしてくれい！　もうワシ、辛いとか痛いとかそんなもん軽く超越して、食いながらに口から煮込まれるような経験はしとくない！！」

赤い皮膚を持つ竜人族の爺さんが顔を真っ青にすると、当事者以外から笑いが起こる。

「どれだけ辛い？　なんかもう？　料理っつーより調理器具？」
「うう、まさにそうなんじゃよ……」

リンクスだけが半目のまま冷静な感想を述べていた。その手は村

長の震える小さな肩をばんばん叩いている。

そんな口調や態度と行動が結構噛み合っていない外見不良の少年と向き合い、コック見習いの少女はほんのり頬を朱にして両手をぎゅっと固く胸の前で握りながら声を絞り出すように、

「よ、良かったら、リンクスくんにも、つ、作ってあげる」

「……人間が食べたなら？ 死ぬっつーんじゃないの？」

答えながら不良少年が自然な動作で身代わりにするように村長を前に出す。「おヌシ!？」と村長が捨てられたブーギーみたいな目でリンクスを見上げるが、彼も真剣に身の危険を感じているらしい。常時敵意を剥き出していそうな顔に一筋の汗が流れている。もの凄くしゅんとした乙女の様子の意味など全く注意の外だ。

その時、キラン、と余計な光を見せた瞳があった。少年の双子の姉の、深いマリンブルーの瞳が。

「まあまあリツくん。折角作ってくれと言ってくれてるのだよ。」

女の子の手料理を男の子が断っちゃーいけないねえ」

「姉は？ オレに死ねと？」

「バツ力だなーもう。死ぬ程辛いのは村長仕様でしょ。リツくんに御馳走してくれるって言うんだから、味は人間仕様に決まってんじゃない。ねえ？」

同い年であるハズのアキイラから向けられたお姉さん精神全開の視線に、コック見習い少女は一生懸命コクコク頷く。自分の出した助け船に少女が乗って来た事で機嫌がよくなったアキイラはさらなる老婆心を発揮し、

「それにホラ、あたしも食べたいな、ヒーヒーカレー。あ、そうだ！ じゃあ今晚皆にカレーを御馳走してよ。カレーって一度にたくさん作った方がおいしいんでしょ？」

と笑顔で後押しした。彼女としてはただリンクス一人の為に作るよりも皆に御馳走するついでという形の方がコック見習い少女も気が楽になるだろうと思っただし、昔からお料理が好きだった幼馴染の手料理を久し振りに食べたいという単純な希望も混じっている。

リンクスもまあそれならと納得の表情を浮かべた……が。

?

ヴァルキリー

ただ一人村長は嫌な笑みを浮かべていた。自分が味わった地獄を種族を超えて共有できる仲間ができるのがほぼ確定し、それが愉快で堪らない・といった笑みである。

そしてどこまでもマイペースな『英雄』の娘であった。

「ただいまハウンドおじちゃん！ 久しぶり！」

がつしりと少女を抱き止める村の教官は、目前に広がる阿鼻叫喚から大体の経緯を察し、さてどう回避するかいや立場的に回避不能イベントだなこれはと一瞬で悟りに達し、取り敢えずこれ以上考えない事にした。せめて一人の乙女が起こす奇跡を信じてやる他やれる事がない。

「おう、おかえりアキ、リク。二人共元氣そうで何よりだ。お、また背が伸びたなあ。がつはつは、アキなんかホントにスマレさんに似てきやがって。少しドキドキするぞ」

ちゃんくん付けで無い二人のこの呼び名はハウンドが最初に使い始めたモノだ。あまり使ってる者はいないが、二人の父親である『英雄』なんかも生前はこの呼び名で呼んでいた。

容姿を褒められくすぐったそうにアキラがはにかむ横で、リンクスはハウンドと一緒に現れたギルドマネージャーの背中にいる幼子の頭を撫でる。

「ただいま？ こっちの子も？ すくすく大きくなってんじやない？ ハウンドのおっちゃんのムサさが？ 遺伝しなくて良かったんじゃない？」

「がつはつはつは。お前も小生意気に拍車が掛かってやがるな。ブチ抜くぞ小僧」

「ムリじやないかなア？ ガンナーとしての腕は？」すでにオレの方がハウンドのおっちゃんより上だし？ 射撃が上手うわてって事は避けるのも上手って事だから？ おっちゃんじゃオレは捉えられないんじゃない？」

「ふ、言うな。うゝん、こういう遣り取り、クジャクともあったな」

しみじみとハウンドは感慨に耽る。

と、リンクスを見て「あたしもあたしも！」とギルドマネージャーのおぶる幼子の頭を撫でていたアキラが、ふと思いついたようにハウンドを見上げた。

「そつえばハウンドおじちゃん今までどこにいたの？ おじちゃ

んはここにいると思ってたのに、来るの遅かったね」

「あゝ、ちよつと道場の方で訓練をな。あそこ村の外れだし、集中してたから知らせが聞こえなかったんだ」

「あ、そつか。ハウンドおじちゃん教官だったんだっけ」

「ああ。だから遅れちまった。悪いな。本当は出迎えてやろうと思つてたんだがな」

ハウンドは息子を双子に見せるような姿勢になっている涼しい顔のギルドマネージャーにチラリと目を向け、無念そうな表情を浮かべて首の後ろを掻く。訓練した格好のままというのもアレなので一度自宅に寄つて、お気に入り狩人Ｔシャツに着替え、ナナホシ天砲を仕舞つてから来たのでさらに遅くなったのだが、そもその遅刻の原因がこの妻が黙っていたせいだったとは言わない。彼女は彼女で珍しく自分の為を思つての事だったのだし、それ以前に門の方からの知らせが聞こえてなかったのはハウンドだ。それを見越した妻は態々呼びに来てくれた。

（……いや、そついや村長に遣わされたと言っていた気がするが……うん。まあいいか。都合良く解釈しておこう）

どうせどこまでが本心なのか分からない女だ。

「むゝ、じゃあ訓練場に行つてればおじちゃんの訓練の様子が見れたんだ。惜しい事したかも」

「ふん、別に見てて面白いもんじゃねえよ。リクから見りやお遊戯みたいなモンだろうしな」

八年間も射撃に集中して訓練しても、一流とは程遠い。ハウンドが自嘲気味に、たったの二年で超一流の師匠の技を盗みつつあるリンクスに目を遣つた。

するとリンクスはおっちゃんのフォローではなく、単なる事実としてこう告げた。

「そんな事ないんじゃない？ 訓練つてのは？ ひたすら基本の繰り返しだつて師匠も言つてたし？ 寧ろ見て楽しい訓練に意味は無いよねエ？」

「ほう、なるほど。いい事言うなあ。ソレ、お師匠さんが言つてたのか？ これからの指導でその言葉使わせて貰つてもいいか？」

「どうせ受け売りだし？ ご自由にどうぞ？」

ふむふむ、とハウンドは頭のメモ帳にしつかりと刻み付ける。教官に就任して以降、彼は後進を育てる力を持った名言を探すのに余念がない。心に働き掛ける言葉は教育に何よりも強力な教材となる。心に深く残る言葉をどれだけ伝えられるか、それが生徒の成長を決める・と、ハウンドは考えていた。

「ねえねえ。ところでハウンドおじちゃんも来たし、丁度いいから早く行こうよ」

唐突にアキラがそんな事を切り出した。ハウンドが来る前から話の流れはあつたのか、聞いたリンクスが面倒そうに渋面を作る。

「どうせ明日爺ちゃんが着いてから行くんだし？ 今日行く必要はなくなかない？」

「いいじゃん今日も明日も行つたつて。あたしは早く行きたいの」
ああ、とハウンドは内容に気付く。思い当たるのは村の丘を登つた先。その一番奥を思い浮かべながら、ハウンドは少女の方に味方する事にした。

「そうだな。帰つてきて一日あいつらをほつとくのも無いだろ。行つてやるといい」

「ねっ！ ほらリツくん、これで2対1！ だから行こ？」

最後は懇願するような少女の瞳。しかし少年はいまいち乗り気になつてくれない。

「行つて何すんの？ 近況はどうせ明日爺ちゃんと行く時に言うし？ 何もやらないのにあの坂登るの無駄くなくくない？」

「も、何でそんな事言うの？ じゃあ、明日の予行演習つて事でっ。ね？」

「ただ近況報告するのに練習なんか要るの？ 行きたいなら一人で行けばいいんじゃない？」

「うう、そんなイジワル言わないでよ。あたしはリツくんと一緒

に元気な所を早く見せてあげたいのー！」

取り縋り姉が説得しようとしても弟は素直になつてくれない。捻くれてそつばを向き全然取り合つてくれない弟に姉は、

「リツくん……」

泣きそうだ。

不良少年から深い溜息が漏れた。

「しょうがない姉だ？」

折れた。

ぶつぶつ言いながら、行くならさつさと行こうと言わんばかりに八キ八キ丘の方へ歩き出す弟に、姉はパツと嬉しそうな表情になつて追つていく。これも仲がいいの一つの姿だろうじゃれ合いをしながら並ぶ双子の姿に、ハウンドはもう三人と一匹の姿を重ねて眺めていた。それは幻影だと分かっているけれど、とても笑顔に溢れた、幸せそうな家族だ。

ふいに涙が出そうになった。目頭に熱を感じながら、ハウンドはその家族を見送ろうとして、

感情表現が豊かな娘が振り返った。

「ハウンドさんも早くー！」

くっ、とハウンドは零れそうになった何かを堪える。隣を見ると、妻は一度だけ頷いてくれた。

（そうか。俺も、あの中にいていいんだな）

双子はハウンドが来るのを疑わない顔で立ち止まっている。義足で、歩くのが遅いおじちゃんが追いついてくるのを待っている。

ハウンドの目には幻の家族が見えている。変色する虹色の髪の毛がいて、その隣には純白の美しい女性がいて、二人の間に双子がいる。さらにその二人の肩に手を置くように立っている、水色の髪の毛の子が笑っている。三人の子供達の足元には一匹で多彩な技術を修めたアイルーが暇そうに顔周りの毛繕いをしていて……、

虹髪の男を純白の女性と挟む形で、逆側に金髪の少女がいた。歌が大好きで、死ぬまで隣にいる幼馴染みの事が大好きだった少女が、

ハウンドが大切に想っていた少女が。

さらに家族を囲むように、嘗て虹髪 of 男の周囲を取り巻く多くの人々の姿があった。双子には見えていないだろう。二人は彼らのほとんとは会った事すらない。だが二人の中には両親が確かに息衝いていて、あいつらの世界が二人の中で生きている。中には世界のどこかで今も生きている人の姿も見えるが、これはそういうモノじゃないんだらうとハウンドは思った。

「どうしたのー？ 早く行こうよーハウンドおじちゃん」

「ハウンドのおっちゃんか？ 姉を乗せたんじゃないん何やってんの？」

双子が催促してくれる。一度ごしごしと目元を揉んで、ハウンドは顔を上げた。

「ふん、そう焦るな。ゆっくり行ってもあいつらはどこにも行かねえよ。というか俺は片足の身体障害者だぞ。もつと労われ、お前ら」

義足を持ち上げる。軽くびっこを引きながら坂を登り、ハウンドも幻影の輪の中に加わっていった。

s c e n e 4 - 3 / 4 ヒーヒーカレー (後書き)

言っておきますが、一休にとっても不意打ちでした。

不意打ちで、泣きましたとも。ええ。

書き上がった後にサブタイを 虹髪 にしようかとも思いましたが、らしいので ヒーヒーカレー でいきました。

彼らがヒーヒー言うシーンは、書きません。奇跡を信じるまでです(笑)

s c e n e 4 - 4 / 4 封龍劍【真滅一門】 (前書き)

もういい加減マンネりなんで、予想以上に文字数どうか言いません。

思った以上に、過去にも未来にも伏線バリバリになりました。

さて、これで逃げ場が無くなったかナン？

メタペタットの裏手の丘の上、村全体とさらに奥に広がるジオ・クルーク海を一望できるそこに、メタペタットの墓地はある。

ここはいつでも静かで穏やかだ。“温厚な心”という意味を持つアルコリス地方の名がこの場所程相応しい所はないだろう。地方の大部分を占めるシルクオーレの森やシルトン丘陵も他所に比べれば大概温厚な気候と言えるが、あの辺りにもそれなりにモンスターが巣くう。

この場所は、緩やかな風が地草を撫でていく音以外ランゴスタの羽音すらしない。詩人なんかを訪れれば、現実とは違う世界を垣間見たような、どこか浮世離れた一句を詠んでくれそうだ。

墓地には大きさも形もそれぞれな墓石が規則正しく並んでいる。背が高かったり、タイルみたいに平べったかったり、職人技としか思えないくらい珍妙な形だったり、中には下に眠る人の生前の姿を象った彫像そのものだったりする墓石の列で形成された道を、この日村に帰って来た一組の双子は進む。

ハウンドとは墓地の入口で一旦別れた。ハウンドはここに来る時は必ず、一番に手を合わせると決めている人の下へ行くと言っていた。双子が生まれる前にその女性は亡くなってしまったのだけれど、生前の両親が語って聞かせてくれた話の中にもよく出てきた女性だ。双子も帰り際にその女性に手を合わせるのが毎年の恒例になっていた。

双子の父の墓は墓地の一番奥に建てられた。この丘の上の墓地で一番高い所で、一番大きな墓石だ。丘に出ればどこからでも見えるし、実は村の港からだって見える。双子はただそれを目印に父の眠る土を目指す。

なんとなく言葉を発する事を忌避させる空気の中、双子は父の墓の根元が見える所まで無言で歩を刻んでいた。

「え？」

アクイラが思わずと声を漏らす。リンクスも同時に不審げに目付きを変える。

石材の違うアーチを七段に重ねた、虹をモチーフにした父の巨大な墓。その根元に先客がいた。

身長からしてまだ十にも満たないだろう。目に痛い程に日の光を全て反射する白いドレスに身を包む少女——少女というより幼女だ——は、背を向け、ドレスと同じくらいに白い、日差しを防ぐというより頭を隠す為のような形状の大きなパラソルを差し肩に掛け、手癖なのか指先でくるくる回している。ドレスもパラソルも意匠を凝らしたフリルが飾られ、それが模様の代わりのものであった。穏やかな風に緩やかに靡くようにゆったりと回転しているのと相俟ってか、こちらに向けられたパラソルを見ていると、心地良い夢の中に誘い込まれていくような催眠を掛けられている気分になる。パラソルに隠れて後頭部が見えないが、そこから食み出した腰まである長い髪もやはり眩しいくらいの白。全身で光の全てを反射している為か、幼女は淡く発光しているようにすら見える。

アクイラから漏れた声に幼女が振り返った。そうしながらも回り続けるパラソルに隠れて双子からは目元が見えないが、幼女の方は双子の存在を認知したらしい。パラソルの影から覗く細い首も小さな顎も、唇さえも白い幼女が口を開く。

「あなた　たち　が、この　おはか　の　ひと　の　こども？」

たどたどしい舌足らずな声。なのに、不思議ととても聞き取り易い声だった。

「あ、うん。そうだよ」

反射的にアクイラが答える。そして何事かを続けようとして、

「あ、えーと……」

自分が何を言おうとしたのか言葉にしようとした瞬間に忘れてしまった。口籠るアクイラの横でリンクスは警戒の視線を幼女に向けたまま黙っている。

クスリと少女が笑った気がした。そんな気がした事すら幻だったような気がする笑みだった。

「おとうさんの おはか まいり に きたの？」

「うん。それと、ママトリチャード」

「ふうん。そつか。こつち が あなた たち の おかあさん で、こつち が あなた たち の ねこさん なのね。それで、この いちばん おおきな のが あなた たち の おとうさん」

双子の母の墓と使用猫の墓は父の墓に寄り添うような位置にある。少女が一々そちらに体を向けながら確認すると、アクイラは素直にうんと答える。何故こんなにも素直に答えてしまっているのか、そこに疑問すら抱かなかった。

「おはか まいり には よく くるの？」

「ううん。年に一回。あたし達もう村に住んでないし、明日があたし達の誕生日で、パパ達が死んじやったのもこの週だから。毎年今日から一週間、この村でパパ達と過ごす事にしてるんだ」

「そう。わざわざ とおく から きて いるんだ」

「うん」

「――」

少女が何かを呟いた。双子にはよく聞き取れなかったのだが、この時初めて、少女の雰囲気感情らしいモノが含まれたようには感じた。なんとなく、申し訳なさそうにしているというか、諦念に暮れているというか……それすら夢から醒めるようにすぐに無くなった。

「あなた たち は このひと たち が だいすき だったのね」

「うん！ 当たり前だよ。今でもあたしもリツくんもパパ達が大好きだよ」

アクイラが元気よく答えると、少女は小さく、だが今度こそ間違いないく、クスリと微笑んだ。パラソルに隠された視線がリンクスを向いたが、リンクスは顎を引くだけしかできなかった。

「そう。あなた たちが ここ に きて くれて いる と
しったら、あなた たち の おとうさん は きつと とても
よろこぶ ね」

「そうかな？ そうだといいんだけど」

「もちろん」

どこの誰とも知れぬ少女の断言にも、アクイラは嬉しそうに目を細める。ずっと口を開かないリンクスは敵意とはいかないまでも友好的とは言えない視線を送り続けているのだが、逆に言えば彼にはそれしかできないでいた。そしてその事にどうしても疑問が浮かばない。

双子に見詰められる中少女はもう一度大きな墓へ向かい、数秒手を合わせるとドレスの裾をするすると地面に滑らせるような足取りで双子に近付いてきて、アクイラの脇を擦り抜けるようにして通り過ぎた。

その擦れ違い際、

「あなた は とても きれい な “ゆめ” を もって いる の
ね」

「え？」

お腹の位置にある、始終回りっぱなしのパラソルの先っぽをアクイラは見降ろした。

「あなた の ほう は つよくて やさしい “ゆめ” 」

「……」

リンクスはやはり何も答えられない。

「ごめんなさい。おじやま しちゃった みたいだね。さようなら」
最後にそう告げたり、少女は振り返りもせず短い歩幅で丘を下っていった。最後まで顔をパラソルに隠したままだった少女を送り、小さな体とくるくる回るパラソルが豆粒程になった時、ようやく双子は根本的な疑問を口にできた。

「あの子、どこの子だったんだろ？ パパ達の知り合い……の子
？ 村の子じゃないよね」

「さア？ 親父の墓は？ 無駄に目立つから？ 何かの用で親に連れられて村に来て？ あの墓見て迷い込んだんじゃない？」

「あゝ、そっか。それならここは安全だし、村まで道に迷う心配もないから平気だね」

自然とそういう結論に至った。するともう双子の頭から白いドレスの少女の姿は完全に消え去る。たった今の遣り取りさえも、思い返そうと思う所から考え付かなかった。

気を取り直して双子が父の墓の前に並ぶ。虹の形をしている父の墓は、一番内側のアーチでも半径二メートルくらいある。アーチの中心には台座があり、そこに、十字の柄尻に紅玉が煌く、平均的な大人の身の丈をも越える毒々しい色合いの両刃の大剣が突き刺さっていた。台座の側面に、ここに眠る者の名と、生前に冠せられた称号が刻まれている。

虹髪の英雄　クジャク・P・スターモント。

ドンドルマの古龍迎撃戦に始まり、メタペタットでの幾多の巨龍撃退、若しくは討伐。また銀火竜、霸竜の討伐で名を轟かせ、十二年前の古龍大進撃事件で活躍した者として一番二番に名を挙げられる英雄。

深い密林のさらに奥深く、辺境最奥とも呼ぶべき地、フォンロンに聳える古の時代の巨大建造物、古塔で伝説の祖龍を討ち取り、同時に命を落とした父。

台座に突き立っている両刃の大剣は 封龍剣【真滅一門】 といふ。父が最期の戦いに臨んだ時に握っていた剣を、その命と引き換えに討ち取った祖龍の素材で強化した、現存する大剣の中でも最高峰級の一振り。

あの、最期の戦いに出立した朝の、大好きだった父の陽光に包まれた大きな背中を双子は鮮明に覚えている。

母の墓もある。父の墓の台座とアーチの間に寄り添うようにして建てられたのが母の墓だ。シンプルな台形で、上面に母の実家の家紋である九連流星が描かれ、父と同様側面にその名と生前に冠せら

れた称号が刻まれている。

シューティングスター

狙撃天使 スミレ・P・スターモント。

母もまた、晩年こそ子育てに専念する為前線には立たなくなっていたが、父と同列に数えられる程の凄腕ハンターだった。最盛期には、街で彼女の名を知らぬ者は似非か素人か田舎者・とまで謂われていたらしい。大好きだった母は、いつでも優しくて綺麗な笑顔で、温かく抱き締めてくれた。

そして、台座を挟んで母と反対側、こちらは父のアーチの足元に脇に控えているような感じで小さな、墓石というよりその辺で拾ってきた小さな岩に見える墓には、肉球のマークが彫られていた。肉球マークを背景に、その下で眠るアイルーの名が刻まれている。

リチャード。

父を慕って十年以上父に仕えていたアイルーだ。双子が知っている彼の姿は家の家事一切を小さな体でテキパキこなす姿で、たくさんたくさん一緒に遊んでくれた大好きな姿だ。

三人は丁度八年前に、纏めて双子の前からいなくなってしまった。忘れもしない。八年前。

あそこで双子は、一生分を泣き尽くした。大好きだった父が、大好きだった母が、大好きだった猫が、一遍に奪われたあの時に。そして誓った。降り止まぬ雨の中、これからは一生、大好きだった人達の分まで笑って生きると、涙の誓いを二人で立てた。

八年経って、双子はまたこの場所へ戻って来られた。アクイラとリンクスは手を繋いで黙祷を捧げる。

ここまで大きくなった自分達の姿を、三人にしっかりと確かめて貰うように。

今の自分達がある幸せを、三人にいっぱい感謝するように。しばらくして二人はゆっくりと目を開ける。計ってもいないのに同時だった。目を合わせ、夕髪の姉が照れ臭そうに微笑むと、山吹髪の弟は鼻を鳴らして手を振り解いた。そのまま村と海を見晴らす方へ向いてしまう。少女は少しだけ寂しそうな表情を見せたが、空

いた手をすつと持ち上げて、 ココットショート の髪を耳に掛けるように梳き上げる頃には笑顔になっていた。そうしながら父と母の墓前に進み出て、まるで家でお話をするかのような姿勢で座り込んだ。

「パパ、ママ、ただいま。リチャードは、ちょっと遠いけど許してね」

横の方へ先に謝るアキラの目は空中に向けられている。嘗て少女が両親とお話した時、そこに両親の笑顔があった角度だ。

「えっと、一年振りです。見ての通り、あたしもリツくんも元気です。本当は明日ジイジと来る予定だったんだけど、早くパパ達に会いたかったから、来ちゃいました。あ。明日もまたジイジと来るけど、今日先に来ちゃった事は内緒ね。知ったらきつとジイジ落ち込んじゃうから。」

えと、じゃあ、この一年の近況報告します。

相変わらずハンターやってます。まだまだ一流への道は遠いけど、パパやママみたいな凄いハンターになる為に毎日頑張ってます。去年までは、シドリフは新興村だからあんまりいい仕事回ってこなかったんだけど、皆と一年、村の発展の為に頑張ったから、最近少し遠くからも仕事回って来るようになりました。と言っても、やっぱりシルクオーレの森での仕事が多いかな。近場だとそれだけ拠点への影響が大きいんだって。折角新しい拠点作りの仲間に入れて貰えたんだから、ハンターとして直接村の役に立つ仕事をしたいもん。うーん、でも本当はちょっと物足りなくなってきたりしてるかも。あ、ウソウソ、今の無し！ あたしが頑張って、シドリフをメタペタットに負けないくらい立派な拠点にしてやるんだから。だからパパ達も応援しててね？

あとは、そうだなあ。あ、つい昨日の事なんだけどね、リツくんが、シドリフに来てくれるって言うてくれたんだ。なんでも、年内にはお師匠さん……えーと、パパは古龍大進撃事件で一回一緒に戦った事のある人なんだっけ？ 風詠み のツァンさん。あ、そっ

か。パパはその“射程距離世界最長”の狙撃を実際に見てるんだ。どんなだったんだろう？ 凄いだろ？ あたしじゃ想像もできないや。でも、そんな凄い人からリッくんもう卒業できそうなんだよ？ もしかしたら来年にはリッくんが“射程距離世界最長”って呼ばれてるのかな？ あ、これ以上言うとリッくんの言う事がなくなっちゃうからもう止めます。ていうか、あたしリッくんに置いてかれちゃってるかな？ お姉ちゃんとしてもっと頑張んなきゃね。うん。

あとはそうだな、一応、パパがひっくり返るような出来事とか、他にも色々あるんだけど、今日は明日の予行演習って事にしてるから、今日はここまでにします。続きはまた明日。

じゃ、次リッくんの番ね。リッくん

アクイラが場所を空けて弟を呼ぶ。姉が両親の墓前に語り掛けている間、自分の話題になっても見向きもしなかったリンクスは渋々と開けられた所に胡坐を組み、山吹色の クロオビシヨート をガシガシ掻きながら深い溜息と共に口を開こうとして、

「あ、その前にリッくん。一つお姉ちゃん命令」

「あア？」

「その言葉使い、禁止」

「……」

「砂漠の方で何があったかお姉ちゃんには分からないけど、パパとママの前ではそんな威嚇するような言葉使いは許しません。あとホラ笑顔笑顔。あの時笑って生きようって決めたでしょ？ パパ達には笑顔で報告しなきゃダメなの」

命令二つになってんじゃねーか。と心の中でごちつつ、もう一度深く溜息し、しばらく笑顔を浮かべていなかった人が笑顔を作ろうとして失敗したみたいな顔でリンクスは口を開き、

「姉が告られたって」

「ちよつと！？」

挨拶もスッ飛ばしていきなり姉のとおきをおきを暴露した。シヨッ

クを受けたアクイラが「明日の本番まで内緒にしたかったのにー！
リックんのバカバカー！」と背中をポカポカ殴ってくるがリンク
スは無視して続ける。

「だが親父。安心していい。咎人の命もあと一週間余りだ。この二
代目 風詠み が親父に代わって命知らずの眉間を一射でブチ抜い
てやる」

「だからダメだってばー！ その人あたしの仲間なのー！」

「見てくれ親父。嘆かわしい。姉はすでに魔の手に堕ち掛けている。
だからオレが目を醒まさせてみせる」

「断ったもん！ ちゃんとお付き合いは断った上で飽く迄ハンター
同士の仲間の関係だもん！」

「ああ。ダメだなこれはもう。具体的な人的被害は避けられそうに
ない」

「やーめーてー！」

なんとなく双子の弟がハンターとしてどういうレベルに達してい
るのかを感じ取っているアクイラが必死に仲間の危機を回避しよう
と訴える。だが必死な余り、さらりと弟が自分の称号を告げたとい
う肝心な所に気付いていない。彼女は弟がその気になればシドリフ
のハンターが全員束になっても敵わないんじゃないかなーと漠然と
思っているが、流石にそこまでとは思っていないかった。

一世代前、モンスターハンター 狩人の中の狩人 や 虹髪 of 英雄 と同列に並びそ
の名を大陸中に知れ渡らせた 風詠み の称号を、数え年で若干十
四才の弟がすでに受け継いでいるなどとは、及びもつかない事だっ
た。

それはリンクスが、先代 風詠み の嘗て有りし最盛期にまでは
まだまだ達していないからでもあるし、それ故にまだ彼が身を置く
拠点以外ではその名を認知されていないからでもあるだろう。メタ
ペタットに帰って来るに当たり持ち込んだ装備品を、姉の少し上く
らいのレベルに合わせているというのもある。

だがリンクスも双子の姉に秘められた才能を知っていた。或いは

それに気付けたのは師匠の指導の成果なのかもしれない。出る所に
出れば今リンクスがいる程度の領域くらい簡単に追い越していける
潜在能力を秘めているクセに、自分の成長よりも他者と笑い合つて
生きる事を望んだ姉は、ハンターになろうと決めた丁度二年前に拠
点興しの為の村付きハンターを募集していたシドリフに志願し、小
村にとっては重要なんだろうがハンターにとつてはチマチマした仕
事ばかりして、小村ならではの深い絆を村人達と結んで、それで幸
せそうにしている。

もちろん二年前に姉はリンクスも一緒にシドリフでハンターをし
ないかと誘つてくれた。

だが新興村というのは性質上、真に実力のあるハンターはまず集
まらない。拠点として不完全な為、それまで住んでいた辺境最大の
街ジオ・ワンドレオなんかでは考えられないような危険も身近にた
くさん出てくる。

そんな拠点に姉が行くのなら、せめて自分がどんな脅威からも姉
を守る力を身に付けなくてはならないと、前々から目を付けてい
た隠居中の 風詠み を実家の力で探し出し、押し掛けて弟子入り
したのだ。急がば回れの精神で。この二年大事もなくシドリフが順
調に発展してくれて本当に良かったと思う。

「姉。うるさい。今はオレのターンだ」

「うゝゝ！ もう自分の話にしてよ！ あたしの事は明日あたしが
言うの！」

「分かった。もう姉の話はしない」

「本当だよ？ もう」

まだ疑いの視線を外さないアクイラを気にしないで、リンクスは
さつさと終わらそうと近況を簡単に両親に報告する。姉が言うには、
全部じゃなくていいらしい。

「そろそろ温暖期になりそうだ。ハルバ・サンドは砂漠のど真ん中
だから、最近はその備えて忙しい。まあ、毎年の事だ。オレはまだ
一度しか経験してないけど。アレを見ると、ハルバ・サンドが複合

拠点になったのは、多方面の人間を集めないとあの場所のオアシスを守り切れなかったんだろうな。砂漠のど真ん中で人が集まり易かったのもあるんだろうけど。要塞染みたオアシスになったのも同じ理由だろう。って思った。

あゝ。師匠から卒業できそうだな。あの人は凄い。親父はあんなレベルにいたんだな。オレにはガンナーの才能があるってハウンドのおっちゃんに昔言われたけど、そんなモンじゃない。ああいうのが本物の天才っつーんだな。才能だけじゃダメだ。師匠は工夫も天才だった。ガンナーであのレベルにいくにはそれが必要なんだな。けど、あの技はもう盗めた。あとは鍛練を積んで飛距離を伸ばす。けど弟子は教えられた通りにやればいい。できんのは当たり前だ。それだけじゃダメだ。って師匠が言う。その通りだ。オレだけの技に昇華できてやっとな卒業だ。あと少しだ。年内までに完成させる。そしてたらオレはシドリフに行く。

あゝ、そういや、レインさんがヨロシク言っというたと。あそこのがキは三人共鬱陶しいくらい元氣だ。わらわら街中走り回りやがってたまにオレが追い掛けるハメになる。あゝ、レインさんはウェーブとインを優しい子にしたいんだと。……オレみたいにとか抜かしやがったがそれ以外はいいんじゃないか。だから見守ってってくれだ。あとサイトさんは今頃王都らしい。サイトさんがいないとアミナがオレに寄ってくるからさっさと帰って来て欲しい。今王都だとオレが街に帰る方が早いな。チクショーめ。アミナが泣かないように寧ろそっちを重点的に見守ってやってくれ。

チツ、姉が二つだったからオレも二つで終わらせようと思ったのに。喋り過ぎた。終わり」

リンクスは立ち上がりこれで満足かという目で姉を探す。見付け、もつと不快げな表情になった。

姉の隣に、いつの間にか登って来ていたハウンドが嫌味な笑みでこちらを眺めていた。

「何？」

「ふ、別に」

余裕の対応で流されますす不快そうな顔になるリンクス。ハウンドは構わず鷹揚と『英雄』の墓に突き立つ大剣を示し、

「抜いてみないのか？」

「どうせ抜けないし？ やるだけ無駄じゃなくくない？」

リンクスの口調が戻った事でむっ、とアクイラが口先を尖らせた。しかしちゃんと報告中は言う事を聞いてくれたので何も言わず、

「あたしも明日にする。ジイジに内緒でそこまでやっちゃったら可哀想だもん。ハウンドさんは？」

「ふん、俺が抜いちまってもしゃーねーだろ」

「それもそだね」

言い合い、アクイラがくすくす笑う。ハウンドも含み笑い、リンクスだけは憮然としていた。

そうして三人で並び、両手を合わせ、眠る三人分の黙禱を捧げた。父の墓に刺さる大剣は最高峰級の一品だ。それがこんな所に無造作に晒されているのに、この八年間盗まれた事がない。

抜けないのだ。

英雄の墓なら英雄っぽくというノリで墓に大剣を突き刺した後、どうぞ盗んで下さい状態になってるだけな事実に気付いた村人達は回収して別の場所に祭ろうとしたのだが、村一番の怪力ハンターが抜こうとしても抜けなかったのだ。突き刺したハウンド自身も抜けず、以降誰にも抜けないまま今もこうして『英雄』と共にある。

実は英雄が亡くなった直後おかしな大雨が大陸全体に降り続き、それが墓に剣を突き立てた瞬間にぴたりと収まった。なんて逸話もあったりして、メタペタットの村人はその雨を“英雄の涙”だなどと呼んで語り継ぐとしてたりするのだが、そういえばココットの英雄伝説にも抜けない剣の話があったし、もしかしたら英雄と呼ばれるような者達にはこういう話が付き物なんだろうなあと、そんなノリで、抜けた人はそのまま持ち去っていい事になっていた。

またしても同時に目を開けた双子はハウンドを待ち、程無くして

ハウンドも目を開けた。そこでハウンドはアクイラが手に一振りの小剣を持って父らに直面させるような格好で差し出しているのに気付き、ほう、と感心の声を零した。

「ついにそこまで研磨できたのか。頑張ったな」

「うん。八年も掛かつちやっただけだね」

アクイラは誇らしく掲げている小剣を愛おしの眼差しで見詰める。強烈な熱を浴びて一部が溶けてしまったかのような、歪こわな形状の小剣。それは、古い地層から発掘された金属の塊の中に眠っていた、現在の加工技術では作成不可能の一振りだ。大地の結晶を用いた結晶研磨加工技術の進歩によって実在が判明した、父の大剣とはライバル関係にある一門が遺した龍を封じる為の剣。

封龍剣【絶一門】。

だがその希少価値以上に、双子にとっては大切に、特別な意味を持つ剣だ。

「家族皆が集まるのに、おにだけ仲間外れにはできないから。この剣はおにいの代わり」

アクイラは思い出す。見るとリンクスも右斜め上に目を向けていた。

八年前。双子は父と母と猫の他に、もう一人、大切な人を奪われた。

村の皆に愛されて、友達と遊ぶ時はいつも中心にいて、心の底から大好きだった兄。

兄は八年前のあの日、妹弟を守ろうとして一度だけ、転がっていた錆びた剣を手を持った。それは結果的に振るわれる事はなかったけれど、その剣は兄が自分達を守ろうとして立ち向かってくれた姿の象徴だ。

この剣はそれを研磨した物なのだ。本当は同行してくれていたキヤラバンの商品だったのだけれど、父の友人でもあるキヤラバンの代表者に頼んで譲って貰った。ちなみにその代表者がリンクスの近況報告に出てきたサイトという人物である。

兄の墓は無い。混乱の中で兄は蒼火竜に捕まり、北のヒンメルン山脈か、もしかしたらそれより向こうの地に連れ去られてしまった。体面上では行方不明とされているが、生存は絶望的だった。

だが、死んだと決まった訳じゃない。兄の死はまだ確認されていない。死んだとすればその確認すら望み薄だ。生きているならもうとつくに帰って来てくれているだろう。

それでも確定した訳じゃない。

墓を建ててしまったら諦める事になる。一億分の一でも一兆分の一でもまだ兄に生存の可能性がある限り、兄が守ろうとしてくれた自分達が諦める訳にはいかない。

兄への希望は、あの時兄が握ってくれた剣に込めて、今はアクイラと共にある。

「ねえ。やっぱり今年はリツくんがこの剣持って帰りなよ。半年したらシドリフに来てくれるって言うなら、その間だけでもさ」

「いいつつてるし？ オレがその剣持っても？ どうせボウガンしか使わないし？ 姉が持ってた方がいいに決まってんし？」

「そうだけど、でも……」

アクイラが後ろめたそうな表情でリンクスを見詰める。拠点が分かれた二年前から、小剣はアクイラが管理していた。本当はアクイラは年置きにリンクスと交代したがつたのだが、小剣を得物とする姉が持っていた方が有意義とゴリ押しし、リンクスは断固拒否している。

この小剣は二人にとってただの小剣ではない。だからこそその姉の申し出なのだが、

（オレが姉を守るくらいに強くなるまで？ その剣持って兄貴に守って貰え？ とか言えるワケないし？）

リンクスは頑なに拒否するのだ。姉を迎えに行くその日まで。

「ま、確かに近接武器は決定的にへっぽこな奴が持つてるよりは、使い慣れしてる方が持ってた方がいざという時力になるわな」

「おじちゃん……」

ハウンドはアキラの肩に手を乗せて諫める。アキラがハウンドを見上げて気弱しく見返した。リンクスがへっぴょこ呼ばわりされてハウンドを睨むが、ハウンドは飄々と受け流した。

「リクが持つてろって言うんだ。ならアキはリクの分までその剣を大切にしていればいい」

ハウンドはそう言っただけで夕色の髪に手を乗せ、下手くそに撫でる。

アキラは首を窄めてそれを受け入れ、うん、と小さく納得した。

付き合っけられるかと、リンクスは踵を返す。もう用は済んだはずだ。墓の手入れは明日にするつもりだろうし、姉も今日の所は満足だろう。リンクスはスキンシップを交わす二人を無視して丘を下ろうとする。

「……」

その足が止まった。去ろうとするリンクスに気付いた二人も彼に続こうとして彼の足が止まっているのに気づき、彼が目を向けている方に視線を移す。

「わあ、綺麗……」

「ほう、これだけ大きいのは珍しい」

思わず感嘆が出た。

この場所は村と海を一望できるこの丘の中でも最も見晴らしい場所だ。この辺りはメタペ湿密林の近くの為か、湿気が多い。上空で風が出ているとメタペの滝の方から水滴が飛んで来たりもする。

すると、

「ホント、大きな虹。パパが喜んでくれてるのかな」

「ふん、かもな」

ジオ・クルール海を跨ぐように、大きな虹が大空に架かっていた。爽やかな雨上がりのような、七色のアーチが雲一つない茜色の空に浮いている。もうこんな時間になっていたらしい。

「虹、北の方まで続いているね。もしかしたらおにいも、この虹、見えてるかな」

「かもな？」

アクイラの眩きに、ハウンドが答える前にリンクスが即答した。

お、とハウンドがリンクスに目を遣ると、リンクスは真っ直ぐに虹の空を眺めている。アクイラも小剣を抱くようにして胸に当て、空を見上げていた。その姿は祈っているようでもあった。

分かっている。虹はこの地にいるから見えているのであって、虹の橋が伸びている足元の方からは見えない。

でも、その上の大きな大きな晴天の空ならどこまでも続いているだろう。

もし兄が生きていれば、もしかしたら、どこかでこの同じ空を見上げているのかもしれない。

今、双子が空を見上げているのと同じように。

この空は大陸のどこまでも繋がっているのだから。

雨が晴れると虹が出る。アラ、じゃどっかで虹架けなきゃダメくないかしら？

と気付いたのは確かストラドターン書いてた時だったと思います。

雨後晴れの仮題は「この同じ空の下」でした。キーワードにあるのはその為です。

ともあれ「虹髪」完結時からずっと書きたかった、兄の剣の件が描けてホッとしています。

あ、そうそう。先日総ユニーク10000いきました。数少ない読者の皆様ありがとうございます。

まー世の中、更新すれば取り合えず三千アクセスなんて作品もあります、こっちの読者はその分密度がウニャウニャなんです。そっちのがよくないですか？

そんな感じでこれからも一休の作品を楽しんで下されば幸いです。

scene 5 - 1 / 1 あめのはれ (前書き)

真っ先に書き上げたこのシーンがようやく御披露目です。嘗てない執筆速度でしたが、それも早くこの話を投稿したかったが為だったと思います。

今年はずっとこの勢いで書けたら……いいなあ……σ(。。

ちなみに今回、他作者様のキャラをちょこつと使わせて貰いました。

しかも一休にしては珍しく登場許可を頂いてからのコラボです。字面的にいい子なのかわるい子なのか微妙な気がしますが一休は多分悪い子です(笑)

scene 5 - 1 / 1 あめ のち はれ

大陸北方の大河ヒヤック河

ヒヤック河は大陸北端に連なるフラヒヤ山脈からゴルドラ地方の溪谷の脇を横切り大陸とアクラ地方との海峡へと流れ出る大河だ。陸路では到達が困難なフラヒヤ山脈中腹の村々と北ゴルドラの集落を緩やかに結んでいる為、運河として大陸北方地域の交易の主要ルートの一つに利用されている。

河の水は冷たい。

北方故温暖期でも気温があまり上がらないというのもあるが、年中雪に覆われているフラヒヤ山脈の源泉から湧き出る主流に雪解け水で作られた支流が合流したり河沿いに積もった雪からも冷水をたっぷりと回収してくる為、繁殖期の終わりを感ぜられつつある六月中旬でも、交易船が行き来できるくらいの深さがある場所ですえくつきりと川底の様子が見える透明な水は氷を砕いてそのまま流しているんじゃないかというくらいに冷たかった。この時期ですらこんななので、他地方の河川では生態系の頂点に近い位置に君臨する巨大ワニ・ジャングルガビアルすら棲息していない。お蔭で人々は安心して交易路に利用できているのだが。

そんな子供の水遊びも五分で凍りつくヒヤック河の北ゴルドラに入った辺りに、一つの樽がどんぶらこ、どんぶらこと流されていた。水を吸ってほとんど黒く湿っている為ほとんど見えなくなっているが、木製の樽の表面には茶色い塗料でデカデカと肉球のスタンプが捺されている。

さすらいのアイルーが仮の寝袋代わりに持ち歩く樽だ。

辛い旅路の末、ようやく新天地を見付けたアイルーが捨てた物ではない。樽は彼らにとって主人に出会うまでの旅の必需品であり象徴。彼らは自分を受け入れてくれる人間を見付けると、決して主人

を裏切らないという意味を込めて、さすらいに必要な樽をその場で粉碎するのだ。

プカプカ水面を上下する樽はすっかり蓋が閉まっていた。

水面から上に出ている体積から見て、単に材質の浮力だけで浮かんでいるのではなく、中にまだ空気が入っているらしい。

そして中には、一匹のアイルーがいた。

口からフー、フー、と白い吐息を漏らし、すっかり濡れそぼってボサボサになったアメシヨ一の毛並みの体を毛皮を引き寄せるようにして丸め、寒さでブルブル震えている。

（さぶいさぶいさぶいさぶいさぶいニヤー！）

心の中でアイルーは叫ぶ。本当に叫びたかったが、口が悴^{かし}んでもごもごとしか動かない。

周りを氷水に囲まれていて、中は完全に天然の冷凍庫状態。冷度の空気に全身がキンキンと痛む。ブルツと身動きすると、感覚がなくなりそうな足もとで侵入してきた水がピチャリと揺れた。

（うう、やばいニヤ……これはかつてニヤい生命の危機ニヤ。救護を辞めて旅に出て以来、樹海でヒプノックの巣に転がり落ちて食べられそうにニヤったり密林で滝から落っこちて溺れ死にそうにニヤったり砂漠で足を滑らせて砂流に突っ込んで生き埋めにニヤりそうにニヤったり人間の街に入ろうとして塀を伝っていたら不意の振動に足を踏み外して砦に落ちちゃって巨龍に踏み潰されそうにニヤったりしてきたけど、ここに来て逃げ場のニヤい完全密室冷凍死ニヤんてー！）

なんかもう軽く人生を振り返り出したという自身の精神的危機にも気付かないアイルー！。

樽は河にダイブした直後から水をガンガン吸収して膨張してくれたお蔭でもうこれ以上浸水してくる事は無さそうだが、代わりに外の光の一切を遮断されているので真っ暗で、この闇がまた凍える心身を追い詰めてくる。

そもそも、何故こんな状況になったのか。

（まったく迂闊だったニヤ……）

脳内の人生メモリアル映像がつい数時間前に差し掛かった所で、アイルーは白い空気の塊を大きく吐き出す。体内の温度が籠った吐息は一瞬だけ凍える体に温かみを与えてくれたが、それは一瞬で消え去り余計な寒さに襲われる。

こうならないようになるべく細い呼吸に抑えていた事を思い出したアイルーは全身の毛を逆立てブルルと震えながら、二重に後悔。（夢にまで見たドスマタビを発見した興奮の余り、自分の樽に引っ掛かって河にダイブしてしまうニヤンて……本当に迂闊だったニヤ……）

それは本日お昼時の事だった。

就職活動という名の旅真つ最中のアイルーは、この日、より辺境の地域ならば猫の手も借りたい人はよりたくさんいるだろう・という希望的観測からフラヒヤ山脈を登っていた。

目指すは山脈最奥にある人間の集落。

その途中、周辺の山々や麓の澄んだ河なんかが一望できるちよつといい眺めの高台で休憩する事にしたアイルーは適当な岩を探すと樽を脇に降ろし、自身も岩に腰を降ろした。そこで気持ちいい風に当たりながら小腹を満たしていたのだが、

ふと、視界の隅で風に揺れる何かを捉えた。

自然の中で生きている生物は例外なく、自分以外に動くものには敏感だ。

目下にネコ科の瞳を向けたアイルーは、瞬間食事を喉に詰まらせる所だった。どんどん胸を叩いて無理やり詰まり掛けた食事を飲み下し、アイルーは目を皿のようにして再確認する。

見間違えようもなかった。

そこには全てのアイルーが垂涎として懂れる、あのマタタビの王様が。

生きている内に一度は手にしたい物ランキングアイルー部門満場一致で第一位の、夢のお宝が。

ウエルカム。君が来るのを待っていたよ。さあ、思う存分私にじやれつきたまえ！

そう言つて手招きしているかのように、風に吹かれてゆらゆら揺れていた。

「ンミヤ——！！」

認識と同時にアイルーはドスマタビに飛び掛かった。他のあらゆる思考どころか体を動かす脳の命令すらすつとばす勢いだ。キャツアイズは全力で数メートル下の花にフルフォーカスでロックオン完了いつでもイケますというかもうすでにイキました！

ガコツ、と脇に置いておいた樽に足を引っ掛けたのはその時だ。

「ニヤ？」

間拔けな声を出したアイルーの世界が回る。どんな偶然が働いたのか、気付いたらアイルーは樽にすっぽり収まっていた。そして樽はゴロゴロと凄い勢いで斜面を転がり始める。

「ニヤ？ ニヤ？」

何が起きたのか理解が追い付かない。

急に体が何かに悶^{つか}えたように動かなくなり、視界がグルグル回る中、アイルーはドスマタビを見詰め続けた。

ぐんぐん離れていくドスマタビは、風に傾き、まるで踏ん返り返っているような恰好で、アイルーを見下ろす。

薄汚い無職のノラネコごときが吾輩に手を触れようなど、おこがましいわ。カー、ペッ！

そんな事を言われた気がして、

「そんニヤ——！！」

悲鳴の尾を引きながらアイルーは麓に見えていた河へザブンしていった。

（く、せめて、樽を逆側に置いていれば、こんニヤ事にはニヤらニヤかったのに……！）

そうすれば今頃ドスマタビと至福の時を過ごしていたに違いな
い。もしかしたら人生でたった一度だったかもしれないチャンスに
間違いなく人生最大の失敗を犯してしまった。

心の底から悔やまれてならない。マジで。

そんなこんなで、樽に詰まったまま冷え冷えの河にダイブした所
でようやく事態を理解し、水没を防ぐため直ぐ様樽の蓋を締めたが
所詮作りはおざなりなネコの樽は隙間からガシガシ浸水してきて「
ニギヤーしまったこれ逆効果ニヤー！」と急いで樽から脱出しよう
とするも無駄に高い吸水性を発揮した木材はもう膨張し出していて
蓋もすでにガツチリバツチリ固く閉ざされアイルーの筋力では開け
られなくなっており「ニヤわー完全に閉じ込められたニヤ誰か助け
て水攻め死ぬニヤー！」とテンパってる内に膨張が進んで隙間が閉
じ「よっしゃーニヤんか知らニヤいけど結果オーライニヤー！」と
安心するのも束の間止まらない膨張でパンパンの風船みたいにはっ
つんぱっつん状態になった樽がギュギュギュギギと嫌な音で唸り始
めた事に気付いてガンガン室温が下降していく暗闇の樽の中下手に
暴れて壊れたら困るので大人しく丸まり今に至る。

（ああ、こんな寒い日は暖炉の前で丸くなっているのがネコの生き
様ってもんニヤのに……どうしてオイラはびしょ濡れで冷たい樽の
中丸くニヤっているんだろうニヤア……このまま凍え死ぬのかニヤ
ア……）

別に今日は寒くない。河の水がいつものように冷たいだけである。

あ、だんだん^{まふた}瞼が重たくなってきた。

どうせ暗闇なのだ。目を開けていても見える物は何もない。

なのに、どうして背景が暖色に彩られた風景が見えているのだろ
う。

そうかこれ幻覚だ。

（どうせ同じ丸くニヤるニヤら、オイラもあそこで丸くニヤりたい

ニヤ……)

いつかの雪降る村で格子窓の外から垣間見た“コタツ”とかいう人間の道具……あれに入って丸くなってる雇われネコの、あの幸せそうな顔が鮮明に蘇る。“コタツ”の上のミカンが妙においしそうだった。

(お腹減ったニヤア。そういえばお昼中途半端に終わっちゃったんだったニヤア)

あの時も自分は、クビになる原因になった騒動(雪掻きを手早く済ませようとして爆弾を使用し食糧庫全焼)で食べそびれ、お腹を鳴らしながら雪が降りしきる冷たい地面に肉球の足跡を付けていた。

ああ、クビといえば、

(――あの赤虎の子アイルーはどうしたかニヤ……)

弱り切りぼんやりと思ひ出に耽るアイルーはふと、前に訪れた人間の街で見掛けた自分と同じとあるさすらいのアイルーの事を思い出す。

元救護アイルーという履歴からいつものようにすぐに笑顔で迎え入れられたまでは良かったものの、医療以外のあらゆる面で凄まじいドベ才能を持つこのアイルーはいつものように大失敗を三回程(手を滑らせて預かったお客さんの大切な鞆を暖炉へ焼却↓旦那さんお気に入り建て付け壁時計を磨こうとしてバランスを崩し頭から突っ込んで文字盤を粉碎↓なんとか挽回しようと必死に働き回った結果自分で立て掛けたモップに足を引っかけ建物の上階部分からスッ飛んでしまい特別なお客さんと談話していた旦那さんの頭の上に落っこちてうっかり爪に引っ掛けたカツラを剥ぎ取る所か八つ裂き)やらかした所で「やつぱ君、クビ」といつものように見限られたある日の事だ。最後のが決定的だった。

「はぁー、またやってしまったニヤ……。どうしてこうオイラは不器用なのかニヤア……」

採用から解雇まで僅か二時間。このアイルーの就活史上ワースト3に入るスピード失業だった。

ちなみに大抵はその日限り。最長で三日だ。

トボトボと街を歩くアメシヨ一の毛並みに、塩っ辛い夕焼けが当たる。

（うつかり卵を壊しちゃって死ぬほどランポスに追い回されニヤがらも、ようやく辿り着いた街だったのに、結局ここでもオイラは旦那さんにニヤってくれるヒトを見付けられニヤイのかニヤ……）

アンニユイに西日を見詰める。綺麗なアンチクシヨ一だった。すると、前方から「お願いしますニヤ！」という叫び声が聞こえてきた。

顔を前に戻すと、一匹のアイルーが建物の裏口の前で困った風に佇む人間を見上げ、必死に何かを訴えている所だった。

アイルーは足を止める。前方で必死なアイルーは珍しい赤虎の毛並みをしていたが、立ち止まった理由はそこではない。

「そうは言ってもねえ、アイルーとは言え流石に子供は働かせられないでしょ」

ぼりぼり頭を掻く人間に、

「こ、子供じゃないですニヤ！ これでも拙僧は既に成年に達した立派な大人ですのニヤ！」

変わった一人称で言い募る赤虎のアイルー。その体軀は、平均的な大人のアイルーの三分の二程度しかなかったのだ。「小柄なんです」で言い逃れができるレベルではない。アイルーから見ても、どこからどう見たって子供のアイルーにしか見えなかった。

（ニヤにか、人間の社会で働かニヤいといけニヤい事情でもあるのかニヤ？ まだ子供ニヤのに、竜人族の斡旋の手も借りニヤいで……

…大変だニヤア）

小さなアイルーの身に遭ったであろう不幸を勝手に予想しながら、アイルーは彼らの遣り取りを見守った。

「大人って……まったく。そんなちっこい身体で何ができるって言

うんだい」

「小さき身体は……生まれつきなのですニヤ。でも、仕事はちゃんと一人前、いや、それ以上こなして見せますニヤ！」

「生まれつきねえ」

「お願いしますニヤ！ 拙僧は武僧の生まれ。積んできた鍛錬には自信がありますニヤ！ そんじょそこらのアイルーニヤんかには絶対引けは取りませんニヤ！」

「うーん、でもねえ」

赤虎のアイルーは必至にアピールを続け、「とにかく一回だけでも使ってみて頂けないでしょうかニヤ！」と懇願するが、人間からは芳しい反応が中々返ってこない。

心情的に、アイルーは小さなアイルーを応援しながら見ていたのだが、やがて、

「じゃあもう少し大きくなったら考えてあげるから、その時にまたおいで」

人間はそう締め括ると、小さなアイルーの呼び止める声を見無視して建物の中に消えていってしまった。

人間が完全に見えなくなり、少しの間悔しそうに目の前の建物を見上げる小さなアイルー。その後耳をしゅんと垂れさせて、恐らく自分と同じ表情をしながら、トボトボとその場を去っていった。

（あの子が無事、いい旦那さんに巡り合えていればいいニヤア）

話をすれば一度は使って貰えるこのアイルーにとって、世の中には話をまともに聞いて貰う事すら叶わないアイルーがいるという事実は割と大きな衝撃だった。それもまだ子供がだ。

あの小さなアイルーは自分の事なんて顔も見えていないだろうが、あの時の小さい身体で必死に頑張る姿には随分励まされた。

ああいう子こそ、よい旦那さんに恵まれるべきだ。

よし。自分も頑張ろう。

そう思えたのだ。

まあ、そう奮起して頑張ったあの街でも、余計やる気が空回りしただけで、結局十件程回った所でブラックリストに入れられたようなので一週間で出てきてしまったが。

（やっぱオイラは、救護しか向いてニヤいのかニヤア……）

フー、と細い息を長く吐く。

（ニヤア、貴女はオイラの、ニヤにを見てあんニヤ事を言ったのニヤ？）

息が白い。

だが最後に自分が助けられなかったハンターの女性は、もっと白い純白の髪をしていた。

『……ふふ、……優しいの……ね……タン……救護に……しとくには……もつたいないわ……』

名前を訊いてきたハンターは初めてだった。

助けられなかったのも初めてだった。

無力感に咽び泣くアイルーに、彼女は今にも消えて無くなってしまいうような真つ白な笑顔を浮かべて、そう言ったのだ。

（優しい……オイラは本当に優しいのかニヤ）

そうかもしれない。一人助けられなかったくらいで救護を辞めるアイルーはそういないだろう。その程度の悲劇なんてこの世界には星の数程ある。あの時コンビを組んだアイルーだってあの後も救護を続けた。

（でも、優しいだけじゃ、人間社会で役に立てニヤいのニヤ）

寧ろ、“優しい”から“救護に向かない”と言われていたのかも。しかしそうになると、自分には何も残らないのでは無いか？
自分の支えすら否定し掛けて、アイルーは自身に絶望した。

（ああ、これはダメニヤ……あの人の言葉まで疑うくらいニヤら、もう何も考えたくニヤいニヤよ……ニヤム、眠いし……このまま眠れば、寒さもニヤくニヤるかニヤ……？）

実はさつきから呼吸がし辛い。樽の膨張は水だけでなく空気も遮

断してしまっている為、そろそろ酸欠になり掛けていた。

おまけに、水は隙間が無くても木材を浸透して来れるので、微量ながらも確実に樽内の水高は増していた。いつの間にかアイルーの腰まで浸水している。

だがアイルーはそれらの変化に全く気付かず、

（あ、ニヤンかあったかくニヤってきたニヤ。あったかい所まで流されたのかニヤ？ ニヤハ、気持ちいいニヤ）

ヒヤツク河は永久凍土に覆われたアクラ地方へと向かっている。

あったかい所とは真逆だ。

いよいよ命の灯はレッドゾーンに差し掛かっていた。

ピクン、と頭に張り付いていた耳が跳ねたのはその時だ。

意識から無くなるまで長く聞こえ続けていた水の音や樽の唸りに混じり、これまでに無かった異音を捉えたのだ。

ガツ、ガツ、ザリザリ。

衰弱した身体に緊張が戻ってくる。凍ったように固まっていた耳が別々に動き、新たな異音の正体を聞き分ける。

何か鋭い物が、明らかに何らかの意思を持って、樽の表面を引っ搔いている。そんな音だ。

考えられる事は一つ。表に牙を突き立てている誰かがいらっしやる。

（ウニャー！？ 凍死もしくは餓死かと思っていた所で、まさかの捕食エンドかニャー！？）

ガタガタガター！ と震え上がるアイルー。幾分今までの状態に情性的にでも慣れてきていただけに、今更目に見える恐怖が現れるなんて反則だ。「どうせなら痛くない死に方がいいニャー！」と涙するが相手は聞いちゃくれない。

ガッ！ と樽枠に何かが食い込んだ瞬間、グルンと樽が回転した。為すがままに中のアイルーも回転し、目が回る。次いで、

「そいや——！」

なんか遠くから少年のような高い掛け声が聞こえた気がしたが、

直後にザパア！ という音と共に襲い掛かってきた圧倒的な浮遊感に再びひっくり返る。

「ニヤに！？ ニヤンニヤ！？ 一体ニヤにが起こってるニヤ！？」
外の様子が見えず、混乱の極みに陥るアイルー。何度か経験した事がある、重力に引かれている感じに全感覚が塗り潰され、

バゴア！ と何代目になるか分からない樽が木端微塵に粉碎した。放り出されたアイルーはボテボテと跳ねて柔らかい土に抱き止められる。

ピヨピヨする頭を振りながら何とか地面に両手を突き、アイルーは辺りを見回した。暗闇にいたせいかチカチカしたが、そこは獣人族。視力はすぐに戻ってくる。

見えてきたのはどこかの農場だった。人間の村一つくらいは余裕で養えそうなくらい広い大農場だ。農場は柵に囲まれ、奥に見える集合住居らしき大きな建物からしか入れないようになっていた。だから、その人達が管理している農場なのかもしれない。

その先にある建物群も総じて文化レベルが高い。

どうやら山脈から下流域のどこかの街まで流されてきてしまったようだ、それで気付いた。

そこまで確認して、ハッと、自分が今まで収まっていた樽の行方を捜した。

自分が脱出できている以上、樽が粉碎したように見えたあの光景は間違いなく現実なのだが、アレが無いとこれから凄く困る。尤も、樽ならまた新たに調達すればいいだけなのだがそれはそれとして、たとえすぐに解雇されようとも、雇われもせずに粉碎してしまったというのがとても情けないような、恥ずかしいような事のように思うのだ。認めたくない。

そうしてアイルーは振り返り、

“彼ら”は目を合わせた。

アイルの背後に、ワナワナと震える人間の少年が口をあんどぐり開けて立っていた。

歳は十四か五くらい。背景に煌くヒヤツク河のように涼やかな水色の髪は野生的な レウスレイヤー だが、少年からは“野生的”というよりも“元気いっぱい”という印象を受ける。

何より特徴的なのは、顔の右半分程を覆い隠す分厚い眼帯。しかしその眼帯すら、この少年が着けていると子供がカッコ付けておしやれで着けているような微笑ましい雰囲気^{きふく}に思えてしまう。

そして、彼の手には釣り竿が握り締められていた。

アイルはしばし少年の持つ釣り竿を眺める。釣り糸の先を辿ると、そこにバラバラの材木が散乱していた。釣り針の先が引っ掛かっているのは樽の枠を形作る部品だったモノ。

「……………」

「……………」

沈黙。

アイルは、この少年が自分を樽ごと釣り上げて助けてくれたらしい事を理解した。まあ、少年が何を思つて河に浮かぶ樽を釣り上げたのかは知らないが、結果的にそれで自分は助かったのだ。御礼を言いたい。

が。

（ニヤ、ニヤんか怖いんニヤけど……この子大丈夫ニヤ？）

こつちを一心不乱に凝視してくる少年の隠^{かく}されていない片目が妙な光を湛^{たた}えている気がする。

と、

「むかーしむかーし……………」

「ウニヤ?!」

いきなり少年が厳かなトーンで呟いた。不意を突かれてビクツとするアイル。少年は気にせず、

「ある日ある所で、お爺さんが河で釣りをしていました。するとどんぶらこ、どんぶらこ河から樽が流れてきました。気になったお

爺さんは思わずその樽を一本釣りしました」

随分とエナジーに漲ってる爺さんらしい。

「すると樽の中から一匹のぐしょぐしょに汚れたアイルーが出てきました。アメシヨ一の毛並みも泥で真っ黒です」

アイルーは自分の体を見下ろした。濡れた体で畑に突っ込んだせいでドロドロだ。

「可哀想に思ったお爺さんはアイルーの体を洗って綺麗にしてやりました」

ひゅん、と少年が竿を振る。針は離れた所にあつたバケツを引っ掛け、そのまま河へと叩き込む。もう一度少年が竿を振ると、今度はそのバケツがたつぷりと水を掬ってアイルーへ突撃してきた。

ダパーン！ 盛大に水をぶっ掛けられ、ドロが洗い流されるアイルー。代わりにさらにビツシヨリ。

ポタポタ体毛という体毛から水滴を滴らせるアイルーは何も言えずに茫然と少年を見上げた。

取り敢えず、絶対この少年は可哀想がっていないと思った。

「こうしてなんやかんやでお爺さんと一緒に暮らすことになったアイルーは、色々アレやコレやがあつた末、悪の根源を討ち滅ぼす旅に出る事になりました」

（めっちゃ端折り出したニヤ！？）

「めでたしめでたし」

（そしてそこで終わるのニヤ！？ 悪の根源どうなったニヤ！？ 旅に出たアイルーどうなったニヤ——！？）

いつの間にか聞き入っていたアイルーは心の中で絶叫する。少年はうんうん満足そうに頷くと、

「どう？」

それが普段の調子なんだろう、楽しそうな高いトーンで少年は問い掛けてくる。

「いやどうと言われてもニヤ……」

「こういうシチュエーションを待っていた……！」

聞いていない。感極まったようにグツ！と拳を握り込んで空を仰いでいる。水色の髪がよく映える、雲一つない茜色の空だ。

なんだか付いていけないが、とにかく会話の流れが出来上がったのでアイルはこの機を逃すまいと、弱った体で懸命にしゃっちょこばり、

「あ、あの！ 助けてくれて、どうもありがとうニヤ！ アンタオイラの命の恩人ニヤ！」

ペコッと頭を下げる。

が、アイルはその勢いを止められず、拍子にひっくり返ってしまった。

「おっと」

ぱっと少年がしゃがみ込み、「うわっ冷た!？」アイルを支える。

アイルはもう自分の情けなさがどうしようもなく情けなくて泣きたくなった。

「ウ、ウニヤ……すいませんニヤ……本当にオイラ何をやってもドベで……お礼言うつもりがまた迷惑を……」

「うん？ まゝ何でもいいけど、あんまり無理しない方がいいよ」

「でも、服が……」

びしょ濡れのアイルを抱き止めた事で、少年の服にじわ〜と水が移ってしまっていた。

「あつははー。洗えばいいいいこんなもん」

少年は笑って答え、冷え切ったアイルを離さない。釣り竿の持ち手を整えると、そのままアイルを抱き上げ、奥の建物に向かって歩き出す。

（ニヤんて、温かい人ニヤんだろう……）

少年の胸で丸くなりながら、アイルは包み込まれるようなヒトの温もりを全身に感じた。体の芯の中心で暖炉が燃えているような温かさ。“コタツ”で丸くなっているって、きつとこんな感じなのかもしれない。

（こんニヤ人が旦那さんにニヤってくれたら、オイラは……）

今まで思い描いてきたどんな妄想よりも、そうもしかしたらドスマタビを手に入れた夢想よりも幸せかもしれない生活を思い描き、はっとしてぶんぶんとその可能性を振り払う。

もしこれでこの人に受け入れて貰えたとして、それでもいつものように失敗したら……いや、絶対に失敗するに決まっている。今だってすでに迷惑を掛けている。自分が温められている分だけ、少年は冷たい思いをしているのだ。これ以上迷惑を掛けたら、——そうして、もし、この人にまで今までの旦那さん達と同じ言葉で見放されたら。

（オイラもう、人間社会に出られニヤいニヤ……）

前を見据える少年の顔を見上げる。近くで見ると良く分かる。隠れていない方の少年の左目は、星瞬く夜空のように澄み渡った光が輝く、深いマリンブルーの瞳をしていた。

と、

（……ンニヤ？ この目、オイラどつかで——）

記憶が掘り起こされる。今の自分を支えるあの人の表情。

それが克明になる前に、

「あ、そうだ。お前、名前なんていうの？」

少年が視線を落としてきた。

急に向いてきた、アイルーとはいえ自分みたいなダメネコなんかよりは断然円らな深いマリンブルーに真正面から射抜かれ、アイルーは無意識に肩を張る。

「ニヤ、はい。タンと申しますニヤ」

「タン？ あははー。バッチイ名前」

「ンニヤ！？」

唐突にあんまりな意表を突かれ、思わず声が出るタン。どうやら“タン”で“痰^{たん}”を連想されたらしい。

行く先々で散々罵られてきたが、名前に関して言われたのはこれで二度目だった。

前は、八年前。一生忘れないであろう、鮮血に彩られた、純白の女性から。

（そうニヤ、この人の笑顔……あの人に似てるのニヤ）

あの人の笑顔は死に際の消えそうなものしか知らないが、もし元気がだったら、普段はこんな笑顔だったに違いない。この少年の笑顔をあの女性に当て嵌めてみると、とても自然だ。

だが、この少年の顔にはもう一人、別の面影がある。

この面影は誰だったか――

「じゃ、タン」

答えに辿り着く前に、少年が再び声を掛けてきた。

キョトンとするタンに向かって、少年は抜群の笑顔でこう言った。

「これからヨロシク」

……なにを言われたのか、理解するのに十五秒くらい掛かった。

「……………ニヤ？」

声が出たのは、言われた内容が信じられなくて。

タンの反応を見て、少年は眉を顰める。

「にや？　もしかして、もう誰かに雇われてたりするの？　でも樽に入ってたじゃん。さすらいじゃないの？」

「い、いや、今はオイラに旦那さんはいニヤいけど……でも、」

「そ。ならいいじゃん」

一転して少年は笑顔に戻り、

「ウチに来てよ、タン」

はつきりと、他に解釈のしようがない言葉をくれた。

プルプルと、タンは自分の体が震えるのを自覚した。それは決して、寒さからではない。

だが。

「ダ、ダメニヤ……」

タンは蚊の鳴くような声で答えた。

少年の顔が今度は純粹に不思議そうな顔になる。

「どうして？」

「だって、オイラは自分でも呆れるくらいのダメネコニヤ。こんニヤに良くして貰って、恩返しもできニヤいのは情けニヤいけど……でも、オイラが仕事をしようとする、アンタにそれ以上の迷惑を掛けてしまうのニヤ」

「俺まだ何もしてないけど」

「そんニヤ事ニヤいニヤ……アンタオイラを助けてくれたニヤ。今も温めてくれてるニヤ。でもオイラは、人間に迷惑しか掛けられニヤい……そうしたらアンタは……アンタも、オイラを嫌いになつてしまうのニヤ。今までずっとそうだったニヤ。でも……アンタみたいなヒトにまで嫌われるニヤんて、……そんニヤのオイラは……それだけは、それだけはっ！」

少年の胸元に小さな拳を当てて、タンは嗚咽を漏らし始めた。

本当は、少年の申し出は願っても無い事のハズなのに、それを受ければ必ずいつか大失敗し、少年に嫌われる。それが怖い。

しかし、こうして折角誘ってくれている少年の好意を断って、少年に落胆されてしまうのも、同時に怖い。

でもどちらの方が嫌かといえば、それは、これ以上迷惑を掛けてこの人に“ダメなヤツ”と見放される方が嫌だった。

そんな、葛藤する事自体に自己嫌悪してしまいそうな葛藤の中にあるタンの心境を、

「ダメでもいいよ」

少年は我が物顔で踏み込み、引き裂き、一言で蹴散らす。
ハッとタンは顔を上げる。

少年は眩しいくらいの純粹な笑顔で、真っ直ぐにタンへ笑い掛けていた。

「タンが今までどういう所でどんな生活を送ってきたのかは知らない

いけどさ、ウチは別に、ダメなヤツでもいいよ。だってすでにウチには色々いるしね。へたれとかド変態とかお嬢様とかモスとか元氣印とかナルシストとか。んー、最近だと神業レベルの奇跡的方向音痴かな」

建物の方から、バーン！ と扉が勢いよく開く音がした。誰かが農場へ出てきたらしい。少年はそっちへ手首を動かして釣り竿を振りながら、

「仕事ができなくなっちゃって、誰も気にしないよ。できないヤツがいるなら協力してやればいい。分からないヤツがいるなら教えてやればいい。誰かが失敗しちゃったら皆で助けてやればいい」

ドタタター！ と誰かが「かいちょ———！」叫びながら凄じスピードで向かってくる足音がする。

少年は嬉しそうに、走り寄ってくる誰かを見詰めながら、

「だって俺達は、家族だから」

「きゃあっ！！ かかか会長会長もしかして今のは結婚しようってゆうその、こうププ、ププポーズっ！？」

タンの耳元で凄じ女の子の子女の歓声が上がった。「あはは、全然違うよー」と答える少年の声がキンキンする耳鳴りで遠く聞こえる。

「ガーン！」と口に出してオーバーにガツカリする突撃してきた人物は、年齢は少年と大して変わらなくらいの、桜色の髪を頭の両側で少し纏めた ザザミ結び にしている、絵のようにかわいい顔をした少女だった。

彼女はあまり細かい事には拘らない性格なのかすぐにガバーツと立ち直り、

「それよりもっ！ 最近あんまり帰って来てるならそうと早く言って下さいよどうしてたんですかそのアイルーちゃんきやああああ冷たい大変っ！ どうしようっ！？」

「さっきそこで釣ったんだ」

「釣った！？ 河でアイルーを釣り上げるなんて、相変わらず素敵っ！ 缶詰や長靴なんて目じゃないわっ！ なんてエキセントリックなのさすが会長っ！」

「でこんな感じだから、ケイン呼んできてくんない？」

「分りましたっ！ 待っててねアイルーちゃんすぐにケインちゃん呼んで来るからねっ！ 死んじゃダメだよっ！」

元気よく叫ぶやいなや、少女は「ケインちゃ——ん！」ドタタター！ と建物の方へリターンして行っただ。

突風のような勢いに圧され捲って何も言えず、啞然と少女を見送るタン。見ると建物の農場に面した窓からは、何人かが少女の絶叫に何事かと顔を覗かせ、少年を発見すると手を上げたり階下に降りる為部屋の奥へ引っ込んでいたりしている。

少年は「おい」と手を上げてくる人達に竿を振り返しながら、

「今の所、ヒトが十三人のアイルーが九匹だから……」

またあの笑顔を見せて、

「タンで二十三人家族だ」

タンは黙ってその言葉を聞きながら、少年を見詰め返していた。

この顔の輪郭は、そうだ思い出した。

「な！」

期待に満ちた声で呼び掛ける、瞳の色と表情はあの純白の女性と同じで、輪郭はあの時の、あの人の夫という、虹髪のハンターに似ている少年。

バクバク心臓が高鳴る。もしか、そんなまさか。思いながら、タンは尋ねた。

「えっと、旦那さん、名前……」
ニヤまえ

するりと出てきてしまった、主人に対する呼称。

あっ、と気付いた時にはもう遅く、タンの新しい旦那さんは自分の呼称が変わった事への嬉しさと、うつかりしてた、という感情が混ざった表情を浮かべた後、やっぱり笑顔で、名乗りを上げた。

「俺はドルフィン。ドルフィン・ホーマー。そして、」

一旦区切って、目の前まで来た建物の扉を肩で押し開き、その扉の奥に集まっている数人の家族達を見回しながら、

「K G 街の獵団 J P ハンター連合会 の会長で、剣全般を扱うハンターだ。称号は 天剣。ハンター名は Dolphin ね」

ドルフィン・ホーマー。家族に囲まれ、楽しそうにニコニコしている少年の名前。

（ドルフィン……確か、あの人が呼んでた名前に『フィンくん』ってのがあった気がするニヤ。ドルフィンニヤら、『フィンくん』って呼ばれてもおかしくニヤい……でも、）

やはりそうそうそんな偶然は起きないらしい。

（ホーマーニヤんて姓じゃニヤかったニヤ。やっぱり、ただの他人の空似かニヤ）

それはそうだ。後から聞いた話では、そもそも彼女の子供達はジオ・ワンドレオにいる彼女の両親が引き取ったという。辺境最大の街で身内と暮らせるのに、こんな北方の僻地にいるハズが無い。

タンは知らなかった。彼女の息子の一人が、蒼火竜に北へ連れ去られた事を。

タンは後から知る事になる。ドルフィンの名乗る姓名が、本当は誰のモノなのかを。

ただ、タンが自分とドルフィンのどんな因縁に気付けたとしても、今言つべき言葉は何も変わらなかった。

「旦那さん」

「ん？」

家族を引き連れて広いロビーを闊歩するドルフィンが見降ろしてくる。

タンは抱き抱えられながら、深く頭を下げた。

「今日から、お世話になりますニヤ！」

タンの様子を気にしていた後ろのギャラリー達から歓声が溢れる。

「うん！ ヨロシク！」

それらの誰にも負けなくらい嬉しそうに、ドルフィンは応えてさらにギュッとタンを抱き締めた。

ようやく見付けた新しい旦那さんの、流星群にも負けなくらいに輝かしい笑顔に迎えられ、

この日、一匹のダメネコの新しい人生が始まった。

scene 5 - 1 / 1 あめ のち はれ (後書き)

許可は貰いましたよ？

忘れるくらい前に (↑)

という訳で、途中で出てきた赤虎の小さなアイルの活躍は、旅がらす先生の『魂の樹系図』でご覧下さい。面白いですよ。

人によって大切にしないモノは違うんだな・とか、そういういい事を教えてくれる作品でもあり、若者達が夢に向かっていく作品でもあり、優秀だけど色々ダメなお姉さんがデレる作品でもあり、ネコが空を飛んでいく作品です。

たまにウチのド変態の親父とか猪とかもいるんで、是非(笑)

あ、旅がらす先生、彼の口調で何か研究不足な点がアレば半切れ以下でご指摘下さい。すぐに直します。マジ切れされたら泣いて謝ってから削除します；

さて、短編5編。のつもりで実は『虹髪』の三分の二の文字数に達した後日談でした。

ぶっちゃけ作者の第一印象としては、「なにかしらこの伏線のオンパレード？ 全部回収するのに何年掛かんのかしら？」と感じです。

白いドレスの少女出しちゃったよ…… やっちゃったよ…… あゝあ

……

その他ん？ 何だろうこの無駄描写？ と思われる箇所はほぼ間違いない伏線です。隠し切れてなきなのよあっはっはっはっはっ。

まあ、年月掛かっても全部書き尽くす覚悟を決めたんだという事にしといて下さい（――；）

そしてついに一休もオリジナルの地名をチラホラ出しました。

元々の世界観を崩さず舞台はオリジナルが一休の二次創作に対する理想なんで、いつかそちらの話にも持っていきたいですね。もちろんそれ以前にアンチ二次創作であるという鉄壁を透過できていればの話ですが。

ところであらすじの“あの子”がタンなどと、誰か予想できた人いますかね？

読者の期待斜め上からど真ん中への変化球を狙ってみたんですけど。

とまで言っておきながらドルフィンも“あの子”に当て嵌められるかどうかは、まだ明言を避けておきます。彼には以前お姉さんが数人いるような事言わせてますし、KG街サイドの話を書くまではのらくらとはぐらかそうと思います。

では、次に何を書くかは分かりませんが、今回ちょっとやつぱり色々個人的に危険だったので、次の投稿はだいふくさま1号が復活してからになると思います。

新年度には流石に、復活して欲しいな～ですが、今年中には王道か外道のモンハン長編進出を目指すので、出てきたらまた読んでやって下さい。

いつかまたどこかでお会いすることを楽しみにしておりますm（

――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3880j/>

涙 八年後 笑顔 ~あめ のち はれ~

2010年12月18日22時11分発行